

二次元

60号まであと一歩!

cover illustration by
トモセシュンサク

2D DREAM MAGAZINE

2D DREAM MAGAZINE

成年向け雑誌

表紙&ピンナップテレホンカード
応募者全員サービス

立ち読み版

強制露出

今号の特集

大人気えっちマンガ&カラーマンガ

門の巫女 連載最終回!

無望菜志

超昂閃忍ハルカ

MISS BLACK

ばふえ / おおたけし

琴慈 / 夢乃狸 / e4

特別
付録

ピンナップポスター
トモセシュンサク
いっせー / いるまかみり

新連載小説

新たな変身!
ヒロイン誕生!
守護聖女
プリズムセイバー
空蟬×くまうち&船虫

大好評連載&読み切り小説

蒼井村正×或十せねか

狩野景×緑木邑

千夜詠×牡丹

Kyphosus×トモセシュンサク

山本沙姫×春夏冬工

愛枝直×パインバ

DIGITAL
EDITION
デジタル版

vol.59

2011

08



異世界からの侵略者に立ち向かう
変身ヒロイン新連載!!

守護聖女

prism saber

プリズムセイバー

乙女たちの散華

著者近刊
好評発売中!



「スレイブドール
紅眼の女特務捜査官」

第1話 発現

小説 NOVEL 空蟬 挿絵 ILLUSTRATION くまっち & 船虫

原作 ORIGINAL Lusterise

世界史の教科書を読み上げる教師の声が、まるで異世界の呪文のように聞こえる。

「ふわ……あ」

おりしも、昼食を終えたばかりの午後の晴天。初夏の爽やかな日差しが窓越しに頬に当たって、眠気を誘ってくれていた。

「……ルリナさん。睡眠不足、ですか？」

「ん、斗真ちゃんが寝かしてくれなくて」

隣席。窓側二列目最後尾に座る友人の言葉が、そのものズバリな内容だったために、苦笑い。腰にまで届く長さの黒髪を指先で弄り弄り巻き取りつつ、ペロと舌を出し笑顔でごまかそうと試みる。

「……っ!? と、斗真君が……!?」

目をやれば、なぜか目いっぱい驚いた様子の親友の顔。茶がかったボブカットが今日もよく似合っている彼女は、どうやら見事な勘違いをしてくれたらしい。

一瞬だけ大きな声を出しかけてはつと口を押さえた親友に、改めて説明をする必要があった。

「斗真ちゃん『このゲームに勝つまで帰さない』って、夜遅くまでテレビゲームつき合わされて」

隣の家に住むゲームの腕前からきしな幼馴染みにつき合わせられ、結局睡眠時間を削るはめになった。

そこまで説明してようやく、隣席の彼女の表情に安堵の笑みが浮かぶ。

口元に手を当てて、上品にクスリと微笑む彼女を見るたびに「敵わないなあ」、そう思われる。同性ですらドキッとするのだ。異性であれば言わずもなだろう。

——神楽坂珠優。柔らかなショートヘアにほんわか笑顔がよく似合う彼女もまた、小学時代からの幼馴染みのひとりだ。

面倒見よく誰に対しても物腰柔らか。少々おっとりすぎる嫌いはあるものの、おしとやかで落ち着き

があり、協調性も上々。おまけに成績は学年でも常に上位をキープしている。元華族の由緒正しき家柄で、父親が地元企業を束ねる財団を経営していた。

直情的な自分とはなにもかも正反対な少女と、妙に気の合った友人となつて早十年。

眠気を誘う呪文が詠唱されている本日五時限目の世界史は、週に一度の選択授業。地理と世界史の選択制で、松組と藤組のふたクラス合同で行われる。地理を選択した生徒が松組の教室を使用、世界史選択者は藤組、という按配で、今日この日だけは十年

来の親友——クラスが違ふ彼女と一緒に椅子を並べられた。

「ふあ……」

隣に珠優がいる。それだけで気が和らぎ、よけいに眠気が膨張してゆく。

「あの。辛いうなら保健室に……」

落ち着いた珠優の口調が心地よくて、それがまたいっそう眠気を誘うんだもの——だなんて。告げたらきつと、困ったようにこちらを見つめて長いまつ毛を瞬かせる。想像たやすい光景を実際の前に再現してみようかしら。あくびを噛み殺した喉の奥にウキウキとした期待が湧き起こる。

（……たゆん）

視線の先。隣の机に乗っかるふたつのふくらみが不意に——自然と吸い込まれるように、視界に映り込んできた。

学園一の爆乳のぬしとして、クラスの男子の注目を一手に集めるダブル・チョモランマ。制服の胸元をこもり押し上げるそれは、個々が珠優当人の顔よりも確実に、ひと回り近く大きい。

（ひよつとして。ひよつとしなくても、また大きくなった……?）

同級生の女子に言わせれば「贅沢な悩み」なのだそうだが——珠優が大きな胸と、ふくやかな体型を

気にしている、ひいてはその部分ばかり見られることにコンプレックスを抱いていると知っているからだから、あえて本人の前では話題に出さない。

（私だって胸の悩みに関しては、わかるもん）

珠優ほどでないにしても、学園トップ3に数えられる自身のふくらみを、下から手のひらで持ち上げてみる。たっぷりとした重量感。制服越しでも手に余る乳肉が、持ち上げた分ふつと軽くなり。胸に解放感が広がった。

自分でさえ、こうなのだ。より大きな胸の珠優は、相当の労苦を日々味わっていることだろう。

胸なんて大きくても運動の際に邪魔になるだけだ。走るとブラをしていても揺れて擦れて痛む。サイズが合わなくなればブラのワイヤーに締めつけられて、やっぱり痛い。成長期には買い換える出費だって馬鹿にならなくて、ただでさえ苦しい一人暮らしの家計を逼迫させた。

男子にからかわれたり、時にはあからさまにスケベな視線で見られもする。卑猥な話のネタにされるのを聞いてしまったことさえあった。

（本当、イイことなんてなーんもないんだから）

なのに、なぜ。

「あの。ルリナさん？ どこを見て……」

できるだけ見ないように心がけているというのに。なぜこんなにも珠優の胸は視線を惹きつけるのか。一度目に入ってしまったら最後。ついむんずとわしづかみにしたい衝動に駆られる。無論、自身の胸に対しては一切感じない衝動である。

「生命の神秘ね」

「……?」

よくわからないといった風に、小首をかしげている。そこにまたキュンとさせられる。

（……そっか）

珠優の胸自体でなく、事あるごとに可愛い反応を

示してくれるその様が見たくて。ついつい構いたくなるのだ。

「そっか、そっかあ」

「え、えつと？」

やはり彼女との触れあいは、心地いい。ウブな反応が庇護欲と——悪戯心をも刺激するからだ。

ひよつとして。もしかして。男子たちもこれを期待してるのでは、と。少しだけ、連中が珠優に群がる理由がわかった気がした。

眠気もやや和らぎ、初夏の日差しと親友の様子に温められたハートがウキウキと躍りだす——はずだったのに。

「——篠宮。次、読んでくれ」

絶妙なタイミングで先生のご指名を賜った。

「ひゃっ、は、はいっ」

ふざけていた後ろめたさと不意を突かれたせいもあり、返事は上ずり、教室のそこかしこで忍び笑いが漏れる。頬染めつつ視線を隣席へと向けられ

「……二十四ページのここからですよ」

「さ、さんきゅうっ」

恩に着ます。ニコニコ笑顔をそつと拝んで教科書に目を通し。

「え、と……ん、んー。……読みます！」

周囲の忍び笑いをけん制するように、ことさら大きな咳払いをして、気合も充填。親友に励まされつつ、どうにか読みきることに成功した——。

——キンコン、カンコン。

「心機一転！」

チャイムが鳴り終え、六時限目は待ちに待った体育の授業だ。本日のメニューは体育館でバレーボール。そしてこれまた引き続いての、松藤両組による合同授業である。

当然珠優と一緒にチームを組んでいた。

昼食後、しかも一日の終わりに体育なんて、何考えてんのと普段は思うところだけれど。五時限目の世界史での鬱憤を晴らすべく、今この時ばかりは張り切り度合いが違う。

（う……またブルマが）

体操服の上はそうでもないというのに。一週間ぶりに穿くブルマが、窮屈になっていた。

（お、お尻だけ太った？ それともウェストが）

「ルリナ、さん？」

「ん、んー。なんでもないよ？」

寒気がするような想像を振り払い、不思議顔の親友に手を振って答える。頬を叩く代わりに腿に食い込むブルマを引っ張り、ばちんと鳴らして気合注入。一旦試合が始まってしまえば、食い込みなんて気にしてる暇もなく。

「そおれっ！ アタック！」

ずびしっ！ と小気味よい音を立ててバレーボールが相手コートへと突き刺さる。

（くううう痛快。やつぱり私って身体動かすほうが向いてるんだわあ）

この一点でマイチームが逆転に成功。後ろでひとつにまとめた黒髪おさげを手で梳いて、うなじと額の汗をぬぐう。

「キャー！ やったー！」

チームメイトからの祝福の声にハイタッチで応え。珠優ちゃん

髪揺らしターンして——ばちっ。最後に控えめにやつてきた親友を抱き寄せ、喜びを分かち合った。

「む、むぎゅう……く、苦しいですルリナさんっ」

「あは。珠優ちゃんの身体が柔かいもんで、つい」これには見学していた男子連中から（男子は外でマラソンのはずなのに、さぼって見に来たらしい）やたら大きな歓声上がる。

「お、おい。聞いたか？」

「ああ、柔らかい……んだな。やつぱ」デヘデへとニタつく顔が非常にだらしがない。なぜか腰をモジモジさせてる子までいるのが不気味だ。

「はいはい。あつち向いちやダメだよー」

「え？ でもそれじゃ上手くプレーが……」

我が身を盾に、首かしげる親友の視界から外野の男子連中をシャットダウン。声までさえぎるわけにはいかないけれど、幸いプレーが始まれば喧騒で掻き消えてしまう。

「……っ。き、きました……！」

そうこうしているうちに相手チームの放ったボールが、珠優の真正面に飛んできた。

「落ち着いてやれば、だいじょーぶっ」

とりあえず落ち着くように声はかけたものの。ぼすんっ……。目測を誤った珠優のダブル・チョモランマにボールが激突。たつぷりとした肉感が見事にぶるんぶるんと縦に揺れて——。

「おっおっおっおっおう!!」

俄然盛り上がる外野席。

「やあんっ」

珠優が恥じらいながらしやがみ込んだものだから、なおいつそう男子の歓声が大波のごとく体育館にこだまする。

おかげで気を取られた相手から易々追加点を取れはした。

「え、えつと。ナイス……レシーブ？」

「うう。恥ずかしいです……」

男子に背を向けしやがみ込む親友の背をなでてやりながら。

（恥じらっているからだろうけど、男子にお尻向けるのは危険だぞ）

さりげなく彼女と男子の視線との間に身体を割り入れて、シャットアウト。

「くー、篠宮のやつ。邪魔だ邪魔！」

そんな声に、ンベツと舌を出して応えてやる。
(まったく。毎度毎度懲りない連中)

日々こうして珠優の貞操はこの私が守っているつ
てのに……。そんな風にひとりごち、また食い込み
の気になったブルマを引つ張った瞬間。

「俺は断然ルリナを推すね。見る、あの張りのある
ケツを」

(な、ななななな!!)

予想外の台詞が、風に乗って届けられる。顔が真っ
赤に火照るのを自覚して、あわてて男子連中のいる
方向に背を向け。

「ルリナ、さん? 顔が赤く……もごつ」

「な、なんでもないよ、うん!」

感じたままに口走りかけた親友の口を抱き締めて
ふさぎ、危うく胸の谷間で窒息させそうになる。

「確かに。取っつきやすい感はあるよな」

「神楽坂ちゃんほどでないしろ、あの……アタッ
ク決めた際に揺れるふくらみは捨てがたい」

(あーもううるさいうるさい!)

さっきまで外野の声が判別できないくらい騒がし
かったのに、なぜ。都合の悪い話ばかり鮮明に聞き
取れてしまうのか。

(おっぱいなら誰のでもいいのかあんたらはあつ
すつかり男子の視線の矛先が移り変わってしまった。
そのきつかけを作ってくれたにつつき男子――
幼馴染みの彼を睨みつける。

(斗真ちゃんのバカッ)

アッカカンベーしてやると、平気な顔して手を振っ
てきた。

「うー」

本当、昔から変わらない。特に、あの邪な目は、
小学校時代にスカートめくりの鬼と恐れられたこと
と、これっぽっちも変わってない。

「ルリナ、ボールいったよー」

思い出に浸りかける間も試合は待つてはくれない。
再開を告げるホイッスルの音で強制的にコート
へと意識が引き戻され――懸命にトスを上げたのが

珠優であると認めた途端に、今しがたまで感じてい
た苛立ちが綺麗さっぱり消失した。

世界史の授業で助けられた分。それがなかったと
しても、得意な分野で助け合うのは当然のこと。

(だからここは私が珠優ちゃんの分まで、ふたり分
……がんばる!)

アタックは相手にかろうじて拾われ、再度ボール
がこちら側のコートへ舞い戻る。

「……珠優ちゃん、お願いっ」

「う、うんっ」

彼女がもし取りこぼしてもフォロウできるよう身
構え、注視しながら声をかけた。あからさまには
なく、さりげなくフォロウすることに努め、極力珠
優にもボールに触れてもらう。

「あううっ」

「おっけ! いっくよー!」

多少外れた方向へ上がったトスだろうと、それが
親友から託されたボールだと思えば、少々無理は
押し通してみせる。

ずばんっ! 反り気味な体勢で打ち込んだ一撃は、
相手コートの最後尾。ライン際へと突き刺さった。
(これで……ゲームセット!)

「ルリナさんっ」

おたがい全力を出し切った。だから珠優も萎縮
することなく喜びを共有できるのだ――なんて小難
しいことを考えていたわけもなく。

(ただ。そうしたほうがイイかなってなんとなく思
っただけなんだけど。……ん、結果オーライ!)

「ばちんっ!」

親友を含むチームメイト全員とタッチを交わして、
結果的に最後の授業を最高の気分で締めくくることが

ができた。

「……かゆい。かゆいかゆいかゆい」

着替えて掃除を済ませて、ホームルームを聞き流
した後の下校タイム。珠優と連れ立って帰路を歩み
ながら、胸を掻く。

「あせも?」

「うん……」

体育で汗をかいたせいで胸の下が蒸れてしまい、
あせもができてしまった。

「……男子がいなかったら、体操服パタパタして扇
げたのに」

隣の親友も「は、はしたないですよ」などと言
い

つつも、うんうんと頷いてくれている。やはり、彼
女は同じ悩みを分かち合える(巨乳)同志だ。

「スプレーが切れちゃったのがなあ」

発汗抑制用のスプレーが、まんべんなく吹きつけ
る前に切れてしまったのが、そもそもの原因だ。

「私も持ち合わせていれば、お貸しできたのですが」
元々汗をあまりかかない体質の珠優は、そもそも
スプレー自体を所持していない。

「やっぱり新しいの買わないとダメかなあ。でも今
月は家計が……あうう」

財布の中身の軽さを想像して、気持ち沈む。

「あらかじめタオルを胸の中に入れておく、という
のはどうでしょう」

「それ、よけいに男子の目についちやうと思う」
気を使って提案してくれた相棒に、ツツコミを入
れる。あ、そうですわね……なんて顔をしてる彼女
は、結構天然だ。

あせも対策を練りながら、時にじゃれ合い、キャ
イキャイト。

「……ん?」

楽しく過ぎ行く帰路になにやら、地べたにうずく

まっている人影発見。

「あの方。どうか、されたのでしょうか？」

「行ってみようか」

珠優を促し一緒にもう少し近づいてみると、うずくまるというよりも這うようにして、何か探し物をしている様子なのが見て取れた。

「ね。なにか、探し物？」

小走りに歩み寄って声をかける。すると――。

「……っ！」

びくッッ！ 背後から声をかけたのがまずかったか。やたらと驚いた様子で髪をなびかせ、小柄な少女が飛び退る。

「あ、ああ。ごめんね急に声かけちゃって。ただ、どうしたのかなあって、気になっちゃったから」

「……」

ストリートロングの長髪を彩るリボンと、おどおどした様子の表情が印象的な少女だった。

制服姿から、同じ学園の生徒であることは知れた。背丈の低さと見慣れない顔であることから、おそらく下級生なのだろうことも。

ただ、立ち上がったことで改めてその小柄な体格の際立つ彼女は、ひとことも発さずにじっとこちらをうかがってくる。

見るからに気弱そうだし、上級生相手ということによけいに萎縮しているのかもしれない。

（ん、こういう時は）

相手が言いたげなそぶりを見せている限りは、何かしゃべり始めるまで気長に待つべきだ。

チラと横見れば、相棒も同意見なようで、ニコニコ笑顔。いつものようにおなか辺りで両手の指を絡ませて、頷いている。

彼女が同意見なら、間違いない。自信を得て静かに、笑顔ふたつ並べて年下少女の発言を待った。

「……あ、の」

「うん？」

待つこと三十秒ほど。ついに少女は口を開き。

「大事な……キーホルダーを、なくしてしまつておずおずと探し物について言及してくれた。さらに聞けば、親からもらったもので、十年近く大事にしているのだと言う。

「そっかあ。じゃ、私たちも探すの手伝うよ」

「え……で、でも」

「いいからいいから。どうせ帰つてもポテチかじりながらお夕食待つだけだもん。ね？」

「うん。そうそう……つて、私はお夕食前にポテチなんてつまんだりしません……」

ナイスノリ。内心で相方に賞賛を贈る。

「おんや。そうでしたかしら？ おほほほほ」

こいつは失礼、だなんておどけてみせたせいで、下級生の女の子にポカンと見られてしまった。

「よしっ。それじゃ、ちゃちゃつと探しちゃおう。熊のキーホルダー、だよな？」

気を取り直すべく咳払い。腕まくりをして、準備は万端。

「三人で探せば、きつとすぐに見つかりますわ」

珠優の声が落ち着くのか、涙ぐんでいた年下少女もコクンと相槌。

こういうところはやつぱり彼女には敵わない。ひとりでごちつとも地べたに向かい、探索を開始する。

――そうして探索すること、約三十分。

「んくいなあ。……おい、そっちはどう？」

学園から少女と出会った地点までを隈なく探したものの、いまだ目的のものは発見ならず。

「こつちも、まくだうです」

しゃがんだ状態から顔を上げて仰ぎ見た視線の先。百メートルほど向こうで相棒が手を振って、彼女にしては目いっぱいの大声で、あちらも収獲なしであることを告げてきた。

「真白ちゃんのほうはー？」

珠優と真逆方向に身体を向けて、先刻名を聞いたばかりの少女に声をかける。彼女は力なくうつむいた状態で、小さく首を左右に振って応えてくれた。

「むー」

これほど探して見つからないとなると、すでに誰かに拾われてしまったか。さもなくば、側溝を引っぱがしてドブさらいをするしかないかも――。そんな風に考え始めた矢先。

（ん……？ あれって）

目端が、キラリと光る物体を捉えた。

（あの辺には、さっき見た時は何もなかったはずだけど……）

目を凝らしてみれば、輝いていたのは透き通ったクリスタル状の塊であることがわかる。

（宝石……にしては大きすぎるし。原石……つてわけでもないし。なんだろ……？）

日常生活ではまずお目にかかれない代物の出現に、否応なく興味を湧いた。さつそく歩み寄り手に取ってみると、予想よりもずつと軽く。手触りよく肌に馴染む。

「これも、誰かが落としたのかな」

年頃の娘の手のひらに余る塊を落として気づかない者がいるかは、少々疑わしくはあるけれど。一応は拾得物として交番に届けるべきだろう。

「どうかしました？」

電柱の陰にしゃがんで動かないでいたせいで、不審に思われたか。例によって揺れる胸の振動と衝撃を抑えるため、胸元で腕を組んだままの状態で、とてと小走りに珠優が駆けてくる。

「あ。見て見てこれ……」

そんないつもどおりの親友に、いつもどおりの調子で手を振り答え、クリスタルを掲げてみせた――

その途端。

「唱えよ」

「へっ……？ え、ええつ……と、誰？」

不意に、どこからともなく声が聞こえた。

『イノセントアクセラレーション』

「イノセント……アクセ、レーション？ つあ、あの、ちょ、ちよつとっ」

大人の、女性の声に釣られて謎の文言を復唱してしまつてから。ちよつと待って、なんて問ひかける間もなく、全身が——掲げたクリスタルを中心に広がった輝きに包まれていく。

「ルリナさん……!!」

口元に手を当て驚いた珠優が、危険を顧みずに身を光に突っ込ませようとするのを、まばゆさに閉じかけた目が捉えた。その肩越し遠くに、珠優以上に驚愕の表情を差し浮かべた真白の顔もある。

「わ、私、どうなってるの!? なにが、起こつて……なんだかボカボカ、あつたかいし……なんか」

ぬるめの風呂にゆつたりと浸かつて、ウトウト舟を漕いだ時の心地よさ。気だるさにも似た感情が全身に巡っていた。

——やがて、収束してゆく光の中から五体無事な自身の身体が出現する。その様を、まばゆさに馴れ始めた瞳が目撃し——そしてすぐに我が目を疑うこととなった。

「な、なによこれえつ」

瞬く瞳に映し出されていたのは、先ほどまで纏っていたはずの制服姿でなく。

中世の騎士を思わせる肩当てに小手、具足といった金属製の防具類。唯一ニーソックスだけはそのままだったけれど、何より胴体を覆うドレスに目が惹きつけられる。

おまけに右手にはいつの間にか分厚い刀身の、身の丈ほどもある大剣が握られていた。防具も武器も、見た目よりもずっと軽く、肌に馴染んでいる。

「——じゃなくて! なんぞつ? どうしてえつ」

腰に纏うマントを翻し、尋ねてみたものの。

『選ばれし戦士よ。健闘を祈る』

「え。ややや、ちよつと待ってよう……!」

謎の声は簡潔すぎて理解不能なひとことを残してそれっきり、聞こえなくなつてしまつた。

「え、ええつと……ルリナさん、ですわよね?」

困惑顔の親友に、とりあえずコクコク頷いて意思を示し。

「あうう……」

珠優の反応も無理もない。そう、髪を飾るティアラごと頭を抱え、輪をかけて困惑する思考を巡らせる。これではまるでコスプレだ。RPGの女剣士っぽい。

「どどうしよう珠優ちゃん!」

「う……ん、困りましたわね……」

結局、混乱を終息させる方法は混乱頭脳に浮かばなかった。こういう時はマイペースな親友だけが頼りだ。

どうやれば、元の格好に戻れるのだろう。

「あ……。変身? なさつた時のことをよく思い出してみてはいかがでしょうか?」

ばむ、と拍手を打って親友が言う。

「変身した時の……ん……と、そうだクリスタル!」

我ながら早々に気づいて、クリスタルを握っていた右手。天高く掲げたままの右手のひらを下ろすや否や覗き込んでみたのだけれど——。

「あ、あれつ? ないつ!!」

あたふたしていて気づかなかつたが、手にしていたはずのクリスタルがどこかへと消え去つてしまつていた。

「ふええんつ、どこ行っちゃつたのよお」

熊のキーホルダーもまだ見つからないのに、探し物が増えてしまった。この格好のまま探すと道行

く人々の注目、それも奇異の視線を独り占めだ。

「それだけはダメえつ」

今はまだ幸いにも人影がない通学路で、声を大にして叫ぶ。今しがたの想像が現実のものとなれば、明日から平穏な日常生活が送れなくなつてしまう。

「……平穏な学園生活がそんなに大事か?」

「もちろん! ……つて真白ちゃんつ?」

振り向き、いつもの調子で言葉を吐き出した、次の瞬間。

後ろ——危ないつ! そう叫んだつもりだったが、果たして彼女の耳には届いたのだろうか。真つ黒なとぐろを巻いた不気味な物体の中へ飲み込まれようとしていた彼女の耳に——。

「な、なによ今度はあつ」
グネグネうねり狂う、大人の背丈ほどもある漆黒の塊。蛇と見紛うようなヌルついた皮膚を持つそれは、目や鼻や口こそなかったけれど、ドクドクと荒く息づいていて、生命を感じさせた。

「……つ、真白ちゃんを助けないとつ」
思った時にはすでに身体が動いていて。手にした分厚い刀身を、叩きつけるように異形の塊へと振り下ろす。

——ブシユウウウウツ!
「わぶつ……」
返り血——というにはあまりに黒く粘り気の強い、臭みのある汁を浴び、臭みと気味の悪さに嫌悪感が渦巻いた。得体の知れぬ生物相手に恐怖を覚えつつ、えずきとともに込み上げる負の感情を必死にすることで押し殺し、半開きの瞳で異形の塊の裂け目の奥を——小柄な下級生の姿を探す。

（あつ……!）
脈打つ漆黒の只中に、白く小さな手が垣間見えた。目端で捉えたのと同時にそれを掴み、引っ張り出すと力を込めた。

（あつ……!）
脈打つ漆黒の只中に、白く小さな手が垣間見えた。目端で捉えたのと同時にそれを掴み、引っ張り出すと力を込めた。

「……気安く触れるな」

響いたのは、想像だにしなかった、音色。暗く沈んだ、苛立ちまぎれの不協和音。

「っ!? ……きやあつ」

握った手を振りほどかれ、反動で尻餅をつき。

「ルリナさんっ」

そうして駆け寄ってきてくれた友人に助け起こされながら。ふたり揃って、目を疑うモノを目撃する。

「まったく。ふん……貴様ごときが軽々しく触れていいボディではないのだぞ?」

食虫花のごとくあごとを開いた漆黒の触手群から、浮き上がるように小柄な肢体が出現した。

黒の群れの中に浮かび上がるなお暗きマントに、ブーツ。鮮血と見紛うほどに赤い鉤爪を両の手に装着した彼女は、真白と寸分違わぬ顔形をしている。

「真白、ちゃん……なの?」

「で、でも」

はつきり彼女だと断定できなかったのは、これまたファンタジー世界から抜け出したかのような衣装のせいでも、先刻聞いた耳を疑いたくなるような暴言のためでも、髪型がツインテールに変わっていたせいでも、ない。

——目だ。小柄な肢体をボンテージのように暗く輝く生地とガーターベルトを始めとした妖艶な装具に包んだ彼女の瞳が、まるで世のすべてを憎むかのように吊り上がり、煌めいている。不敵な笑みを湛えているせいもあり、背格好と不釣り合いな艶と凍えるほどのおぞましさを感じさせられた。

「くっくく……真白のことより、自分たちの身を心配したほうがいいんじゃないか?」

ニィ……と歪められた唇が、不穏な台詞を吐いた直後。

——しゅう……づるるうっ……!!

「きやつ……ア……!!」

「珠優ちゃん!? わきやあつ……」

不覚をとったのは、触手を足場に高みに立つ彼女に気を取られたせい、とばかりも言い切れない。今しがたまでの、のたうつような鈍さが嘘のように、異形の群れが足元へと突進してきたのだ。

「くそおつ。来るなっ……来ないでつてばあつ」

異形が分泌しているらしいぬめり気のせいで脚に踏ん張りが利かず。振り下ろした刀身は浅く触手の幹に食い入っただけに終わる。

——ぶびゅ! にゅぢゅる! ぢゅづるるる!

傷つけられた異形は目に見えて激しく震えて、すぐさま標的を一点に——刃持つ右手へと定めてきた。

「このっ……もお、しつっこいっ!」

柄はおろか刀身にまで、漆黒の触手が巻きつき、引つ張るようにして武器を取り上げようとする。斬り裂かれることを恐れていないのか、それともそれほど腕が強いと見くびられているのか。

後者だとするならば、その予想は不意ながら的を射ている。

「鈍い貴様らにありがたく教えてやる。この子たちを操っているのは……この私だ!」

早くも膝丈の高さに達した異形群を止めたければ私を攻撃しろ、と。少女は暗に示してほくそ笑む。

「そんな、こと……」

できるわけないよ! ——叫んだつもりで唇は、渴いていてまともに言葉を吐き出せない。

「いやあつ! やつ、あア……っ。気持ち悪いっ」

「……珠優ちゃんっ!」

手を伸ばせば届きそうで、なのに異形の波打つ勢いにさえぎられて、ほんのわずか届かない。そんな目と鼻の先で、親友の制服に、スカートの、ぬめった触手が大きき、たかっていた。

(しまった……!!)

間近の標的に夢中になるあまり、珠優の周囲への

気配りがおろそかになってしまった。

ネトつく心地悪さに震え、這いずる不気味な感触に怯えて。親友の目に大粒の涙が浮かぶ。ぬめり気を浴びて透けた制服のブラウス越しに、白のブラウ紐が覗いている。

「やめてっ! やめなさいよおつ!」

真白を助けようとした時のように、万全の体勢ならば。たやすく異形を裂けるはずの武器を手にしていながら。どれほど振り回そうとも、すぐ傍にいる友達を助けることすら、今の自分には叶わない。

(悔しいっ、よ……!!)

ただただ己の無力ぶりが情けなく、悔しさだけを噛み締めて。それでも泣き出したいのを懸命に、唇を噛んで我慢する。

さっきまでは楽しくおしゃべりをして通い慣れた道を歩いていた。いつもどおりのありふれた、小さな幸せを満喫していたのに——そんな風に考えると涙を堪えられなくなりそうだったから。

だからよけいなことは考えないようにして、ただ目の前で助けを求める友達の手を取ることだけを念頭に、遮二無二剣を振るい続ける。

「……つまらん」

(……っ!)

冷めた真白の声が頬に触り、思わずキツと睨みつけてしまう。その瞬間。一瞬だけ彼女の表情が弱々しげな本来の彼女のものに戻った気がした。

(やつぱり……あの子なんだ)

助けないと——珠優も、真白も!

「——ふん」

決意を秘めて再度見上げた先で。宙を駆けるように、触手が形作る橋を伝って見る間に接近してきた少女が、無慈悲に両の手の鉤爪をなぎ落としてくる。

——がぎっ! イインッ……!!

「んくっ……うあ……っ!」

両手の指に血管が浮くほどしっかりと握っていたはずが、軽々と剣は弾き飛ばされ、暗き触手の波の中へと埋もれていった。

小柄な体軀からは想像できないほどに少女の攻撃は重たく、鋭く突き刺さり、一度受け止めただけで両腕がしびれ使い物にならなくなった。

異形に半ば埋もれる形で、踏ん張りの利かない両脚がみつともなく震えだす。

「聖女に選ばれし戦士が、聞いて呆れるな！」

居丈高に鼻で笑われても、言い返す言葉がない。聖女というものも、よく理解できなかった。

（そんなことより、早く珠優ちゃんを……）

自身が嘲りの対象になることなんて、どうでもいい。それより一刻も早く友人を助け出さなければ。

「……この真白様を無視するか。上等だっ！」

——ザシユ！

「きやああっ！」

そんな態度を無視と受け取ったらしい少女の巨大鉤爪にながれて、右肩から鎖骨にかけての衣服が浅く裂かれる。

（ファンタジー世界の服なんだから、もつと頑丈にできてよおっ……）

誰が作ったのかもわからない衣装に文句を言ったところで、現状が劇的に変わるわけでもない。ズキリと裂かれた部位に痛みが奔る。服だけじゃ、ない。「……ふん。下品なデカさの乳ぶら下げおって」

衣装の裂け目から右の乳首まわりが露出し、その上方からは鮮やかな赤が滴り落ちる。

皮一枚ほどだが、肩口を裂かれていた。

「きやああああっ！」

痛み自体はたいしたことなかったが——刃物で斬りつけられた。そのことに対する純然たる恐怖が胸を占め、気づけば頰引き攀らせ叫び声を上げていた。いつ人目があるかもしれない公道で、素肌を露わ

にしている。先ほどまでは誰か通るかかって——〇番に電話してくれないか、なんて考えもしたけれど、羞恥と恐怖によって萎縮した身体が、前かがみになって胸を相手の視線から覆い隠した。

「へ、変態っ！ スケベっ！」

自身、語彙の少なさに辟易しながらも、とりあえず思い浮かんだ言葉を片っ端から頭上の少女へと半ば恐怖をごまかす思いでぶつけた。

「そんな卑猥なものをぶら下げているほうが悪い」
妙に苛立った様子で、少女が言う。

「ひ、卑猥って……！」

あんまりな言い様にさすがにカチンと来て、視線を上げる。

「貴様だけみつともないんじやかわいそうだから、あつちの女も同じ格好にしてやるか」

足場の黒触手が台座を形作り差し出すや否や。当たり前のようにそこに尻を下ろした少女。彼女の喉が蠢くたび、侮蔑と嘲笑とがばら撒かれる。

珠優も同じ目に——そう聞かされた瞬間。羞恥心と痛苦を恐怖が上回り。剥き出しになった胸元を隠すのも忘れて上体を起こし、声の限りに叫んでいた。

「やめてっ。どうして、そんなこと言うの!？」

さっきまで、一緒に探し物をした。最初は控えめだった彼女のほうからもぼつぼつと話してくれるようになって、仲良くなれたと思ったのに——！

「どうして？ 楽しいからさ。貴様みたいな牝豚が、無様に喘ぐ様を見るのが」

悪辣な言葉の数々は、きつと忌まわしい触手どもに吞まれたせいだ。先ほど「触手を操っているのは自分だ」と言っていたが、もしかしたら逆に得体の知れない異形に操られているのかもしれない。

どのような目にあつたとしても。ただどしく探し物のことを話してくれた彼女の姿こそが真実なのだと思っていたかった。

珠優も、剥き出しの憎悪が己に向けられていることに悪い、怯え、群がる異形から身をよじり抗いながらも、その瞳はやはり本来の真白を信じて揺るがないでいる。

（ふたりを助けなきゃ……）

今この場でそれができるのは自分だけなのだ。固い決意を胸に両手を触手の波の中へ突っ込み、掻き分けるようにして歩を進める。

まずは周囲の触手群。脚に絡み進行を阻害する異物を、排除する必要があつた。

（でも、どうすれば……っ、この、動いてよお！）

不測の事態に焦りばかりが増し、思うようにならぬ我が身への苛立ちも募りゆく。焦りから注意力は散漫となり、またよけいに苛立ちが募つて。悪循環のスパイラルにはまり込む。

——にゅぢゅるるるっ！

「ひっ！ や……あ！」

明確な対策を講じられないでいるうちにも、異形の群れは波間に浮かぶふたつの肢体へとヌタヌタよじ登り、悪寒と恐怖とを染み込ませようと蠢動する。

「だっ……ああ、入って……こないでえっ」

「珠優ちゃん！ 待ってて、今行く……からあつ」

さっきも同じことを考えた。あれから何歩。前に進めたか。焦燥に駆られる胸をむしる手間すら惜しんで、か細い悲鳴を上げた親友の胸元へ目を向ける。

蠢く異形の頭がいくつつか、こんもり盛り上がるブラウスの隙間から、無理やりに内側へと潜り込もうとしていた。

プツ、と異形の圧力に負けたボタンが飛ぶ。そうして隙間が広がった途端、ズルズルと耳障りな音を響かせて、黒の群れが鮮やかな肌色の地へとなだれ込む。その様を、ただ見ていることしかできない己への無力感にまたも打ちのめされる、間にも。

「やつ、あ……！ 気持ち悪い、ですっ……っ」

果然とした様子の真白の声音が聞こえたけれど、
そちらを気に留める余裕もなく、親友の拘束を解く
こと。それだけに意識を集中させていた。

「目覚めたばかりで力の使い方も知らないやつに。
真白の可愛い子たちがやられる、だとオ……」

「待って……もうすぐ……ひやうっ!」

標的にぶら下がり、ふたり分の重みで珠優の拘束
を引きちぎろうと試みる。爆発的に力が弾けた感覚
のあった当初ほどでないものの、苦戦したこれまで
が嘘のように異形の肉を裂いてゆけた。

「ル、ルリナ……さんっ……」

「うん……っ」

弱々しい声とともに視線を重ねた親友を安心させ
るように、異変に見舞われて以降初めてとなる笑顔
を——無理やり作った笑みを彼女に向けた。その間
も、ぶつり、ぶつりと拘束が一本一本剥げ落ちる。

（あと、もう、ちよっと……!）

もう、残り数本だ。あと少しで珠優を救出できる。
期待に胸膨らませた直後。汗の浮いたその胸先に、
ヌリりと心地悪い感触が張りついてきた。

「ふざけるのも大概にしろっ……!」

眉吊り上げ怒りの形相を露わにした少女の声に氣
を引かれ、それから己の胸元へと目を落として。氣
味悪い感触の正体が、黒触手であることを知る。

「これでもまだ他人のことを気にかけるつもり？」

無理でしよと言いたげに、少女の唇がほくそ笑む。

「ルリナちゃ……やっ、んむぐうっ」

涙の浮いた瞳を向けて声をかけてくれようとした
親友の唇に、群れを成して黒光りする異形が殺到し、
ねじ入って、ふさぐ。

「珠優ちゃんっ!」

息苦しそうに鼻で呼吸をしながら、こちらを安心
させようとわずかに目で合図をくれる。ピチピチと
口端から飛び出た異形の胴が、この上なくおどまし

く、それだけに親友の献身が身に染みた。

（く、うあ……ヌルヌルが、こびりついてえっ）

底冷えするような悪寒が胸先から身体の内まで突
き抜けていく。この気持ち悪さを、今まさに親友も
味わわされている。おまけに悪臭のするぬめりに
口の中までも汚されているのか。

「くう、ううう……! 今、助ける……からあつ」

一刻も早く。助けてあげなくては。

（私なんかよりずっと泣き虫で怖がりなんだから、
あの子……!）

親友の手首を拘束する触手群にかけた指先に、力
を込める。脚を触手に引かれても、決して放すまい
と、強く、強く願いを込めてしがみついた。

——ミリ。

（もう、少し……!）

太い触手の根元に、裂け目が入った。あと少しで
引きちぎれる。——そう、思ったのに。

「ほんつと、目障りな……牝豚だな貴様っ!」

にゅぢゆるるるるる! ぎちつぎゅちちイッ!

「あくうあつ!? つ……あと、ちよつとなのに!」

腰に巻きついた極太触手によって引き剥がされ、
地べたの触手群の波間へと落とされて、尻餅ついた
その身を間髪入れずがんじ掬めに拘束される。

「ぐ、くうううっ!」

きつい締めつけによって縛られた四肢、腹部にネ
トついた汁がにじみ出るそばから染んで、よりいっ
そう心地悪い。特に剥き出しの胸に、念入りに汁を
擦り込もうと、異形が殺到していた。

「そこからでもお友達の姿は見えるだろう?」

じつくり、見てやるといいわ。言って背を反らし、
高笑いを響かせる。その様は無理をしているように
見えて、むしろ哀れみを誘う代物だったけれど。

「っ、くう! この、ほどこきなさいよおっ!」

今はただ、せつかく手にしかけた希望を奪われた

失望感と怒り。そして。

——にゅぢつ、ぬぢゆりゆるるっ!

「いやあああああ……!」

胸の谷間を我が物顔で這いずる黒い異形の、不気
味な動きと不規則な鼓動と、併せて嘔きつけられる
湿った粘液。それらのもたらす嫌悪感に、意識を支
配されていた。

「や、あ、うう……ダメ、だつてばあ……っ」

ぬめりは異形の締めつけや摩擦を緩和して、奇異
な感覚を柔肌へと刻んでくれる。くすぐったさとも
むず痒さとも微妙に違うもどかしい感覚。初めて知
る感覚に悪い、乱れ、脱力する己の身体に、苛立ち
までもが募りゆく。

「ふんっ」

真白が髪を掻き上げ、また、鼻で笑う。

にゅりゅづつ……ぶぢゅううっ!

まるでそれが合図だったかのように、剥き出しの
両乳首に、同時に異形の突端が吸い付いてきた。

「ひあッ!? つや、放し……っア……!」

口もないのにびつたりと張りついて、強烈に吸引
された乳房がつき立ての餅のごとく引き伸ばされる。

「ひや……うっ!」

ピリピリと電撃めいた感覚が、ついはまれた乳頭
から胸の奥のほうにまで響いてきて、思わず上ずつ
た声が漏れ出てしまう。

「ふふ。なに、変な声出してるんだ?」

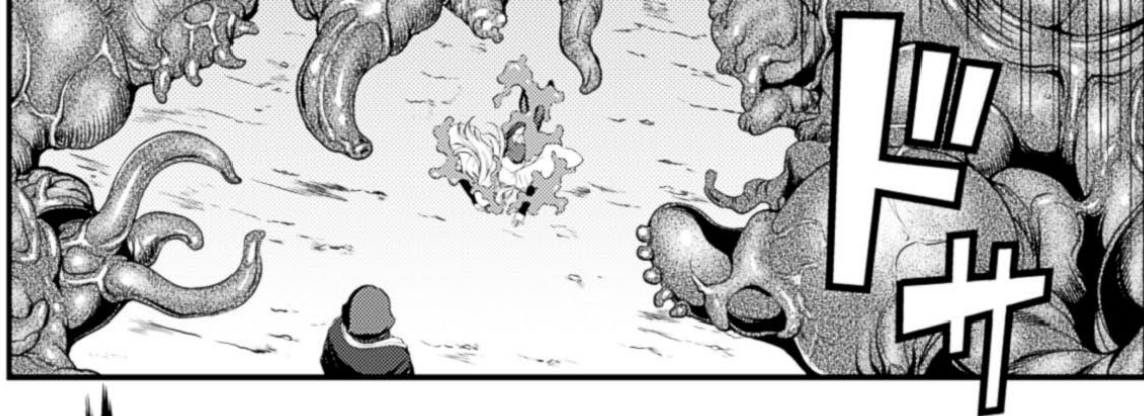
小馬鹿にしたような声が、妙にばやけて聞こえた。
（む、胸がジンジンっ、なにこれ……なんどっ?）

先ほどのむず痒さに似た感覚と同様、やはり初め
て味わう類の感覚だ。おまけにむず痒さ以上にもど
かしく、胸掻きむしりたい衝動に駆られる。

けれど両手は胴ごとががんじ掬めに再拘束されてい
て、ただじたばたともがくことしかできず。よけい
に焦燥に駆られ、意識は自然に乳首へと集中する。





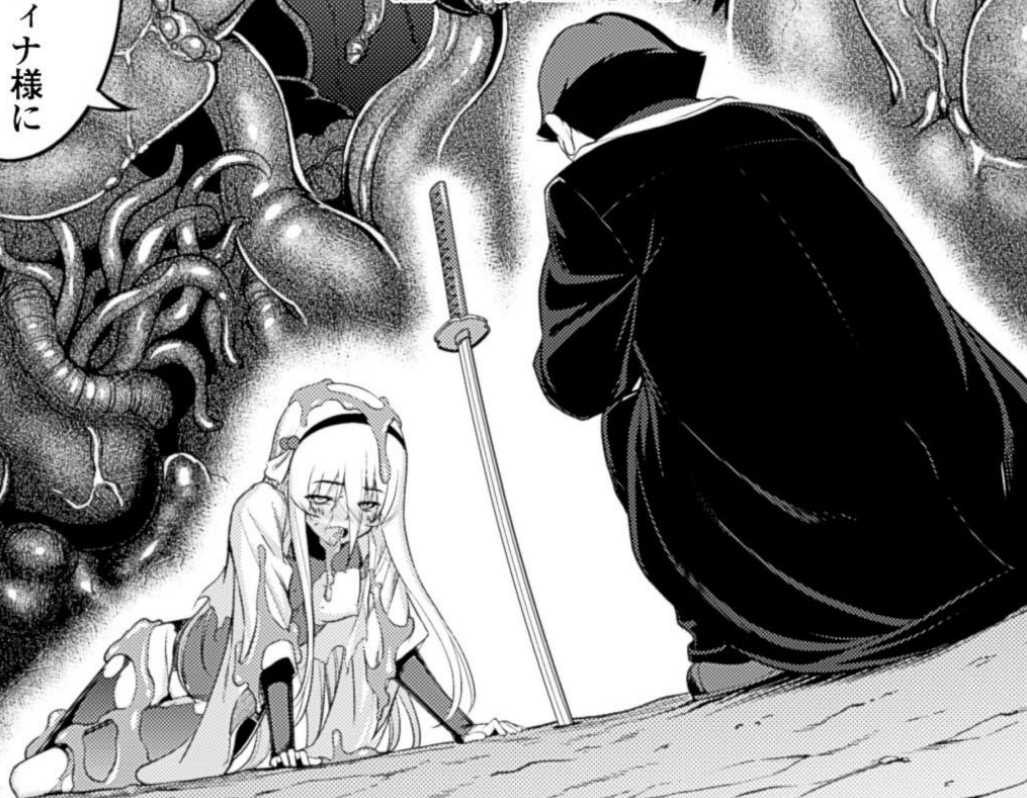


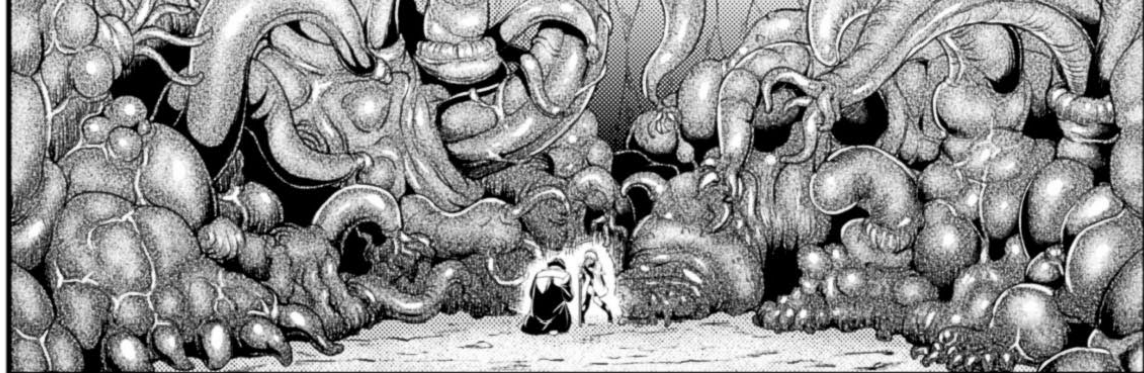
かんぬきのみこ
後編
閃の巫女
なもなし
漫画 無望菜志
COMIC

この命

神とアルティナ様に
捧げましょう

怒涛の最終話!!











おあああ

W
!!
!!

はッ
ひッ

はっ
ひっ

はっ
ひっ

これ...は

はっ
ひっ



彗星戦姫 Comet Princess LEESHA

レエシャ

小説
NOVEL

やまもと さき
山本沙姫

挿絵
ILLUSTRATION

あき ない え
春夏冬工



流麗なスーツに包まれた肌が
汚れた男達の目に晒される——！

AK

「い、いやっ！ 来ないで……」

赤みがかった満月が不気味に輝く空の下で、か弱い美女が鳴咽を上げる。歩道に尻餅をつき、ズリズリと後ずさりしながら。

「でへへ、そんな顔するなよ……ほら」

痩せ型で、顔色の悪い奇妙な男が彼女に迫る。その体躯に不釣り合いな股間の巨根を晒し、大きく波打たせて。

（もう、だめ……誰か……助けて……）

絶体絶命の危機に全身が鳥肌立ち、ガクガクと小刻みに震わせる哀れな乙女は、思わず目を閉ざして奇跡を願う。「そこまでよっ！」

その時、二人の間を疾風が吹きぬける。カナリアの囁りのように可愛らしく、それでいて凛々しい叫び声と共に。シュンッ！ スタッ！

はるか天からサファイヤブルーのポニーテールを靡かせて、一人の少女が舞い降りた。

「なっ、何だ、お前は！」

行く手を阻む乱入者に向かって、暴漢は眉間に皺を寄せた厳つい表情で凄んでみせる。

「黙りなさいっ！」

だが彼女は怯まず、ルビーのような真紅の目をキッと吊り上げて睨み返す。桜色の薄い唇を開いて放った、怒りの雷鳴が静まり返った夜の空気をビリビリと震わせる。

しかし声の主は、気迫に満ちた態度に似合わず実に可憐だ。

頬から顎にかけての緩やかな曲線を

描くラインと、低めの可愛らしい鼻が醸し出す、初々しいあどけなさ。

さらに、耳に付けたインカムから伸びる、ブレード状の白いアンテナがウサギの耳を彷彿とさせて、容姿の可愛らしさを一層引き立たせていた。

「うぬ……」

威嚇したつもりが逆に度肝を抜かれ、たじろぐ暴漢の前で彼女は背筋を伸ばし、白いブーツでキュッと引き締められた長い足を軽く開いた力強いポーズを取る。そして手にした、中世の騎士の剣を彷彿とさせるステッキを、ピシッと彼の目の前に差し向けた。

派手な腕の動きに釣られた、九〇センチ近くあるロケット型に美しく形の整った乳房を、大きく波打たせて。

「聞けいっ！ 邪な欲望に操られる愚か者!!」

怯んだ敵に反撃の隙を与えないよう、救いの使者はさらに追い討ちをかける。身の丈一七〇センチ近い体躯に纏っているのは、胸元が大きく開いたレオタード型のオレンジ色のスーツ。

アンダーバストのラインやウエストの括れ、さらに縦割れの小さな臍まで浮き出るほど肉体に密着し、ボディペインティングのよう。

程よく引き締まった洋梨型のヒップまわりに、ぐるりと巻きついたフリル状のスカートが、セクシーな衣装に可憐な少女らしさという華を添える。

「不埒な横暴は、この彗星戦姫リーシャが許さない！」

「リーシャ……お、お前が噂の……」

あらわれたのは、一年前に悪しき宇宙人を追って地球にやってきた戦士。その勇ましい戦いぶりとは可愛らしさが、ネットやマスコミで多々取り上げられる時の人である。

「あら、知っているなら、おとなしく帰った方が身のためじゃないか？」

怯える暴漢に余裕の笑みを見せながら、彼女はからかうように問いかけた。

「んっ、ぐ……ぐ……生意気な奴め、邪魔するならお前もやっちまうぜ！」

しかし小娘にバカにされたのが気に食わず、男は怒りと共に肉欲の矛先を変えて襲いかかる。

突き出した両手の、厭らしくくねらせた指が胸元まで伸びてきた。

「たあつ！」

だが指先すら触れさせず、二つ名の通り彗星並みのスピードで素早く背後へ回り込み、背中にステッキを叩き込む。

「ブライトショックッ！」

パチッ！ ババババ……。

掛け声と共に爆竹のような破裂音が響き、青白い稲妻が暴漢の全身を覆いつくす。

「あぎぐぐぐうっ!!!」

強烈な電撃を食らった悪党は、固い路面に仰向けでバタリと倒れ込んだ。

「おあいにくさま。操り人形にやられるほどヤワじゃないわ。しばらく反省する事ね」

萎れたペニスを晒しながら横たわる

男を見下ろして呟くと、傍らで座り込む美女に微笑みかける。

「ケガはない？ 今のうちに逃げて」

「あっ、ありがとう、ごさいます……」

優しい言葉に恐怖心が少し解れた彼女は、おどおどした口調で礼を言う。とゆつくり立ち上がり、一礼してから足早に立ち去った。

「さて、と……」

被害者が無事に逃げたのを確認すると、リーシャはキョロキョロと辺りを見回す。真の敵を探して。

「……！ そこにいるんでしょ!!! 出てきなさいっ！」

やがて邪悪な気配を感じ取った彼女は、ステッキを差し向けた街路樹を言葉の矢で貫く。

「まーったく、お仕事してるといつも邪魔しに来るな。お前は……」

すると大木の後から、奇怪な大男がズイッと歩み出てきた。背中に担いだ、後頭部とチューブで繋がった円筒形のタンクを、右手の親指でコンコンと小突きながら。

スキンヘッドにゴーグル、そして黒いビキニパンツ一丁という、競泳選手のような身なりのマッチョマン。

しかも全身メタリックブラウンという、地球人離れした肌色をした彼こそ、はるか銀河の彼方から彗星戦姫が追ってきた宿敵。

「宇宙商人デスゾー！ 今日こそお前を倒す！ 覚悟しなさいっ!!!」

妙に人をおちよくった態度であらわ

れた悪党に鋭い口調で言い放つと、リーシャは武器のステッキを真横に構えて斬りかかる。

「その台詞、聞き飽きたわあつ！」

すかさず禿男は右の握り拳を突き出し、その先端からソフトボール大の青白い光の球体を放って応戦した。

バシユンッ！

「食らえいっ！ 破壊光弾っ！」

「そんなもの、通用しないわっ！」

バキィッ！

余裕の口ぶりで返しつつ、美貌の戦姫はまっすぐ目の前に飛んできた光弾をかわし、素早くステッキを横一文字に振った。地上から宇宙へ向けて、一つの彗星が飛んでいく。

「くう！ 見事なバツティングだねえ！」

だが、これならどうだつ！」

夜空を見上げて自慢の光弾を見送ると、デスゾローは左右の拳を交互に素早く繰り出し、破壊光弾を次々に打ち出してきた。

「無駄無駄無駄無駄だあつ！！」

バシッ、バババババシィッ！！

連続攻撃に焦りもせず、リーシャは縦横無尽にステッキを振り回し、光の玉を次々と夜空へと打ち上げていく。「あらあら、今日は随分と景気がいいわね？」

筋肉の巨漢が発射する光弾は、背中のタンクに貯められたエネルギーを一旦体内に取り込み凝縮したもの。それは彼にとつて、財産を捨てるのに等しい。

「なーに、今日の下僕はかなり溜まっていたおかげで、在庫はたーぷりとなるのだよ」

余裕の憎まれ口を叩くリーシャに、負けじとデスゾローも偉そうな口調で切り返す。彼が持つ、他人の欲望を肌で吸収して破壊エネルギーに変える能力は、とりわけ男の性欲を強力なエネルギーに作り変える特性がある。

ゆえにより多くのエネルギーを得るため、性欲を滾らせた男を見つけてはその心を操り、欲望を解き放させていたのであつた。

「そんなの自慢にならないわっ！」

憎々しい笑顔で威張り腐る宿敵に、勇敢な彗星戦姫は呆れ顔で挑発しつつ攻撃を撥ね除ける。

しかし内心穏やかではいられない。

（奴の懷に飛び込まないと……）

彼女が使う武器、バトルステッキにも破壊ビームを打ち出す装備はあるだが、エネルギー変換体質のデスゾローに対しては、効き目はないに等しい。ダメージを与えられるのは、打撃系の直接攻撃だけ。

しかし対する宇宙商人も、余裕のある素振りを見せかけだけではない。（しかしここまでやるとは……あれを使うしかないか……）

そろそろタンクの残量が気になる。

「おおっ！ ここかー」

「すげー。俺、本物のリーシャとデスゾロー見るの、初めてだぜ」

が集まっていた。

日頃、戦いが始まるとその様子がネット上にアップされ、野次馬が来るのはよくある事。それが地球で繰り広げられる彼女の戦いを世に知らしめる原因であると共に悩みの種でもあつた。周りに人がいては、戦いにくい事この上ない。

「危ないから、みんな離れて！」

つい対峙する宿敵から目をそらし、背後のギャラリイ達に呼びかける。

「今だ！ こいつを食らえいっ！」

その瞬間、デスゾローはゴーグルを外し、目から七色の光を放つ。

「えっ！ きゃあつ！」

バシィッ！ ババババ……

反射的に突き出したステッキに光線が当たり、握った手に軽い痺れが走る。

「……？ 何ともないじゃない？」

「ククク、それはどうかなあ」

意味不明な不意打ちに拍子抜けするリーシャに対して、デスゾローは腕組みしてふんぞり返った余裕紳々のポーズで言い放つ。その一瞬、攻撃がやんだのを彼女は見逃さない。

「たあああーっつっ！」

ステッキを上段に構えて、油断した宿敵めがけて一気に駆け出す。そして天高く舞い上がり、頭上から縦一文字に振り下ろした。

「おっと危ない」

間一髪、バックステップでかわした筋肉の巨漢は、重そうな見た目に反した軽快な動きで、続けざまに来る攻撃

をよけ続ける。

「こつ、このおつ！ 逃げるなあつ！」

「へへーんだ、当たらないよおー」

まるで鬼ごっこを楽しむ子供のよう

に、無邪気に逃げ回る悪党への打ち込みは、あと一歩届かない。ブンブンと虚しい風切り音が響くばかり。

「おおーっ、いいぞいいぞー」

「もつと大きく振ってみせてー」

すると急に、下品な声援がビューピユーと甲高い口笛と共に、そこかしこから湧き上がり始める。

（いったい何が……ええっ?!）

彼らの声で初めて気付いた信じ難い事態。コスチュームの一部が消失し、ツンと上向きに尖った薄桃色の乳首を頂いたバストが丸出しになっていた。

「きゃあつ!! どっ、どうして?」

咄嗟に両手で隠すものの時すでに遅く、あちこちで携帯のフラッシュが瞬

いている。

彼女がその身に纏っているのは、厳密に言えば服ではない。特殊合金製のナノマシン、すなわち目に見えないほどの小さなロボットが結合した、柔軟性のある鎧であり、簡単に破れたりするような代物ではなかった。

「わからんかな? そいつは我が奥の手、ウイルスビームに侵されているのだあつ！」

不安げな表情のリーシャに向かって、デスゾローは彼女が手にしたステッキを指差しつつ自慢げに言い放つ。

バトルステッキは武器であると共に、

コンバットドレスをコントロールする重要な役割もある。その機能に異常が起さればナノマシンの結合は途切れ、煙のように消えてしまう。

「ひつ、卑怯よ！ こんなマネして……正々堂々……勝負しなさいよっ！」

星々の平和を守る戦士とはいえ、一皮剥けばうら若き乙女。大勢の男達の前で肌を晒すのが恥ずかしいのは当然。左手で両胸を隠し、右手でステッキを差し向けつつ挑発しても、次はどこが消えるか気がでない。自然と太腿をビタリと閉ざし、だんだん腰が引けていく。

その間も、ドレスの消失は止まらない。腋の下から背中に向けて、恥ずかしさで朱に染まった柔肌が晒された。

「おっ、また消えたぞ」

「そのうち、全部なくなんじゃね？」

見物人達の心ない野次が、耳の奥をねちつく撫で回す。

（こっちの気も知らないで……）

「さて、お喋りはこれぐらいにして、バトル再開とかいうかいっ！」

恥辱に唇を噛み締め、身を固める彗星戦姫に追い討ちをかけるべく、宇宙闇商人は嬉々としてエネルギー光弾を打ち出し始めた。

バシユンッ！ ババババッ！

「えっ！ やあっ！」

慌ててバトルステッキを振り回し応戦するものの、身体を隠しながらの体勢では防戦するのがやっと。とても攻め込む余裕はない。

（このままじゃ、勝てない。でも……）

すぐにでも逃げ出したい思いを押し殺し、少女は悪しき巨漢に立ち向かう。なぜなら、今奴を逃せば手にした大量のエネルギーが取引相手の宇宙テロリストに渡り、どこかの星で誰かが不幸な目に遭わされるから。

「今度はお臍が出たぞ！」

「あのまま下まで消えれば……」

しかし自分達に被害がないせいか、周囲の地球人達は徐々に脱がされていく彼女を暢気に見物するばかり。

（何言ってるのよ!!）

不愉快な反応を見せるギャラリー達ではあるが、それでもリーシャは彼らを巻き添えにしないよう、懸命に光弾を打ち返す。平和に暮らす人達を、理不尽な不幸に遭わせたくないから。

だが、健気に戦う乙女をあざ笑うが如く、尻を覆うナノマシンが崩れ、お月様のようにまん丸な穴がポツカリと開いてしまった。

「いよっ！ ついにお出ましカー」

「可愛いねー、桃みたい……」

「えっ！ やああっ！」

咄嗟に路面にペタンと尻餅をつき、剥き出した双曲の谷間を隠す。

「いやー、とうとうお尻丸出しかい？ そんなんでもまだ戦う気かねえ」

今にも泣き出しそうな彗星戦姫の前に、邪悪な筋肉男は攻撃の手を止め余裕の高笑い。

「とっ、当然よ！ んっ……あ……」

しかし憎き男の挑発に負けまいと、

ステッキを杖にしてリーシャはヨロヨロと立ち上がる。

「さあっ！ 勝負はこれから……」

消えかけた闘志を呼び起こし、再び立ち向かうとした彼女は鼻を挫かれる。スカートの端から消え、臍まわりの穴も広がりはじめた。

（い、嫌……このままじゃ……）

神聖なる乙女の秘所が晒される瞬間が、刻々と迫る。

「何をしておるのだ？ ステッキの機能が生きているうちに、奴に接近戦を仕掛けぬか」

その時、高飛車な口調の甲高い声が、インカムから耳に響いてきた。

「わかつてるわっ！ でも、どうすれば……」

非常事態にもかかわらず神経を逆撫でするような物言いに、リーシャは少々キレ気味に言い返す。しかし恥ずかしさと不安に、言葉の端々が震える。

「奴も男だ、隙なんてすぐできるぞ」

だが、通信相手は彼女の態度を気にする様子も見せず何か含みのある口ぶりで告げると、一方的に無線を切った。

（奴も男って……!）

最後の言葉に、何かが閃く。

「こうなったら、もうヤケよっ！」

顔を真っ赤にして金切り声を上げる

と、ステッキを斜に構えてデスゾロに殴りかかる。

「おわっ！」

いきなりの不意打ちに焦ったのか、筋肉の巨漢は光弾で応戦する暇もなく

真横へ飛んで太刀筋をかわす。またもステッキは空を斬るが、怯まずリーシャは二の太刀三の太刀を打ち込む。

「やあっ！ えいっ！ たあーっ！」

ブオンッ！ バシユウッ！

一打ちごとに、周囲の喧騒をかき消すほどの風切り音が響く。

無論、コンバットドレスの消滅は止まってはいない。攻撃のたびに左右に揺れるお尻の部分に開いた穴は、縦筋ばかりか蟻の門渡り切りまでが露出するほど広がった。

股間のデルタゾーンにまでウイルスの影響が及び、肉のクレヴァスを覆うスペースが痺の如く狭まっていく。

（あうっ！ こっ、これぐらい……）

ヴィーナスの丘がキリキリと引き絞られ、秘園の奥に鈍い痛みが走る。それでも彼女は攻撃の手を緩めない。

「きゃっ!! 危ないっ!!」

とはいえ、さすがに最後の皆だけはキツチリと守っている。スカートの捲れかければ、咄嗟に手で押さえたり。

「こっ、このおっ！ 生意気な……」

一方でデスゾロは丸太のように遅い両腕で、ステッキの乱打を払い除ける。だが、様子がおかしいのを百戦錬磨の彗星戦姫は見逃さない。

（なるほど、こいつも男だわ）

斬りかかるたびに、乳首が円を描くように揺れる柔らかな乳房。走ればはためくスカートから顔を覗かせる、張りのある太腿に、邪な男の視線は釘付け。自然と動きが鈍くなっている。



刑事 柏木遼子

晒された美肉

漫画
COMIC

ぱふえ



好評発売中!

単行本
堕天使たちの狂詩曲



確保!

もう逃げられ
ないわよ!
観念なさい!!

狙われる女刑事!



誰だ?

久しぶりだな
柏木遼子
突然だが
俺と遊んで
もらおうか

はいこちら
柏木
かしまぎ



先輩!
大変です!!

ある場所に
爆弾を隠した







ま気にした
としても

堂々として
いれば誰も
気づかんさ



く…
見られてる

真つ昼間から
乳放り出して
歩いてる女が
刑事だなんて
思わねえよ

大丈夫…
落ち着くのよ

この程度
水着と思えば
別に…

あれ…?
あの人って

なんだよ
アレ
痴女?

おい…
うわっ
なに…?

おっぱい
でけー♥
エロ…

AVか?
恥ずかしく
なんか…
だったら
頼んだら
やらせて
くれるかも

みんな
見てるぜえ
視線を感じ
てるだろ?

ハッ
ない…





いらっしやい
ま——



あの店で都合が
悪いのなら



やはり——

隠しカメラを
仕掛けて
いたか——



ヤツは尾行
してはいない
どこかで
映像を見ている

くそ……
見るなっ
スケベどもめ



視線が
手になって



262円に
なります

あ！
財布……



ククク……
ど……にかして
売ってもらっ
しかねえな

あなた……
最初から



触られてる
みたいだわ



私のオナニー
見せあげる♥



躊躇してると
ドカンだぞ

ねねえ♥
お財布忘れ
ちゃったの

あとで払う
から今は…



おやおや
交渉成立
だな♪

ママジ
ですか？
そりゃウチは
構わないスよ



ババカ！
何言うのよ

よくできた
音声合成だろ



や…あ



はあ あ…う

んん



さあ…

はう



將軍王女
ディーナ
痴辱の戦争裁判

小説
NOVEL

Kyphosus

挿絵
ILLUSTRATION

トモセシュンサク

気高い女軍人がプライドと衣服を剥かれ、
大衆の前で恥辱を晒す!!

硝煙と赤錆の臭いが染み付いた戦場の一角に、野戦服姿の男達に取り囲まれるようにして彼女は立っていた。男達とは系統の違う軍服の彼女は、帽子やベルトの紋章から、別の国家に属していることが分かる。

衣装そのものも、男達の実用本意の戦闘服とは違い、彼女の軍服は良質な生地を用いた高級将校用だ。膝まであるコートの下からはブラウスとミニスカートの覗き、朱色のネクタイが色彩を引き締めている。

異国の軍隊に取り囲まれているにもかかわらず、彼女は堂々と胸を張り、不動の姿勢で立っていた。長い髪が僅かに風になびき、軍服の上からでも分かる見事な胸は規則正しく落ち着いて上下している。青みがかった高貴な色を宿した瞳は、男達の蔑みと悪意、好色の混じり合った視線にも構わず、ただ正面を見据えていた。

一方、男達は、半分は彼女の背中側に少し離れて群がり、残りも左右に並ぶ。正面には、軍服ではなく仕立ての良い背広姿の瘦せた男が一人。前後には映画撮影用のカメラが回っている。それは、戦場ででつち上げられた即席の裁判所に見えた。

「それではこれより被告、『連合王国』ディーナ将軍に対する、『帝国』軍事法廷を開廷する。まず、告発人」

最初に口を開いたのは背広の男だった。劇を演じるかのように、大げさな仕草とゆっくりとした口調だ。

背広の男の嘲るような視線に射られ、中央に立つ美女、ディーナ将軍はこれから受けるであろう恥辱を思っただけに身体を強張らせる。

「くっ……こんな茶番劇で、この私が、王国の王女が貶められるなんて……！でも、耐えなきゃ……私さえ、この悪趣味な意趣返しを我慢すれば……」

彼女は軍服の下、均整のとれた見事な肢体を少しでも隠そうとするかのように、身を竦ませた。そんな彼女をよそに、カメラはカラカラと回り、裁判劇は進行していく。

「はい、宣伝相閣下……じゃない、裁判長。被告ディーナ将軍は戦闘中、あのエロい身体で我々帝国軍を誘惑しまくりました……これはとてもない犯罪ですよ！自分は興奮しすぎた隊長殿に何度も掘られそうに……ううっ」

彼女の右手に立った下士官の一人が、馬鹿げた告発をした。三文芝居以下のその内容はしかし、主役を強制されたディーナの屈辱感をかえって掻き立てる。どんなに侮辱的な脚本であっても、彼女に降板は許されないのだ。

「では弁護人。意見はあるかね」
背広姿の二世裁判長が、今度は左手の男達に呼びかける。

「裁判長。告発人が襲われたのは被告の責任ではなく、彼の上司がただの同性愛者なせいではないでしょうか？」

弁護役の眼鏡の士官が、妙に真面目くさった態度で言う。件の上司らしき男が怒りの声を上げた。

「あ!! 貴様つ、ふざけんなっ!!」
「ですので、ここは証拠物件を隊長に見せて、エレクトロするかどうかを確認するべきと思います」

弁護人は表情を崩さぬまま、悪意の籠った仕草でディーナの胸元を指す。裁判長はそれに頷き。

「ふむ。なるほど。では被告、ディーナ閣下は証拠を提出したまえ」

「な、何でもするか、証拠つて……」

カメラと視線が合ってディーナはおぞましい予感を覚えた。それは単なる記録用カメラではないのだ。裁判長役の男、帝国宣伝相がこんな茶番に出演しているのは、国民を煽動するための映画を撮るためである。今から彼女の受ける屈辱は、遠からず帝国じゅうで上映される予定になっている筈だ。

「一体……私は何をさせられるの？」
不安を固唾とともに呑み込んだ彼女に、裁判長がおもむろに命じる。

「胸と腰を証拠として開示したまえ、閣下。軍服の前を開け、下着を取るように。下はスカートを外す。ショーツはまだいい」

「なっ……そんな馬鹿なっ……いい、いくら虜囚の身とはいえ、連合王国王女のこの私が、人前でそんな辱め……断じて、こんな茶番は……っ!!」

未だ男を知らない身体を獣のような兵士達に見せろと命じられて、ディーナは愕然とし、それから強く一歩踏み出して背広の男に拒絶を叫んだ。
「お、非協力的態度だぞ、この戦犯」

「おっぱい、早くしろおっぱい!!」
下品に野次る男達を、ディーナは睨みつけてたじろがせる。だが、強気はそこまでだった。宣伝相が割り込む。

「静粛に!! 閣下、これは本法廷の決定である。それとも、ご自分の部下まで戦争裁判に掛けたいのかね？」

「……っ!!」

逆らえぬ理由のある敗将は、裁判長の冷酷な指摘に息を呑み込んだ。

「くっ……わ……分かりました……」
掠れ声を喉から絞り出すと、白手袋の指を軍服の前におずおずとあてがった。周囲には百名を下らない裁判員気取りの将兵達。カメラも乗り出して、手元を覗き込んできている。

「くっ……こ、こんな馬鹿馬鹿しい茶番に、この私が……辱められて、笑われるなんて……部下のためでさえなければ、奴と相討ちでして……っ」

震える指でボタンを一つ外すたびに、男達の視線が肌に突き刺さるような気がした。そしてシャツの前を開き、ブラが見えた時点で手が止まる。

頬を真っ赤に染め、目の前をきつく睨み、ぎりぎりと歯ぎしりする。胸の中で憤りと羞恥心が高ぶり、命令と拮抗しているのだ。そんな彼女に、宣伝相は面白そうに目を細めて論じた。

「ディーナ殿。いいかね、これは必要な犠牲だよ。憎つき連合王国の将軍王女様が、兵士達の前で裸身を晒し、盛りのついた雌犬のごとく恥辱に塗れる……こうでなければ、我が国民の怒

りを慰める役には立つまい？ 貴方の部下達の処刑ショーの代わりに、ね」

今大戦で、『連合王国』は強力なカリスマ指導者を得た『帝国』に圧倒されていた。前の戦争で連合王国が帝国から戦利した領土のほとんどは占領され、通商は壊滅状態に陥っていた。

連合王国の將軍である王女ディーナも、善戦空しく投降を余儀なくされるそして、捕虜となった彼女は部下達とは別に、一人呼び出されていた。

彼女を待ち受けていたのは、帝国の舌、總統の右腕と言われる男、宣伝相だった。瘦身を仕立ての良いスーツに包んだ彼の表情はにこやかで、口調は穏やかだが、目は氷のように冷たい。

「ディーナ殿。残念ながら、貴方の部下は全員戦犯として処刑せざるを得ない。無論、貴方もだ」

彼はいきなり理不尽を言い放つ。

「なっ……そんな馬鹿な……っ！ いえ、私は構いません……ですが、部下達は……部下達はどんな戦争犯罪を犯したのですか？」

ディーナは思わず詰め寄ろうとして、護衛の兵士に取り押さえられた。だが宣伝相は微塵も動ぜず続ける。

「……犯したとも。先代女王、つまり貴方のお祖母様が、ね。先の大戦で貴方が我が国に押しつけた、莫大な賠償金、経済封鎖……塗炭の苦しみを味わってきた国民は恨み骨髄ゆえ、ここで捕虜に何もしなければ、国中で暴

動が起きてしまう」

「ぐっ……そんなっ……何とか、何とかできませんか……私は……どんな死に方でも構いません。だから……」

冷酷な政治決定を前に、ディーナは震える視線で宣伝相を見据えて叫び出した。自分の犠牲で部下達の命を安堵できるなら、と。すると。

「ほう。殿下にそこまで覚悟がありなら、話は別だ。実を言えば、他にも国民の憤懣を晴らして、貴方の部下を助ける方法はない訳ではないのだ」

「ほ、本当ですか？ 宣伝相殿」

一縷の希望を見いだしたと思ひ、身を乗り出す王女。だが男は、獲物を罠に掛けた獵師のような顔で笑った。

「本当だとも、ご期待あれ。これこそ私の宣伝相としての腕の見せ所だ。ま、ディーナ殿下にも一肌脱いでもらうことになるが、ね」

+

「さて、司法取引という。部下と引き換えに、裁判を止めますかな？」

「ううっ……そんな取引……くっ……分かりました……続け……ますっ」

裁判長の言葉に拮抗を崩された王女は、脱衣を再開した。美しい顔を怒りに歪め、齒を食いしる。裸体を人前に晒すだけでなく、誇りを顧みようともしないこの男に、馬鹿げた茶番で愚弄される恥辱が堪え難かった。

視界を歪ませる涙を必死で堪えつつ、スカートを外し、下半身を隠すパンスとショーツをさらけ出す。

（駄目、駄目よ……耐えなければ……私さえ耐えれば……みんなが……）

そして今度は、指をブラのホックにかけ、躊躇い、震え。

一思いに外した。解放された乳房が勢い良く飛び出し、肌色のプリンのように震えた。汗がきらりと光る。

（あつ……わ、私、とうとう……）吐息とともに、痛烈な羞恥と疼くような何かが彼女の体内を駆け抜けた。

「ほお、これがあのディーナ將軍の証拠……見事なシロモノだな」

「じつにけしからんおっぱいだ」帝国將校達の下卑たざわめきが耳に入り、ディーナの身体は制御できないほどがくがくと震えた。汗が吹き出し、心臓が破裂しそうに高鳴る。

（見られているっ……私、身体を……男達に見られて……こんな、屈辱っ）突き刺さる無数の視線に、肌が、乳房が、至る所でじりじりと疼くようだった。胸奥に羞恥心の塊が膨れ上がり、切なく悶える。彼女は思わず手で隠しそうになるのを必死で堪えた。

そこに、裁判長が更に指示を下す。

「ディーナ殿、後の陪審員達にも見えるよう、そのまま一周したまえ。凱旋パレードのように、ゆっくりとな」

+

「ううっ……はあつ、はあつ……」

居並ぶ男達の前を、乳房とショーツを晒したまま歩かされたディーナの胸は大きく上下し、羞恥と憤りの汗に濡

れて肌は光っている。

だが感情とは裏腹に、過剰興奮により、彼女は身体の制御が効かなくなっていた。ひとまずの終わりに膝の力が抜け、思わずへたり込んでしまう。

「ふむ、まずはそんなところか。それで隊長、どうかね証拠物件は？」

「はい、裁判長殿、もうビンビンであります。ご覧になりますか？」

呼ばれた隊長は向き直り、やおら己のズボンの前をまさぐった。

「やめたまえ、隊長。私はそんなモノを見る趣味はない」

眉を顰めた裁判長に弁護人が言う。「裁判長、殿下にご確認頂いては？」

不意に名前を呼ばれ、囚われの將軍王女は悪寒を覚えた。

「なるほど、名案だ。ではディーナ隊長の男性器がどうなっているか確認し、報告してくれたまえ」

「え、ええっ……ひっつ……」

座り込んだディーナの前に、大柄な隊長が立ち塞がる。無精髭の浅黒い顔に卑しい笑いを浮かべ、やおら腰を突き出してきた。汚れたズボンの前は、奇妙に盛り上がっている。

「ぐは、ははっ、それじゃ殿下、俺のがどうなっているか、じっくりとご確認をお願いしますよ……よっつと」

ふははは！
愚かな人間共め…
俺達ノイズ種の音を
理解出来んとは…

ふふふ…
この素晴らしい音を
理解するまで
聞かせ…

そこまでよ！
今日も悪さしに来た
アンタ達！

正義の
アイドルヒロイン
シエル

魔法の
歌姫登場！！

私もきてましたー

シエルのパートナー
ミール

アイドルデュオ
歌姫二重奏
シエルミール
～墮落のユニゾン～

そんな壊れた音ばかり
垂れ流してー!!!
アタシ達 歌姫二重奏
「シエル・ミール」が
許さんーッ!!

漫画 夢乃狸
COMIC

みんなっ!!
急ぎな
逃げて

ちッ
邪魔が入ったか…
アブホーラ様に
至急連絡だ…

はッ…

待てえッ!!

そうは
させないッ!!

レインボー
ユニゾーン!!

ドゥン
ドゥン
ドゥン

ア... アブホーラ
様あああッ!!

へッ!
不協和音なんて出し
てんじやないよッ!

変身解除つと...

覚悟しな
さーいッ!!!

やつばアタシと
ミールの二重奏は
最強だよねー
ミー...



…ミッ
ミールッ!!

ごめんシエル…
いきなり後ろから
不意打ち受けちゃって…

フフフ…
油断していたわね
シエル・ミール!

淫魔
アブホーラ

ひ…
卑怯な…ッ!

さて
どうしようかねえ

この娘を無傷で
返してほしくば…

ああん?
今のアンタは
そんな事言える
立場かしら?

私の代わりに
アンタに人間の男の
チ●ポ汁を集めて
もらおうかしらねえ…

アレは私の美貌を
保つのに必要不可欠
なんだよねえ

はッ?

はあッ?

あら…
いいのよ?
別にやんなくても

その場合この娘は
私の使い魔に
孕まされちゃう結果に
なるんだからねえ

私達は二人で初めて
力を発揮できる二重奏…
大切なミールを
失うわけには…

く…
仕方ない…
どうすれば
ミールを…!

なあに…
簡単よ

アンタには
ソロでライブを
してもらおうわ…

そ…それだけ…?
そんな…

ただし
いつもと
違う条件を
ひとつだけ…

パチッ

なッ!

キュッ

ふ…服が…
短くなつたッ!?

ちょ…

ちょっと…
これで人前に立つ
なんて絶対無理…

言ったでしょ?
アンタは私の為に
人間から精液を搾取
してもらうって…

ハンッ…
アンタ何も聞いて
なかったの?

ちようどアソコが
よさそうね…

ほら
行くのよ…
シエル…

そ…も…
イキナリ…ッ?

…くう…
仕方ないわ…
こんな事でも
ミールの為…

すぐに
終わらせて
やるんだから…!!

んーッ!
けどやっぱ
恥ずかしいーッ!!

ははあーい!
みんなあーッ
ちゅうもーつく!!

まあ
続けるしか…

えーッ!
なんかパンツ
なくなっ
てんじゃんッ!!

じ実は今晚のライブに
先駆けてシエルが単独で
スペシャルライブを
やることになりましたー

どう
したんだ?

今日の
シエルちゃんの
衣装きわどくね?

か風
ふかねえかな…

やだあ…
みんな肌超見てる…
ほんと恥ずかしくて
火噴きそう…

聞こえるシエル？
やっぱりチラ見せ
だけじゃ射撃まで
到達しないわねえ

アプホーラからの
通信…ッ

もう少し露出して
もらおうかしらねえ
シエル…脱衣して
もらおうかい

やバ…
チロホモ…

超ロイヤ…
シエルたん…

出来るわよねエ？

ぬぎッ

という事で
…今日はなんか…
皆の視線が熱いから
いっぱいサービス
しちゃおうかなあ…

あは…
あはは…

く…
くっそおろッ！
おぼえてろよッ！！

や…やば…
なにこの獣みたいな
熱いまなこし…

かしこいねえ…
じゃとつとと楽器
演奏しなさい…

あああーっ…
もう超恥ずかしい…

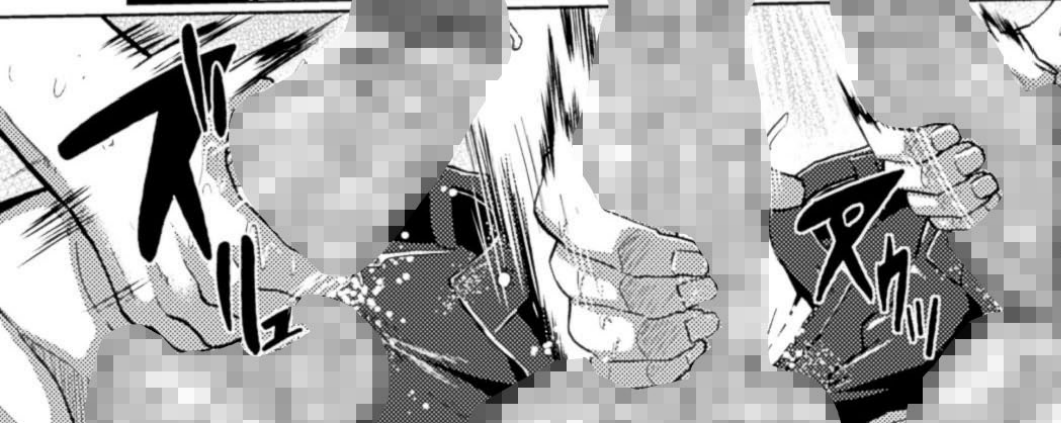
僕らの憧れの
アイドルおっぱいは
綺麗な乳首してたんだ…

しっ…シエルたんは
うっすらまん毛が
生えてるんだね…

うおおお…
シエルちゃんのお
ま●こラインツ！



うう…すっごい
いやらしい目で見てるよ…
おっぱいとカアソコとか
じっと見つめちゃってるし…



ええええッ!?
おちん…ち…?

やだやだあ…
やめてよ…
そんなエッチな事したら
力ぬけちゃうよ…

ほ…本当に
アタシの体見て興奮
しちゃってるワケ…？

その楽器が放つ音色を
聴いた者が性的興奮を
抑えられなくなる様に
私が魔性のスパイスを
しこんでおいたのよ

そうよ…でも
欲望のスイッチを
入れたのはアナタ…

それで自我を保てず
皆次々と欲望を解放
していつてるのさ…!!

シエルたん
シエルたん!!

あッ…

ち…
近くで…

可愛いよ!
おっぱいも
おま…も全部!!

やっ…♡

シエルちゃんの
赤らめた顔…
僕のオカズだ…
うおおおッ!!

換身の騎士

アルベルト

淫靡な魔女と入れ替わった肉体

第二話 恥辱の女身

小説
NOVEL

かりのけい
狩野景

挿絵
ILLUSTRATION

みどりぎむら
緑木邑

絶え間ない女としての肉欲に
抗う騎士、アルベルト――



登場人物紹介



アルベルト・メリン

ネオン王国白鷺騎士団に所属する騎士だったが、魔女の策謀により身体を入れ替えられてしまう。



ナスタロヴィカ

他人の肉体に乗り換えてゆくことで長い年月を生きてきた魔女。享楽的で飽きっぽい性格。

トバイアス

ネオン王国白鷺騎士団に所属する、アルベルトの同僚の騎士。

前号までのあらすじ

アルベルトは苦戦の末に人々に害をなす魔女・ナスタロヴィカを捕らえるが、不意を突かれて身体を入れ替えられてしまう。感じすぎる豊満な女体に戸惑う彼はそのまま自分の身体に犯されてしまい、魔女には逃げられてしまう。そして、そこに現れた同僚のトバイアスに弁解するのだが信じてもらえず、そのまま捕らえられてしまうのだった。

「おいっ、起きろ！」

「あぐっ!! なにを、する……ッ」

いつの間にか疲れ果てて眠ってしまったらしい。いきなり頭を蹴飛ばされて目が覚めた。魔女の根城である洞窟の入り口付近に設けられた陣営に、野晒しで拘束されている。元の身体ならばこの程度の野宿などどうということはないが、いまの肉体には硬い地面の寝床は過酷だったようだ。節々の痛みには硬き身を起こすと、手足にはまった魔封じの枷から頑丈な杭へ伸びる太鎖がジャランと鳴った。

「そうか、私は魔女と身体を換えられ、軍に捕らえられて……ッ」

溜め息を吐く。その声が男の物ではない甲高きで甘く切なげな響きを孕んでいた。俯き見ると騎士の鍛え上げられた胸板ではなく、肉感的な膨らみが二つ押し合う様が目に入る。扇情的な鏡の胸当てというよりは乳当てと称するのが相応しいカップに収まりきらず、僅かな身じろぎにも揺れ弾む。

(こんな、物が……。私の胸に……ッ)

男であるのに。王国の騎士であるのに。男の劣情を刺激する乳房を持つ身体になってしまった。

束縛された両手で横座りに上体を支えると、細く

括れた腰が意図もせぬのに、くねつと蠱惑の曲線を描いていた。しなやかに長い両脚を崩して、むっちり肉付きを増した桃尻を地面にべったりつけると、舐め回すような兵士の眼差しが、しどけなく開帳された股間で止まる。

つい昨日までは男性としての証であるペニスと睾丸があった箇所。通常取り立てて意識することもなく、座するときも力強く両脚を開いていたそこが、いまはもつこりとした質感溢れる膨らみもなく、妙に淫靡さを醸し出す曲線に彩られた、つるりとなだらかな丘に変わっている。

腰鎧からの垂れ布は捲れ返り、鼠蹊部が見えてしまふほど面積の少ない股当てに隠されているその奥、粘液に濡れた肉壁が柔らかに割れ開いた女陰の存在を感じた。男性器の漲る感触とは全く異質な、常に疼きを覚えていた心許ない感触。

申し訳程度とはいえず下着に隠されている。直接その秘部を見られているのではないのだが、兵士の眼差しはますます熱を帯び、息が荒くなってきた。

「寝てる間もそんなにたつぷりの男汁、腐れまんこの中に溜め込んでやがったのか。淫乱女めっ!!」

兵士に嘲られ、慌てて股間を確かめ見る。

「ひっ!!」

魔女に誘惑され膣内へと怒張を突き込み、たつぷりと放った精液。魔女に奪われた自分の身体に犯され、たつぷりと放たれた白濁。

子宮と膣をいっぱい満たしていた自分自身の牡汁が、まだかなり中に残っていたらしく、寝ている間に溢れてしまっていた。

「み、見るなああッ!!」

アルベルトは慌てて両手で垂れ布を掴むと、股間を隠しながら汚れをゴシゴシ拭いた。

(くうっ、私の、ものがあ、膣内からッ!)

いままで経験したこともない恥ずかしさに、顔が

真っ赤に染まる。無防備に広げていた両脚を怯えたように窄めてしまう。まるで本物の女のようだ。折角の淫らな眺めを遮られ兵士が舌打ちするなか、

「ぬあッ!!」

股間を拭く手が強すぎたらしい。下着の中の敏感な部分をぐりんと引つ掻き、息が詰まるような熱い痺れが脳天にまで駆け上がった。

(く……あ、あ、なんだ、いま……の。あの、程度で……。こんな……。敏感、すぎる、この身体あ)

背中が激しく打ち震え、身体中から力が抜けた。すべての細胞が喜びに染め上げられ、甘く気怠い疼きに支配される。男の身体とは何もかも違う。

あまりにも感じやすく、それでいて快楽に弱すぎる。このままずっと、この身体でいなくてはならないのかと、改めて途方に暮れていると、一部始終を見ていた兵士の呆れ声が冷たく投げかけられた。

「股ぐら濡れ濡れでお目覚めかと思つたら、今度は自慰で満悦かよ。丁度いい、お前にいい物持ってきてやつたぜ」

「ト、トバイアス、聞いてくれっ、私はっ!!」

兵士の言葉に不安を覚えつつ、その傍らに屈強な百人長の姿を見つけてすがり寄る。

とにかく自分がアルベルト・メリンであり、魔女ナスタロヴィカの魔術によって、肉体を入れ換えられてしまったことを信じてもらわなければならない。

「やれっ!!」

だが彼の口から放たれたのは部下へと命じる、怒りの籠もった一言だけだった。

「くあッ、や、やめ……。なにをっ!!」

杭につながれた鎖が外され、俯せに這いつくばらされる。枷をはめられた手足で四つん這いに身を起こした目前、兵士が手の中の物を見せつけてくる。

「――そ、それは!!」

アルベルトの背筋を寒気が走り抜けた。

両サイドを紐で止める方式の女性用下着。その紐にあたる部分が頑丈そうな革ベルトになっていた。

「貴様のアジトから見つけ出した物だ。どう使うかは自分が一番よく知っているだろう?」

自分は魔女じゃない。知るわけない……のだが、その形状からすぐに察しがついた。いま穿いている扇情的な下着に負けぬほど、面積が際どい股当て部分の内側。そこから異様な突起が生えている。

指三本を纏めたくらいの太さで、その表面は節くれ立ってゴツゴツしている。微妙に反り返って伸びたその先端で、傘を開きかけた茸のように膨らみを得た箇所が狂おしい雰囲気を出していた。

そんな物が二本前後に並び、いまにも脈打ち始めそうな生々しい形状を誇示している。

「こんな……ものを……!」

「ああ。穿いてもらおうか。何をそんな怯えた顔してやる? どうせいままでに自分でも試してみたことあるだろうが!」

ナスタロヴィカ本人がどうだったのかは知る由もないが、少なくとも自分はこんなもの試す気にはない。こんな異物が内側についている下着など。

「魔封じの枷を外すわけにいかねえからな。おい、お前ら手伝ってやれ」

だが這いつくばった身体を、百人長に命じられた兵士に押さえつけられた。

「ふあっ!! な、なにをするっ! は、放せっ」

たった二人の男に両肩を軽く押さえ込まただけでさっぱり身動きできない。それどころか露出した脇腹を直に押さえられると、くすぐったいような心地よさを覚えて、悩ましい吐息が溢れる。

「うは、すげえ肌すべすべだ」

「触った途端、汗はんでしっとり粘りついてきたぜ」

任務中は女つ気とは無縁になる。貴重な女身の触り心地に、まだ若年の歩兵が喜びの声を零した。

「それにしてもすげえ下着きだな。でっかいケツが殆ど丸見えじゃねえか」

その生肌を晒す尻肉に興奮の吐息を吹きかけながら、兵士が下穿きを脱がす。

「や……めろ! 私に触れる、な、ひあ……」

白く濁った濃密液の糸を幾筋も引いて、ぬちゃやあと陰部にへばり付いた布地が剥がれる。

「く、こ、んなあッ。く、そ、お……っ!!」

熱く蕩けた体液に濡れた敏感粘膜部に、冷たい外気が触れて身が竦むような感触に見舞われた。

「うわっ、こいつの股ぐら、もうドロドロだぞ。こんな汁たっぷり漏らして、下着ぐちよぐちよ」

溢れくる精液にふやけた花弁はねつとり綻び、薄紅に色づく秘裂の内側を何から何まで晒していた。

開きっぱなしの膣口が、小刻みに打ち震える。その度、穴奥から白濁がこぼと垂れ零れた。

腔内で熟成した栗花臭がむわんと立ち上る。

「チッ、どうしようもねえ淫乱だな。際限なく汁の量が増えてきやがる。そんなに急かさなくても挿入でやるぜっ、お望みどおりになっ!」

縦に並んで備え付けられた生々しい形状の張り型。その先細った先端が、膣穴と肛門、前後二つの入り口にずっぷりと埋まり込む。

「やめろっ! そんな、とこっ、挿入るなあッ!!」

異物が股間の内側に侵入してくるという感覚が耐えられない。挿入を許してしまう穴が、自分の身体に生じてしまった事実がたまらなくイヤだ。吐き気を催す嫌悪に苛まれる中、男たちの手に押し込まれる疑似陰茎は、お構いなしで女肉に埋まる。

「ぬううううっ!!」

強烈な刺激に息が詰まった。

（ああッ、挿入……るうッッ!! なぜ、こんな、簡単……にっ! いや、だあッ、くるなああッ!!）

股間の内部を犯されるおぞましさに寒気が走った。

なのに先端部を咥え込んだ前後の穴門は、耐えがたい感触を味わおうと激しく窄まる。

その締め付けを、たっぷりすぎる潤滑でほぐしながら、前後同時に硬竿がめり込んでくる。

ぬぶっ、ずぶっ、ズツ、ずぶぶっ!

「はわ、あッ、やめっ、やめえ、りよッ!!」

以前は睾丸の付け根だった部分が無理矢理押し広げられた。灼熱の極太が身体の中へと埋まり込んでくる感覚に戦慄が、ヌルヌルの粘膜裏が竿肌に擦られた途端、甘い衝撃に脳裏を支配された。

（うわあッ、またッ、この感触うっ! なんで、こんなっ、くそ……お、イヤ、だ、あああッ!!）

異質の甘美に抗おうと歯を食いしばり、溢れくる嬌声を堰き止めた。騎士たちが見ているのに、だらしなくよがる姿など晒したくない。だが激烈な膣穴の挿入感に加えて、後ろの排泄穴にもう一本の張り型がめり込んできた。

「ぐうっ!! そんな、とこ……にっ! やめ、んむううう!!」

排泄の穴を強引に逆走してくる異物に、身体中が緊張を強いられた。太さは前穴を埋めてくる物と同じ程度なのに、何倍にも大きく感じる。

ぐちいつ、むりりイ、ぬちっ、ぬぶっ、ずぶ。

ところどころにぼぐれた膣穴と違って、柔軟に欠ける直腸はガッチリと窄まり、押し広げようとする鎌型にも抵抗を示す。更には異物感への緊張が菊門を窄めて硬竿との密着を強め、いっそ受け入れてしまった方が楽なほどに異物感を高めた。

「あッ、あッ!! 挿入って、きてしまっうっ! そんなとこっ!! ああッ、前もッ! やめッッ」

だがどれほど窮屈に締められても、穴が開いている限り先細った剛直には潜り込まれてしまう。膣から溢れかえった潤滑蜜が後ろ穴にまで流れ込み、浮き立つような擦れ感だけを残して摩擦を和らげる。



ぬぶつ、ずぶうつ、ずぶずぶ、ぬぶぶんっ!!

「やめッろおつ、こんなものッ。こん……な、ふぬうッ! はっ、はうッ!! あうッ、挿入れる、なッ!」
膣穴だけでも狂おしいのに、肛門まで満たされたらどうにかなくなってしまふ。

「すげえな、もう半分以上上啜え込んだじまいやがったほら、遠慮しねえで全部味わいなッ!!」

兵士が張り型の残りを一気に押し込んできた。

ぬぶうぶずぶぶんッッッ!

「へぎいっ!? はぐうッあはあああッ!!」

子宮と腸奥がガツンと弾き上げられ、問答無用に意識が跳ね上がった。

「ひあぁっ、なにか、ク……ルッ! だめ、だ、これ……ええ、イヤ、だ……ッ」

柔らかな濡れ肉に密着して、硬くふてぶてしい極太が存在感を誇示していた。鏃の返しのように張り出たエラが牝器官の髪を捲り返して食い込み、嫌でも快感を湧き上がらせる。懸命に堪えようと気を張り続けるが、肉体がその刺激を欲してしまう。

軽く反り返った硬くて太い異物に、股間と尻の内側をみっちり満たされている。その感触を意識させられるだけで、もう身体が戦慄して仕方ない。

トクトクと速いリズムで脈打ち続ける奥の熱壺が、ただ一度、ドクンと大きく打ち震え、辛うじて堰き止めていた甘美の塊を一気にはね上げた。

「おおあああッ! んあ、あ、はああああッ!」

ガクガクと震える背筋を弓なりに反らし、巨乳を地面に押し下げながら突つ伏す。

ぶじょッ! びゅじょじゃじゃああ——ッ!!

堪えようと思う暇もなく、尿口から激しい飛沫が噴き出して下半身をぐっしり濡らす。

「うへ、小便漏らしたぞ、この魔女」

「しかしたつぷりと垂れ流しやがったな。臭くてたまんねえ」

甘く饅えた匂いを立ち上らせる牝液に顔を響め、兵士が丈夫な革製の下着をきちんと穿かせる。

深々と埋まった張り型ごと尻と股間が包み込まれると、魔導の仕掛けが頑丈な革ベルトを固定し、脱げないようにしてしまった。

「ふあッ、ああ、は……んうううッ!!」

「さすが愛用品。サイズぴったりだな」

膣穴を入り口から奥までみっちり満たされている。それだけでも気が変になりそうだというのに、

肛門まで硬く太い異物を挿入され、強烈な便意が押し寄せているような焦燥感が渦巻き続ける。

「この淫乱女がアルベルトを殺つたのか?」

「ああ、しかも奴を慰み者にしやがったらしいぜ」

「女も買わねえほどくそ真面目な奴だったのに。こんな下衆魔女が最初で最後の相手かよ!」

いつの間にか顔見知りの騎士たちまで集まってきた、周りを取り囲み侮蔑の眼差しを注いでくる。

「くう……う、ち、違……うッ!!」

自分がアルベルト本人であることを証明したいが、官能に思考が乱され説明できない。異物の感触に尻をくねらせ、ただ視線だけで訴えようとする。

「う、あふ、仲間があ、見てる。ああ……。こんな

ンンッ! 姿、をお……ッ」

無様な四つん這いをこれ以上晒すまいと身を起すと、拉げていた乳房がぶるんと弾む。

「くう……う、女の、胸え。こんな、物があ」

一斉に注がれる視線に、恥ずかしさが込み上げる。隠そうとしながらも直接触れるのをはばかって腕

を前に漂わせながら、へっぴり腰の膝立ちでよろめく。扇情的な露出鎧も台無しな無様な仕草に失笑が起

こり、情けなさが更に込み上げた。せめて喘ぎ声だけでも堪えようと唇を嚙んだその途端、

「あッ、あああッ、なんだッ、これえッ!」

甲高い悲鳴を張り上げ、へたり込んでしまった。

「なん……だ……!? なんで……え? あうふッ、んむおおおッ!! 太す、ぎい、んぐう、まだ、大き……くう……ッ! あ、ああ、無理いッ!!」

双穴内で陰茎型の硬い異物が、更に太さを増して刺激に蠢く襞壁を容赦なく押し広げていた。

膣口から子宮に至るまで過敏な敏度が限界まで拡張され、疼痛に近い快感が強烈に逆巻く。ますますその過剰感が辛くなるというのに、

膣壁が一層窄まり、太さを増しゆく幹を締め付け密着度を高める。

「くあッ、あ、あッ、抜いて、くれえッ! こんな、こんなのッ!! ふあッ、抜けッンンッ!!」

直腸内の異物感には限界を超えていた。壮絶な排泄欲に気も狂わねばかりなのに、

圧倒的な質量を追い出すことが叶わない。堪えようと意識を集中しよう

にも、前後で異質な刺激が同時に襲いくるのでどちらにも立ち向かうことができなくなる。

いきなり膣と直腸内で張り型が大きさを増した。痴態を指さし訝しむ騎士たちを、見ないでくれと

懇願するような眼差しで見回す。引きつった美貌が、一人の兵士の手元を凝視した。

片手に収まる大きさの石版のような物を握っていた。表面に小さなツマミが二つ並んでいる。

その片方を男は先ほどと逆側の細い陰茎を表すアイコンが描かれた方へと回す。

すると双穴を張り裂かんとばかりに膨張していた極太が、あつという間に元のサイズよりも細く萎んだ。

「ッ、ふあッ! なにを、した……? んあ」

意識が飛びそうなほどの激悦が瞬時に和らぐ。強張らせていた身体を緩め安堵の息を吐く。

「遠隔……操作ッ!? そんな、物があ!!」

あまりの恐ろしさに血の気が引く。

「い、じるなあ、そんな……ものおッ!」

萎えた両脚を踏ん張って、忌まわしい操縦機を奪おうと手を伸ばす。そのアルベルトをちらつと一瞥

「い、じるなあ、そんな……ものおッ!」

ただで、男は手に入れた魔導具に興味を注ぐ。
二つ並ぶツマミのう片方を、陰茎の両側で波線
が震えるアイコンが記された方へ目いっぱい回す。

——ブイイイ~~~~ンツ!!

「ぼわああああツツツ!!」

くぐもった振動音が鳴り響いた。途端に立ち上がりかけていた脚から一瞬にして力が抜け落ち、アルベルトは再びへたり込んでしまった。

「やめろっ! やめ……ッ、やめ……ろお、くああああ~~~~~~~~ッ!!」

ヴァギナとアナルの中で、ディルドーが激しく振動しながらぐねぐねとのたうち、鋭敏極まりない粘膜壁を滅茶苦茶に掻き乱している。

「動いてるう! 私の、中ああッ!! やめろッ、だめ、だめだッ、ああ、こんなの——ッんああッ!」

抗いようのない快感が脳裏を埋め尽くす。

（この、身体ッ、ああああッ! なんて、こんなッ!! ふああッ、感じッ、すぎるッ!!）

痛みならどれほど激しくても耐ええる自信があったが、こんなのどうにもならない。頭がぼんやり蕩けて少しでも気を緩めると何も思考できなくなる。

「すげえな!! 挿入してるヤツが中でぐねぐね動いて掻き回してるんだろ?」

「あんなスケベな顔になっちゃって。もう俺たちのことなんか眼中ねえって様子だな」

（——!! そんな、顔に? く、ああああッ、だめだ、こんな刺激……ッ、こらえきれないツツ!）

穴全体を振動で揺さぶりながら、ねじ曲がる幹肌

が、ごりん、と壁壁をランダムに挟る。

その都度アルベルトは、身体を仰け反らせながら尻を迫り上げてはまたガクンとへたり込む。

「くあッ、動く、なッ。こんな、邪魔な……ものつ。んえああああッ!」

手で抱え込み、指が食い込む甘美にまた喘ぐ。

「クソ魔女のくせに、色っぽい声張り上げやがって」

「どこまで淫乱なんだよ。スケベな身体持てあまして、いつもそんなので慰めてるのか?」

その様を眺めながら、男たちが次々と自分の陰茎を握り締め、小気味よく抜き始めた。

（私の、身体を見て……!? く……うッ!）

情欲の対象にされている。あたりまえだ。こんな扇情的な肉体で、はしたなく乱れているのだから。

（あんな、もので……私をッ）

いま股と尻の穴をすぼすぼ掻き乱している張り型の代わりに、彼らの肉竿が代わる代わる自分を犯す様か思い浮かぶ。

「冗談じゃ、ないッ!! 私は、男……ああああッ」

途端に甘美が子宮を打ち震わせた。

「こんなかいか乳してどこが男だ、雌豚魔女ッ!」

「ちんぽ直に見たら、悶えるのいきなり激しくなりやがったくせによッ!!」

「作り物なんかじゃなく、俺らの生勃起挿入で欲しくて仕方ねえんだろ。とんでもねえ淫乱魔女だな」

「——!! ち、ちが……ンッ! 男の物など、私はッ、ああ~~~~~~~~ッ!」

騎士たちからの侮蔑が、悔しくてたまらない。

（なんで……この、身体、こんな、敏……感ッ。ああ、動いてるうッ、ずつと、中でッ、ぐりぐりされてッ!! くッ、ううッ、うう~~~~ッ!）

シコシコと男たちの扱く勢が増すにつれてすべての勃起竿が一段と膨張した。カウパーが溢れかえり指と怒張の間でぐちよぐちよと粘る。

（ああッ、あんなに、汁ッ出てる。私を、見て……みんな、あんなに……。——ッ、な、なにを考えて、私は……ッ。ああ、だめ、だ、もう、感じ、すぎて、頭が、うわ、あ、ああ、はあ、ああああ……）

穴刺激が濃度を増すほどに、淫裂の上端が灼熱の

疼きを滾らせ、小さな粒突起を充血させてゆく。

（ああ、ここ……もの凄く、疼くッ。ああ、むず痒くて……切なくて、たまらないッ!!）

ペニスが勃起する感覚に似ているが、疼きのもどかしさが比較にならないほど強い。

（だめだッ、こんなところッ。絶対に……ッ。ああ……で、でも……）

触れたら最後、何もかもが瓦解する。危険なのは重々承知のはずなのに、我慢しきれず自分からその小粒へと指先を押し当てて扶るように捏ね回した。

「ひわッ!! ——ッツ!!」

指先に触れる硬く強張った粒を、円を描くように転がすと淫裂を満たしたたつぷりの愛液がぶじゅぶじゅと下品な音を奏でて掻き混ぜられる。ヌルヌルの感触が鋭敏な器官への刺激を何倍にも高め、計り知れぬ快感がちつぽけな肉粒から生み出された。

「おお、あ、ああああ——ッ!!」

熱波が一気に脳へと押し寄せ理性を呑み込む。

（こん……な、あ……。ここ……こん、な……敏……感ッ。ああ、ああ、溶け、る。脳、溶ける……ッ）

禁断の秘粒を自爆した後悔に苛まれるがもう遅い。

「張り型じゃ足りなくて自分でも弄り始めたぞ」

「どうしようもない淫乱魔女だなッ!」

（ち、ちが……う、身体、が、勝手、に……ッ!!）

騎士たちの罵声に言い返そうとするが、言葉は惱ましい嬌声になるばかり。

ただ気丈に、嘲笑う男たちを睨み付けるが、

「見ろよ、このスケベ魔女、イキそうだぜ!!」

（——イ、イクッ!! 私……がッ、んほおおうッ!）

絶頂を意識させられた。途端に膣と腸がぎゅうんと硬く窄まり、張り型を目いっぱい締め付ける。

「はうううンツ!! ツはうああ——ッ!」

幽を食いしほり、込み上げてきた衝動を気力で抑え込んだ。眉根を寄せた切ない表情で、熱い吐息を

静かに吹き零すと、

「イキやがった、クソ魔女。スケベな面してッ」
男たちの嘲る声が耳を打った。

「なっ!? 違うっ、わ、私はイツってなんか……」
くっ、うう……っ。ふ、うう……っ

慌てて否定しようとするが、大きく声を張り上げたらその衝撃が子宮に響いて本当に絶頂しそうだ。ただ身を強張らせ悔しげに歯を食いしばるその様に、兵士が生唾を飲んだ。

「くおっ、お、俺も、もう、出るっ!」

「なっ!? 待てっ、はうっ!!」

手淫が狂おしいほどに勢いを増し、

どっぴゅうううっ!! びゅっ、びゅびゅっ!!

ぶびゅっ!! どびゅ、ぶぶびゅるびゅるッ!

瞬時に膨張を極めた肉太の先端から夥しい量の濃白濁を、魔女めがけて一斉にぶちまけた。

べちよ、ぐちゅっ!! ぶちやべちよべちや!

「くあああッ!! き、汚いっ。そ、そんな物ッ、かけるなああッ! うぶっ、おあああッ!!」

露出過多な鎧を貼付けた殆ど半裸の淫靡肢体はもちろん、顔にも髪にも、全身まんべんなくスベルマがへばり付く。粘度が高い雫は、なかなか流れ落ちずについてまでもぶよぶよとした感触で肌を汚し続ける。しかも男たちの興奮に加熱され、気色の悪い生暖かさが嫌悪感を掻き立てた。

その熱に熟成されたのか、脱力の腐臭が饅えた牛乳のように強烈さを増し、息を止める間もなく鼻腔になだれ込んで吐き気を催させる。

意識が何度も点滅し快感だけが脳裏に渦巻く。

「こんな……物を……。汚らわしい……ものを、よくも、私に……。う、ううう……」

生真面目な騎士の成れの果ては、尻餅をついた股ぐらをビクンビクンと打ち震わせながらも、気丈に精液への嫌悪を呟いた。

「へっ。その割には、身体うずうずさせてやがるじゃないか。汚らわしい汁浴びまくって、嬉しくてたまらないってツラしてるぜ」

「ひよっとして中にたっぷり射精でももらえなくて、ご不満なのかあッ!」

なにを言っても、汚らわしい魔女の淫乱な戯言としてあしらわれ、悔しさがアルベルトの胸を満たす。軽蔑の眼差しを精液まみれの女身へ注いでくる取り巻きの中へ、これまでただ一人自慰に加わらなかった歴戦の百人長が立ち上がって歩みくる。

「ふん。男の精液まみれで満足そうだな魔女め」

抑揚なく冷淡に吐き捨てると、股当ての中から勃起していなくても申し分ない逞しさの逸物を引き出す。その先端を正面からアルベルトに向けると、

「ト、トバイア……ス、なにを? や、やめろっ、やめ……ッ、あああッ!」

じよぼっ、じよぼぼぼっ、じよばじよぼぼぼッ!!

勢いが激しい小便を頭から浴びせかけた。

「あああッ、そんなッ!! あぶっ、ぶああ、は、あああッ!! なぜ、こんな、こと……おっ!!」

絶望的な悲しみが胸を抉る。これ以上ない屈辱が、騎士の誇りを粉々に打ち砕いた。

生臭い栗花臭に加えて濃密なアンモニア臭に鼻腔が満たされ、口の中にも塩気と苦みが強い飛沫がたっぷりと飛び込んでくる。

「ぐふっ、げほっ、がはあッ、あぶっ、あがあ」

ぐびりと反射的に飲み込み、噎せて咳き込みながら身を振る。その元の姿の面影すらないアルベルトを冷たく睨め付け続けながらトバイアスはようやく大量の放尿を終えて陰茎をしまい込んだ。

「く……う、う、あ、は、ああ……」

小便と精液にまみれぐちよぐちよで身を震わせる。「出立だ! 魔女を連行し、王都へと戻るぞ!!」
ついではばかりにその汚れた美貌へ唾を吐きかけ

ると、強面の百人長は部隊へ命を下した。

元の身体に比べて歩幅が狭い。それに加え快感に萎えさせられた足は思うように動かない。だが騎馬につながれた鎖に容赦なく手枷を引かれ、アルベルトはたおやかな女体をよろけさせ必死に歩き続けた。「てめえのためにこんなゆっくり移動してやってるんだ。しつかり歩け、のろまッ!!」

それでもいまのアルベルトには息が上がるほど過酷で、引きずられるようにしていくのがやつとだ。少しでもたつくと、馬上の騎士から罵声が飛び、歩兵が槍の柄で小突いてくる。

「うぐっ!!」

ならば緊縛して馬の背にくくりつけ運搬してくればと思うのだが、彼らは、生真面目な騎士アルベルトとその部隊を死に追いやった忌まわしい魔女に少しでも多く苦痛と辱めを与えたいらしい。

膣と直腸を目いっぱい満たされていたのでは、刺激が凄すぎて姿勢を保つことすら困難だ。へっぴり腰で何度も軋び悶え懇願した挙げ句、彼らも無理と悟り、魔導パイプを小さくしてくれた。

中にあるという感じは続いているが狭穴を押し広げられる感触が消え失せ、気をつけて動く分には苛烈な甘美が弾けることもない。しかしサイズが縮小されたのはその直径のみ。双穴の奥の奥がおかしくなるほど突き上げた長さは依然として変わらず、疑似男根の先端は相変わらず子宮口とS状結腸に密着して落ち着かぬ快感をウズウズともたらし続ける。

(また、漏れ……てっ。脚い、垂れ落ちているっ) 強い刺激ではないがずっと奥底に接触されているため、子宮汁が滲みつばなしになっていて膣口から内腿へと溢れ落ちてくる。

腸内の方もやはり奥へ当たり続けている感触に、粘液がじゅくじゅくと湧き続けていた。

日差しの下で生臭い腐臭を強め、ゴビゴビに乾きかけた白濁まみれな身体を清めることも許されず、どれだけ歩き続けたらだろうか？ 子宮と腸奥の触感を常に意識させられながら一步一步足を踏み出すうちに、一行は小さな町へたどり着いた。

中央では名も殆ど知られていない、農村に毛が生えた程度の規模。活気がなく静まりかえった通りを一行が進みゆくと、屋内から様子をうかがっていた住民たちが血相を変えて飛び出してきた。

「魔女ッ!!」

まだ幼い少年が声を張り上げ、石を投げつける。

「くっ!!」

アルベルトの脇腹に命中した。

「なん……だ……? うっ」

驚いて振り向くと、子供だけじゃない。老若男女すべての人々が集まり憤怒の眼差しを叩き付けてくる。

「ついに捕まりやがったか! 悪魔の売女がっ!!」

「殺せっ、そんな奴!! 火あぶりにしろッ!」

「俺の女房をよくもっ!!」

「うちの娘を返せっ!!」

殺気だった罵声が、魔女の身体に換えられた騎士へと降り注ぐ。

（くっ、こども、魔女の犠牲となった町かッ）

投げつけられる石つぶてに顔を伏せながら、彼らの心中を想い胸が締め付けられる。

ナスタロヴィカは中央からの目が届きにくい辺境の町や村から人間を掠い、邪悪な魔導実験を行っていた。さすがに話が王都にまで届き、白鷺騎士団が討滅を命じられ、アルベルトの部隊が赴いたのだ。

（く……う……。耐えなく、ては……）

この無様な姿を罵って人々の怒りが少しでも晴れればと思うが、女にされた身体を大勢の目に晒しているかと思うと恥ずかしくて惨めでたまらない。

しかもこの被虐の切なさにも、まさに淫乱極まり

ない肉体は甘美へと変換して、子宮壺から零れる熱雫をたっぷりに増やす。

（はうっ、また……漏れて、くるっ）

括約筋を窄めると子宮と腸奥の感触が格段に跳ね上がるのでうかつに力めない。町人の中には年端のいかない子供もいるというのに、その無垢な視線の前で股ぐらからとろとろ淫乱な雫を滴らせる。

「うわ、小便漏らした!! いや違うぞ。妙に糸引いてやがるっ!」

「この魔女っ、こんなときにもスケベなこと考えて股ぐら濡らしてるのかよっ!」

「どこまで俺らを馬鹿にすれば気が済むんだっ!!」

ヌメリ汁が伝う感触に腿を擦り寄せへっぴり腰で尻をくねらせた。その仕草が余計に彼らの目を引く。

「ち、違う……これは……。身体が、勝手にッ」

羞恥のあまり、つい言い訳めいた呟きを零す。

「魔女ッ!」淫乱魔女っ!!「くたばれっ!」

途端に耳をつんざく怒号が押し寄せ、アルベルトの足を疎ませた。どのような強敵よりもこの民衆が怖い。女体に換えられた自分を魔女と信じて疑わず、憤怒をぶつけてくる人々が恐ろしい。

ますます降り注ぐ石つぶてを、騎士団は止めるどころか自分たちの身を護ると同時に民衆が狙いやすいようにとアルベルトから距離を取る。

「どうせだから、愉快な姿をもっと見てもらえ」

離れ際に馬上からトバイアスが低く呟く。その手の中に遠隔操作の魔導具を持つ。

「……!! 待っ」

顔から血の気が引いた。追いつがろうとするが萎えた足がもつれる。険しい表情をした百人長の指が、二つのツマミをいっぺんに最強へと回す。

むりいっ! ぬぶぶつみぢみぢみぢいっ!!

「や、やめっ、やめ……ろッッッ、お、おあッ!」

肛門と膣内で爆発が起こったのかと思った。

蔓草程度に細まっていた疑似陰茎が、一瞬で最大に膨張して濡れ穴が強引に拡張される。

その目いっぱい張り詰めた肉管が、うねり暴れる剛棒にぐりぐりと捻られる。肉壁の間に溜まっていた愛液が膣口から、腸汁が肛門から、ぶじゅつと飛沫を散らして押し出された。

「あひっ! また、変な汁ッ!! こんな、物ッ、抜いて……くれ……へあああッ!」

爪先立ちに飛び上がってバランスを崩し、両足をつなぐ足枷のせいで躓き転倒した。起き上がろうとするが四つん這いになるのが限界で、上体を突っ伏し尻だけをブルブル打ち震わせて迫り上げる。

巨乳が地面に押しつけられ、強張りっぱなしだった乳首が圧迫され痺れが走る。

（はあああッ、だめ……っ、民が見ている前でッ、このような、淫らな、浅ましいッ、くっ、ううっ）

呻きが漏れぬように唇を噛んで堪えた。

「なにやっつてんだ、あの魔女」

「ケツ突き上げて、俺らを誘ってるのかよ?」

色白の美貌を羞恥の忍耐に悩ましく歪ませ、スベルマのこびりついた肌を汗ばませる。

（く……うッ! 見ているッ、見るから、みんな……あ。子供、まで……ッ。だめだ、感じ、たらっ）

潤滑汁のヌメリに任せて粘膜壁を捏ねるディルドーに、艶めかしく身がくねるのを止められない。

（くああっ! ふ、太おおっ!! だめだあッ、な、膣内ッ、尻もおおっ! ふあッ、動いて、るッ。みんな見ているッ、みんな……ッ、はううッ!!）

そんな破廉恥な姿に突き刺さってくる人々の視線に、女体が背徳の興奮を昂らせる。耐えたい恥辱が、淫蕩な魔女の悦びに押し退けられた。

生殺しの刺激にもどかしい思いをしていた子宮が待ち望んでいたかのように身震いする。途端、

ぶじゅうッ、ぶじゅじゅ!! ぶしゅ……ッ!

大量の子宮液が勝手に溢れかえった。

「ひいっ、あ、ああああっ!! 見ないで、くれへアッ! んおおおあああッ!!」

ガツチリと施錠された革ショーツがみつちり貼り付いた股間。その内側で怒張した張り型が双穴を勢いよく挟りまくって、女体の敏感さに翻弄される男の神経を追い詰め続けた。

「とめ……止めッ、ろ、コレッ! んあああッ、この、ままだはッ! これ以上、され、たらッ!!」

下腹の奥から次第に大きさを増してくる狂おしい衝動に怯え、必死に歯を食いしる。その様に、

「あの魔女、股ぐらとケツになにか仕込んでるぞ!!」

民衆が双穴パイプの存在に気づく。

「本当だ。だからさつきからあんなドスケベなツラで身体くねらせてたんだ」

「騎士団に捕らえられても、ぶつといの仕込んでなければ我慢できないってか? じゃあ、大好きな太いのもつといっぱい味わわせてやらなくちゃな」

憎き魔女を騎士団の手から奪い取ってもなぶり殺しにしてやりたい。そんな剣呑さを漂わせていた人々が、淫靡な方向へと雰囲気を変えた。

扇情的な鎧から魅惑の肢体をさらけ出す魔女。そのあられもないイキ乱れに股間をギンギンに隆起させた男たちが迫りくる。

「やめ……ろ、来る、な……。私に、触れる、な」

これ以上刺激を受けたら、どうなってしまうのか自分でも見当がつかない。恐れを感じて逃げようとするが官能に支配された身体が言うことを聞かない。膝立ちの俯せのまま易々と抑え込まれてしまった。

「うほ、でけえケツしてやがる」

「ここから牝臭え匂いぶんぶんしてくるぜ」

「ううっ、そんなとこ……ッ!」

パイプがうねりする度に濃さを増す甘酸っぱい

液臭は自分でも気がついていった。ままならない身体

に恥辱を覚える騎士を追い詰めるように、男たちは房肉を無造作に掴みながら割れ目に鼻を寄せクンクンと嗅いでみせる。

「中でぶるんぶるん動いてやがる。こいつこんなもの股とケツに咥え込んで歩いてやがったのか?」

ただでさえ男に尻を撫で回されるなんて情けなくてたまらないのに、指を細かく蠢かせながら揉んでくる感触が気色悪くてたまらない。

「穴の中に常になにか挿入でないとダメなんだろうよ。これだけ淫乱になると」

押搦する男たちの吐息が首筋や露出した素肌に吹きかかり、熱さとドロ臭さに嫌悪の震えが走る。

「ちが……ッ。こんな、もの、早く、抜いて……くれ、ああああッ」

これだけ近づかれるとさすがに、ショーツの下がどうなっているのかが分かるらしい。その様を押搦され、好きで挿入られているわけではないと言いつ返したいが、壁が絶え間なく竿幹に絡みついている誤解されても仕方がない状態だ。

「しかしこんなもので自分だけ楽しむより、俺らの逸物を満足させろよ!」

淫乱な魔女を前に怒りを肉欲へと変えた男たちが焦れた。張り型を内側に封じた革ショーツを引き下ろそうとする。と、その途端、魔導の力で固定されたベルトが瞬時に緩んだ。

「おわっ! 外れたぞッ!!」

「ぬ、脱がせるッ!」

町民たちがいきり立つ。

「ふえっ!」

驚いてトバイアスを見ると、彼の指が遠隔操作機の側面にあるボタンを押し込んでいた。それがショーツの鍵のスイッチになったらしい。

「あ、ああッ、そんな、強くッ、触るな、あッ!」

熟れ房を窮屈に包み込んでいた鞆革が緩む。

殺到する町民たちの手に引きはがされ、それにつれて、膣と肛門から極太棒が抜き出される。

ぬぶぶ、じぶ、じゅぶぶぶぶぶぶぶぶぶッ!!

「ほおっ! んんんうううッ!! はうッ!」

竿が蠢いているまま抜かれたため、淫靡汁が掻き乱される卑猥な音色が響き渡った。

「ああ……やっつと、抜け……たあ……」

こんな状況ではあるが、双穴を狂おしい甘美で悩ましてきた挿入から解き放たれた。なのに妙な喪失感が込み上げて、双穴が切なく窄み始める。

無防備に晒された股間に乾いた風が直に当たり、淫靡な熱濁汁に火照った秘唇と菊穴を刺激した。十分に覚醒させられた甘美の器官はその冷たさに鎮まるところか、ますます食欲を増して激しく脈打つ。

「ふあッ、なんで……? ひあッ!!」

膣の疼きを否定するようにかぶりを振ると、ぶじゅつ、と愛液が水鉄砲のように膣口から飛び散る。

「すげえ、こんなぶつといの咥え込んでやがったんだ。しかも両方の穴にッ!」

「エロい汁でべとべとじゃないか。気持ちよすぎてたまらなかつたみたいだな」

「うはー、匂いもキツツイわ。特に後ろの方」

引つ張り出した張り型の大きさに呆れながら、人々はこびりついた汁を指先ですくったり香りを確かめたりして羞恥を煽ってくる。

「まだ動き続けてるぞ、これ。こんなのいきなり抜かれちゃったら、物足りなくなっちゃうよな?」

「……ひっ!? ち、ちが……。そ、んなもの、不要……だ……。イヤだ、から……」

肉体の欲求を言い当てられ、息を詰まらせながら否定するが、意地を張るほど膣口からこぶこぶと粘度の高い蜜汁が湧き零れる。

とにかく発情猫みたいになり上がつた尻を降ろそ

180



刺激で掻き混ぜてくる。

「ふんっ！ おあつ、あ、は、うっ!!」

気持ちよいと認めずに意地を張り続けるのが困難だった。それでも気丈に歯を食いしばっている男は止めどなく滲み続けるヌメリ液を、ことさら音が響く乱暴さで思いきり吸り込んできた。

じゅるるっ、ずじゅっ！ ずるじゅるじゅるずじゅじゅずじゅじゅじゅるるるるるるッ!!

「ひいっ！ 吸うなっ!! 吸うな、そんな、とこッ、ふあ、ああはあああッ!!」

膣内を真空にされるような勢いに、意識が飛びかけた。牝汁を一滴も残すものと割れ目の粘膜をしやぶりまくる舌の快楽に腰がうねりまくって、直腸を犯す怒張の感触をますます苛烈に味わう。

舌先がクリトリスを掠めると、気持ちよくてすすり泣きそうになった。無理矢理開帳されていた足で、思わず男の頭部に絡み付きももうずつと舐め続けているように引き寄せようとしてしまう。だがその寸前、男の顔はあっさりと女陰を離脱した。

「ふあっ!!」

残念そうな顔になるアルベルトを小馬鹿にしたように笑い、蜜液でべっとりになった口元を拭う。

「どろどろ喉に絡み付いてきやがる、こいつの愛液。俺はもつとさらつと飲みやすい方が好みだな」

「勝手なことを、言うなッ！ 好きでこんな物を……ッ、く、ううッ」

あまりな言いぐさに怒りを覚えるが、自分の身体からいやらしい女の液汁が溢れたことを、なおさらに意識して動揺する。膣穴の疼きが狂おしい。

(うう、舐められた、から……。尻に挿入られてる、からっ！ う、ああ、膣内あ……)

欲望に負けたくない。こんな身体にされようとも自分は、王国の騎士なのだから。けれども、

「挿入るにはよさそうな愛液だな。試してみるぜ」

牝汁の味わいに不満を述べた男が、正面からアルベルトのヴァギナへと怒張を押し込んできた。

ぬぶんっ！ ずつぷ、ずぼ、ぬぶぶずぶつ!!

「ふあえええッ!! んあはあつ、イイ……ん、く、あああつ、違……、はあつ、ふあ、あああつ!!」

熱を帯びた硬肉がヌルヌルの潤滑に導かれめり込んだ途端、喜びに胸が弾んだ。感極まった髪がキュウと窄まって肉幹を締め付け欲待する。

浮き立つような擦れ具合がたまらない。本当は男なのにと、魔女として憎まれながら犯されているとか、重要なことすら脳裏から霞むほどに強烈な甘美に翻弄される。

「入れている最中なのに、吸い付いてくるっ、こいつの膣穴ッ。く……ッ、はあつ、たまねえッ!!」

絡み付くヴァギナの心地よさに興奮を昂らせ、奥まで届ききらないうちにストロークが始まる。

「ああッ!! んう、おおっ、動ッ、動くなあ、あああッ! ふああ、中でッ、んお、すご……イッ!!」

作り物の男根とも、尻穴を犯す怒張とも感触の違い、節くれ立ちの激しい竿肌に膣壁が研磨された。直腸よりも柔軟性に優れた性器として完璧に仕上がった髪管の中で、突き込んでくる度にそのゴツゴツした極太が浮かれはしゃぐように大きくのたうッ。

「ひいっ! ひうっ、ひっ、はあああッ!!」

感度の高すぎる穴を波打たせられ、息ができないその苦しきまでもが、奥壺が窄まるほどの甘美を沸き立たせる。理性では堪えなくてはと思うのだが、悦楽を得る器官として熟成した濡れ穴からの刺激は強烈すぎた。トロトロに煮蕩けた柔らかな髪を硬い感触が摩擦するだけで、勝手に声が甘く媚びる。

「ひうっ、ああッ、後ろお、いきな……りっ!」

「尻穴を抽送する極太まで膣内の怒張と競うようにテンポを速め、アルベルトを悩乱へと追い詰める。」

「動かした途端、ちんこに絡み付いてきやがった。

スケベなケツ穴だぜッ!!」

「あゝあ、なんてツラしてやがんだ。もう少し抑えられねえのかよ!? ヨダレまで垂らして、アホみたいに気持ちよさそうにしやがってっ!」

「ふえッ!? ち、違ふッ、ん、んうッ!」

男に罵られ、知らぬうちにそんなに淫らな表情になつていたのかと慌てふためく。顔を引き締めようと試みるが、二穴を同時に突き穿られる快感には抗えず、どうしても鼻腔が膨らみ、目元と唇が緩んだだらしない媚笑にしかならない。

「おまんこ締め付けまくりやがって! どこまでも淫乱にできてやがるッ、この発情した雌豚女ッ!!」

力んだ勢いが膣壁に集中する。まさに男が言うとおり、身体が淫乱極まりない。どのように抗おうとしても淫らな行為しか取れないようにできている。

(く、そ、お、お……。くうああッ、また、一段と、激し……イッ! ふあうッ!!)

ぬぶっ、ずぼっ!! ずつぷずつぷ、ずぶんッ! ぬぢいっ、ずぶじゅっ! ぐつじゅ、ぬずぶッ!!

「ひぎッ、ふぎいッ!! くあッ、中で、二本ッ!」

膣壁と腸壁を挟んで硬竿同士がゴツゴツとぶつかり合い、その衝撃がすべて女体化騎士の胎内に響く。

「えへあああああッ!!」

頬が緩んでたつぷりのヨダレを纏った舌がだらしなく唇から零れ出た。どうにも抑えられない快感に目尻が下がりが、えっへらと頭の悪い笑顔のようにはしたなく表情が崩れた。

「なんてスケベな顔してやがるんだ、この魔女!!」

「捕まって神妙なツラしてやがったと思つたら、ちんこ挿入られた途端、この様かよ!」

そんな表情になつていたのか。でも自分でももうどうにもならない。尻も乳も、熟れた肉房が振動に合わせ暴れ弾む。

前後から男の胸板に挟み込まれ、抱え上げられた



お二人…共
待って下さ…っ

お…

…はや…

どうしたん
ですか？
なんだか急…

魔法陣から華麗に登場！

にっ？

え？
あの…

エマさん
あれ…

聖なる鈴の 啼くセカイ

第12話 墮ちる者達

漫画 ことし 琴慈

な……

アンタ
どこから…!!

お待たせ致し
ましたですう♡

小汚い
皆のアイドル
お姉様の愛人

キューティ☆
キルマちゃん
ここに参上!

誰も待っていないし
どこがキューティ
なのよっ

大体アンタ
何なの?

猫耳とか
あざとい格好の
くせに!!

はあ!?
ふざけんな
ですう

これは崇高な
悪魔の角
ですう!

これだから
低能は!!

あの…

まが

今までは
頭の悪い

愉快な仲間達の
やる事だと思って
見逃して
きたですが……

こんな奥まで
到達するとは思
わなかったですう

まおかげ様で
キルマもあの扉を
突破出来ました♡

そろそろ

邪魔な
者達には……

…っ!!

やっぱり
アンタも
「聖鈴」を!?

キルマさんの
魔力が凄く
高まって――

……っ!
私の防御呪文で
……!!

!!

危ないですっ
アイリさん!

〴〵落ちて
もらおうですう

エマさんっ

手遅れですう

もう

……!?

——!!
お兄ちゃ…!

何して…!?

…あつ…







「聖なる鈴」…
名前は
気に食わない
ですが



この世で
もつとも
素晴らしい力は
「純粹魔術」

その力を
持たない人間は
滅びるのみ



思った通り

なんて
耐性の無い
奴らですう



手にするのは
この
キルマですう



んっ♡

んっ♡

ふ…♡

…あつ…♡



呪詛喰らい師の今度の相手の相手は恋愛ゲーム?
疑似空間でとっとう咲妃の処女が……!!?

呪詛喰らい師

カースイーター

小説
NOVEL
あおいむらまさ
蒼井村正

挿絵
ILLUSTRATION
あると
或十せねか

封の二 オレの恋人がこんなに淫乱なはずがない!

封の三 淫虫跋扈

登場人物紹介



常磐城咲妃

「呪詛喰らい師」という異名を持つ凄腕の退魔少女。淫神を自身の身体に封じる使命を帯びている。

雪村有佳

淫神に取り憑かれたところを咲妃に助けられた女生徒。

瑠那・イリュージア

魔術結社「レメゲトン派」の生き残りの少女で、咲妃に懐いている。

岩倉信司

咲妃が所属する都市伝説研究部の部長。オカルト的な事件を追う。

榊神鮎子

咲妃の通う学校の生徒会長。信司の幼馴染みでもある。

前号までのあらすじ

「大風」の都市伝説を聞きつけた信司。その検証に向かった彼は、淫神「呪詛」に襲われる咲妃と遭遇する！咲妃は信司に見られながら大風に絶頂させられ、処女を奪われそうになるものの、同一髪で呪詛の封印に成功する。一方その頃、術者集団「九未知会」が咲妃を狙って動き出している……!?

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「大ヒット恋愛ゲームが原因？謎の昏睡事件続発！」という、センセーショナルな見出しで、事件のあらましが書かれている。

「信司は、週刊誌の記事抜粋らしい画像をパソコンの画面に表示した。『大ヒット恋愛ゲームが原因？謎の昏睡事件続発！』という、センセーショナルな見出しで、事件のあらましが書かれている。」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「暇人なのは認めるけど、指摘されるとちよつと凹

「三ヶ月に一度、各校の生徒会長が集まって、情報交換の会議を開いているんですよ」

生徒会の書記をしている有佳が、説明を捕提する。「ほ。鮎子も色々忙しんだな。で、暇人なお前は、さつきから何をやっているんだ？エロ画像でも見ていたのか？」

「暇人なのは認めるけど、指摘されるとちよつと凹

「三ヶ月に一度、各校の生徒会長が集まって、情報交換の会議を開いているんですよ」

生徒会の書記をしている有佳が、説明を捕提する。「ほ。鮎子も色々忙しんだな。で、暇人なお前は、さつきから何をやっているんだ？エロ画像でも見ていたのか？」

「暇人なのは認めるけど、指摘されるとちよつと凹

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

「なるほど、こいつは穏やかじゃないな。しかし、憶測ばかりのいい加減きわまりない記事だな……」

瞬きもせずに画面を見つめながら、咲妃は無感情な声で告げる。

「咲妃お姉ちゃん、すごい……」

瑠那が上げた感嘆の声にも反応せず、半ばトランス状態でプログラムをチェックしていた呪詛喰らい師の目に、表情が戻った。

「ふう……。結論から言おう。このゲームそのものに、危険なもの含まれていない」

「やっぱり、ただのネガティブキャンペーンだったか？ まあいいや、ゲームそのものはなかなか面白いから、もう少し遊んでみるよ」

「しつかりハマってるじゃないですか」

有佳が少し呆れ顔で指摘する。

「いつ、いや、ほら、オレは何にでもハマりやすい性格だからさ、あはははは……」

照れ笑ひ混じりに言い訳する信司であった。

「都市伝説の検証をしないのなら、私たちは早めに帰らせてもらおうと思うのだが……」

「ん？ ああ、そうだな、オレはもうちよつとここでゲームを続けてから帰るよ」

恋愛シミュレーションにのめり込んでいる少年を一人残し、咲妃たちは部屋を出ていった。

「ンッ……あつ、あ、あ、あ、あ、くふう、ンッ、ひあ、んんんっ……あはあん……ッ」

明りを落としたベッドルームに、咲妃の甘く悩ましげな喘ぎ声が響く。

「咲妃さん、もつと気持ちよくなつて下さい。ああ、咲妃さん」

「お姉ちゃんのオッパイ、美味しい。これだけでお腹いっぱいになっちゃいそう。んふ……ちゅぽ」

真ん中に横たわった咲妃のメリハリの効いた裸身に、添い寝した有佳と瑠那が優しく、そして濃厚な愛撫を施して、呪詛喰らい師の異名を持つ少女に、

絶え間ない悦びの声を上げさせていた。

左右の乳首を同時に吸われ、恍惚の表情を浮かべた仰け反った咲妃の股間では、二人の少女の指が競うように蠢いて、クチュクチュという止めどない蜜鳴りの音を立てている。

「ふあ、あ、イクッ！ ひあ……イク……ッ！」

甘く引きつった声を上げて仰け反った咲妃が、喜悅の頂点に舞い上がろうとした瞬間、ベッドのサイドテーブルに置いていた携帯電話が着信メロディを奏で始めた。

「う……あ……はい」

エクスタシーにお預けを喰わされた咲妃は、気怠げな仕草で携帯電話を手取る。

「信司が……信司が倒れちゃったのよ！」

受話器の向こうから聞こえてきたのは、悲痛な響きを帯びた鮎子の声であった。

「何だって!? それで? ……ああ、わかった。すぐに行く!」

信司が緊急搬送された病院に急行した咲妃たちは、待合室で鮎子と落ち合った。

「会議が終わったあとで、信司に電話したら、今、呪いの隠しシナリオをダウンロードしたって言っていた。その直後に、何か悲鳴のような声が聞こえて倒れる音がして……。精密検査したけど、身体に何の異常もないのに意識が戻らないのよ!」

「そんな……。まさか、あのゲームで?」

「常磐城さん、あなた、信司に、ゲームに危険なものが入っていないって断言したのよね?」

鮎子が詰め寄ってくる。

「ああ。言った……」

「じゃあ、どうして信司は倒れたの!? ねえ、答えてよ! 呪いのシナリオって、何なのよ!」

珍しく取り乱している鮎子は、感情剥き出しで食ってかかってきた。

「会長……落ち着いて下さい」

「ごめんなさい。つい、取り乱しちゃって……ねえ、常磐城さん、あなたの力なら、信司を目覚めさせることができるんじゃないの? ……お願い、信司を助けて……お願いッ!」

有佳に取りなされて平常心を取り戻した鮎子は、呪詛喰らい師の異名を持つ少女にすがりつくようにして懇願する。

「判った。淫夢神の力を使って、信司の意識に潜ってみる。しかし、その前に、人払いをしておく必要があるな……」

腿に装着したホルダーから赤ペンを抜いた咲妃は、病室の出入り口に接近忌避と印象希薄化の呪印を手早く描き込んだ。

「これでよし……ちよつと、隣に寝るぞ」

不安げな表情で見つめてくる鮎子の視線を気にしつつ、呪印使いの少女は信司に添い寝する体勢になり、緩やかに上下している少年の胸に手を置いた。

「上手いくように、祈っていきなれ」

手のひらに伝わってくる心臓の鼓動に、自らの生体リズムを同調させた咲妃は、その身に封じた淫夢神の力を駆使して信司の意識へと侵入する。

黒い霧のようなものを突き抜けた次の瞬間、呪詛喰らい師は、学校の教室のような場所に、制服姿で立っていた。

「侵入は成功……。通常の淫夢とは、少し感覚が違う。信司の意識に直接ダウンロードされたゲームデータと、私の意識が融合してしまったのか?」

周囲を見回した咲妃は、状況の把握につとめつつ、自分のいでたちを目をやる。

制服の下には、いつもと同じ革帯ボンデージの退魔装束を装着しているようだ。

「もつとエロエロな格好をさせられると思っていた

が、外見は意外と普通だな。この先、どういう展開になるのかは判らないが……この身体、どうやら未完成の淫神らしいな」

自らの肉体を検分していた咲妃は、肉体から発する神気を感知して複雑な表情を浮かべる。

「いつもなら、私の肉体に神体を迎え入れるのだが、今回は逆に、神体に私の意識が取り込まれたか。さて、この状況から神伽の戯を行なうのは、なかなか厄介だぞ……くう……シンふううッ！」

身体の奥底から込み上げてきた疼きに、呪詛喰らい師は、制服姿の肢体を抱き締めて呻く。

「こつ、この飢餓感……未完成の淫神が、精気を求めているのか？ んふう……はぁんッ！」

悩ましげな声を上げた咲妃は、制服のシャツ越しに豊乳を揉みこね、ムッチリと肉感的な太腿を擦り合わせながら、切なげな喘ぎを漏らす。

（ああ、堪らないッ！ 身体がこんなに疼くのは、初めてだ！ ガマン……できないッ！）

全身をジリジリと炙り焼かれているような欲望に耐えかねて、制服のスカート越しに股間をまさぐる。マシユマロのような弾力で指を押し返してくる恥丘を手のひらで包み込んで押し揉み、中指を激しく屈伸させて、革帯に守られた秘裂を刺激する。

間接的に愛撫された性感が、腹腔の奥底から伝わってきて、咲妃の顔を切なげに歪ませた。

「ひぁ！ あふううう……身体中、疼いて……ンッンッ……あ、くふううんッ！」

凜とした美貌の退魔少女は、教室の床で膝立ちになり、乳房と股間で指をせわしなく蠢かせ、甘く艶めかしい喘ぎ声を響かせて自慰快感に身悶える。

「ダメ……だ。自分で……しても、全然治まらない……はぁあう、あつ、あんッ！」

自慰行為によって生じた快感の波動は、乾ききつ

た喉に一滴の水を落としたかのように瞬時に吸収され、飢餓感がより強まってしまふ。

「ひう、ンッ、あんッ！ こつ、このままでは……疼きに吞み込まれてしまふ。どうすれば……？」

鼻に掛かった呻きを漏らしながら、虚しい自慰に耽る咲妃の耳に、教室のドアが開く音と、人の賑やかな話し声が飛び込んできた。

「あ、エロエロ美少女、ホントにいた！ うわあ、もう、オナニーしてるぞ！」

「あれが噂の……すげえ美人じゃん。オッパイもでかくって、色っぽいなあ」

口々に言いながら、十人余りの少年たちが入ってきた。全員が既に一糸もまとわぬ全裸で、股間では淫情の血潮を送り込まれたペニスに恥ずかしげもなくそそり勃っている。咲妃を取り囲んだ少年たちの顔は、全て信司のものであった。

「くう……ンッ、お前のスケベ顔、十個も集まると呆れるのを通り越して不気味だぞ」

欲望の喘ぎを抑えた神伽の巫女は、眉を顰めて言いながら、少年たちの霊的な波動を探っている。

（この少年たちは、昏睡したゲーマーたちの思念いわば、生き霊の凝縮体か。私の精神と淫神が同調したせいで、最も縁の深い信司の容姿が前面に出てきているのか……。すぐくやりづらいな）

「ねえ、早速だけど、セックス、しようぜ」

「もうすつかりエロエロモードじゃないか。オレにも目いっぱいエロいことしてくれるんだろ？」

信司の顔と声で口々に言った少年たちは、床に跪いた咲妃に群がり、制服に手を掛けてくる。

「ビィッ、ビリッ、ビリビリッ！」

少年たちの手に引つ張られた制服は、まるで薄紙でできているかのようにあっさりと引き裂かれ、芸術的な曲面を見せつける革帯ボンデージ爆乳が、ポリウムたつぷりに揺れ弾みながらまろび出た。

「ふぁ！ あ……こつ、こういう趣向か……ますます悪趣味な……くふうンッ！」

「わあ、制服の下に、SMみたいな格好してる！ ああ、オッパイ柔らかいなあ。指に吸い付いてくる……これが餅肌つてやつなのか？」

「おつ、おいつ！ オレにも触らせてくれよ！ んお、すげえ爆乳だ！ たまんねえ！」

四方八方から手が伸びてきて、あらわになつた乳肌が好き放題に揉みこねられる。

「く……うつ、そつ、そんなに強く揉むんじやないっ！ はぁんッ！ ふあ、あんッ！」

信司の顔をした少年たちに寄つてたかつて鬨られながら、咲妃は肉体の飢餓感がわずかに和らぐのを感じて小さな安堵の吐息を漏らす。

（男の指から、自慰とは比べものにならない精気が流れ込んでくる。これならば……いける！）

「くう……ンッ、全員が信司の顔なのが気に入らないが、神伽の戯、参るッ！」

凜とした声を上げた呪詛喰らい師は、仮想空間という未知の戦場で、神伽の戯を開始した。

「まずは、正攻法でいかせてもらおうぞ」

先を争うように爆乳を弄んでくる少年たちに囲まれながら、咲妃は、はち切れんばかりにそそり勃つたペニスを指を絡め、手淫奉仕を仕掛けた。

「んっ！ くふううう！」

ほんのりと冷たく滑らかな指に勃起を擦られた少年は、快感の呻きを漏らして肉茎をヒクつかせる。

（信司の早漏もコピーされていれば、神伽も早く終わるだろうが……果たしてそう上手くいくかな？）

数回の淫靡なストロークで摩擦快感を送り込んだ咲妃の指は、スルリと解けてお預けを喰わせ、次の勃起へと移っていく。花から花へと舞い飛ぶ蝶のように、神伽の巫女の白くたおやかな指は林立するペニスを渡り歩き、繊細にして濃厚な愛撫を施した。

「こんなに硬くして……フツッ、もう溢れているじゃないか。ここ、気持ちいいんだろ？」

ウズメ流の技巧を極めた少女の手は、硬く反り返った肉茎の根本から先端までリズムミカルに扱き上げ、滑らかな手のひらで亀頭を包み込んで撫で転がす。

鈴口から溢れ出る男の愛液が、ヌチュヌチュと卑猥な音を立ててこね回され、少年たちの鼻に掛かった快感の呻きが、教室内に高く、低く響く。

（このまま、愛撫の主導権を取って神伽を続ければ、この肉体に狂わされずに済む……）

神伽の巫女は、積極的な愛撫で少年たちの身体から喜びの波動を絞り出して吸収してゆく。

「んお！ 手コキ、超気持ちいいッ！」

性愛技巧の粋を極めた白い指先が、勃起の胴を撫で上げ、裏筋を摘んで揉み上げ、滑らかな指の腹で鈴口のワレメを強弱交えて擦り上げ、亀頭冠をくすぐり、陰囊を包み込んで優しくこね回す。

しばらくの間は、咲妃の繰り出す手淫責めに少年たちが勃起をヒクつかせて喘ぎ、悶える一方向的な状況が続いた。

教室の床には、手淫奉仕によって絞り出された男の愛液が糸を引いて滴り落ち、下腹にめり込みそうに充血したペニスは、先汁に濡れまみれてテラテラと艶めかしく照り輝いている。

「オレたちばかり気持ちよくなってたら悪いよね」
愛撫されるがままになっていた少年たちが、示し合わせたように動き出した。

「余計な気遣いはいい、んっ、んふううう！」

唇が強引に奪われ、ヌルリ、と舌が入ってきた。くちゅ、くちゅくちゅくちゅ、じゅるっ、ずちゅるるるっ、ぐちゅぐちゅぐちゅるっ……

いつもキスしている有佳や瑠那の柔らかく優しい舌とは正反対の、荒々しく硬い味覚器官が口腔内を掻き回し、戸惑う舌に絡み付いてきつく吸い上げてくる。

（この身体、キスだけで燃え上がっている!? まずい、これ以上愛撫されたら……!）

攻撃的なキスに翻弄されている咲妃の乳先と股間を覆っていた革帯ボンデージがあつさりとうずらされ、左右の乳首と秘部が露出させられた。

「んむううう！ んきゅふううう！」

剥き出しになった性感帯に、少年たちの熱い吐息が吹きかけられただけで、全身がさざ波のような痙攣に包まれる。

「咲妃の身体、どこもかしこもエロいなあ。この乳首なんて、特にエロエロで美味しそうだ」

剥き出しになった乳首が、左右同時に吸われた。

「んぐううう！ ひうううううんッ！」

ディープキスで塞がれた唇の奥からぐもった声を上げる呪詛喰らい師の乳先で、刺激に反応した乳頭がムクムクと尖り勃起、ざらついた舌に舐め転がされてさらに硬度を増してゆく。

（信司の記憶から、名前まで知られてしまったか？ うああ！ 乳首に舌が絡んで！ 融けるッ！）

「咲妃のオマンコ、ツルツルのパイパンなんだね いっぱい舐めてあげるよ。ああ、柔らかいなあ」

「お尻の穴、全然臭くない、ミルクみたいないい匂いがする……こんなにきれいな色なんだ……」

熱い舌が、前後の秘めやかな部分を貪るように舐め始めた。

「ひやああああんッ！ なっ、舐め……ヒッ！ イッ！ あ、ああ……ッ!!」

キスを振りほどいて甘い悲鳴を上げた咲妃の肉体が、ギクギクギクンッ！ と喜びの痙攣を起こす。

「何？ もっと舐めて欲しいの？ 言われなくたって、いっぱい舐めてあげるよ。美味しい……」
ムッチリと肉感的な尻たぶを割り開いた少年は、恥ずかしげに引きすばめられた放射状の小皺を一本

一本味わうように舌先を這わせ、唇を吸い付かせて、小刻みに吸い上げてくる。

「はああ、こんなにエロい身体なのに、オマンコはロリっぽいツルツルなんだね。柔らかくて、濡れて、ヒクヒク動いている。すぐエッチだよ」

無毛の秘裂にむしゃぶりついた少年は、ツルリと滑らかな大陰唇に唾液を塗り込み、柔らかなワレメ全体を口に含んで、鼻息も荒く貪った。

「んむううんっ！ ふあ、かつ、噛むなあ！ アヒンッ！ んっんっんっ、くふうううんっ！」

キスで口を塞がれ、秘裂と肛門を欲望剥き出しの舌使いで舐めしやぶられた退魔少女の身体が強張り、膝がガクガクと震える。

ぴちゃぴちゃぴちゃぴちゃ、ぴちゅ、ぴちゅ、ぴちゅ、ちゅばちゅばちゅば、ちゅるっ、じゅるっ、ちゅぶちゅぶちゅぶ……

身体の各所が吸いしやぶられ、舐められる音が次第に湿っぽさを増し、不自然なつま先立ちの姿勢で翻られている咲妃の足元に、唾液混じりの愛液が滴り落ちて淫らかな水溜まりを形成してゆく。

「咲妃のお尻の穴、ヒクヒク動いて開いてきた。もっと奥まで欲しいんだね？」

「アナルに舌を這わせていた少年が身体を起こし、唾液に濡れまみれてヒクついていてるすばまりに亀頭を押し付けてきた。」

「お尻の穴に、オレのチンポ、挿れてあげるよ」
ぬぶ……ずにゆうううっ！

どうせ、この肉体は淫神のものだから、と、半ば開き直り気味にアヌスの緊張を解くと同時に、熱く猛った亀頭が、括約筋を押し開いて侵入してきた。

「んはああ……ああああんっ！」
神体の受け入れ口として、常に清浄に保たれている直腸内部を男の器官に満たされた神伽の巫女は、凛々しい美貌に恥じらいと恍惚の入り交じった表情

を浮かべ、熱い吐息を漏らす。

「くううっ！ 常磐城さんのお尻、すごい締め付けだよ。中也温かくて、チンポが湯けそうだし！」
 歡喜の声を上げた少年は荒々しく腰を使つて、立位の体勢でアヌスを犯す。

「ひあ！ いきなり激しすぎる、あつあつアツ！ふうあ、ソツ！ くはあああああんっ！」

強烈な悦波に貫かれた咲妃の膝が崩れ、床にへたり込んでしまいそうになる。

「挿れただけで腰が抜けちゃった？ 仕方がないなあ ほおら、抱っこしてあげるよ」

床にあぐらをかいた少年は、咲妃の腿裏に手を掛けてグイッ、と抱え上げ、後座位の姿勢で少女の身体を揺り動かす。

「ひあ！ あつ、あつ、ヒッ、いつ、奥ッ！ 突き上げられて……くあ、はああんっ！」

熱く、硬く猛った肉杭で尻穴を掘り返される快感は、現実とまったく違わぬ甘美な衝撃で少女の身体を火照らせ、切れ切れの喘ぎを教室内に響かせた。

「常磐城さん、髪、使うよ」

興奮した声を掛けてきた少年が、艶やかなロングヘアの黒髪をベニスに巻き付けて手淫に耽りながら、紅潮した耳や細く引き締まった首筋に亀頭を擦り付けてくる。

「ひやう！ んっ、ヒッ、アツ、あんッ！」

耳や頬に擦り付けられるぬめった亀頭の感触や、アヌスを掻き回す牡槍の荒々しさに喘いでしまいながらも、神伽の巫女は、信司の顔をした少年たちに積極的な愛撫を仕掛けてゆく。

「おっ、お前は……こういうのも好きだったな？」

反撃に転じた咲妃は、順番待ちしている少年のベニスに美脚を伸ばし、足コキで責め立てた。

「あはああ、そつ、それ……いいッ、気持ちいいよ。もつと、タマも踏んで……くはああ！」

熱く硬く猛った肉茎が、滑らかな足裏でグリグリと踏み責められ、強制的に先走りの粘液を絞り出されながら圧迫されると、マゾ快感に襲われた少年は、だらしなく喘ぎを漏らして腰を突き上げ、さらにハードな足コキ愛撫をねだる。

「フフッ、信司のマゾ性格までコピーされたか。それ、これでどうだい？」

足指を器用に動かして亀頭を揉み廻り、男の急所である二個の肉玉を踵で踏み転がしてやると、すすり泣くような喜びの声を上げた少年は、機械仕掛けのように腰を跳ね上げさせた。

勝ち誇った笑みを浮かべていた咲妃の口元に、先汁まみれの亀頭が突きつけられる。

「オレ、口で……咲妃にフェラして欲しい」

上ずった声に視線を上げると、見慣れた信司の顔が、満面のスケベ笑いを浮かべて見下ろしていた。

「う……調子に乗るなッ！」

思わず口走ってしまつてから、呪詛喰らい師はハッ！ と我に返る。

（こいつは信司の顔をしているだけで、実際はアイツではないんだ！ 私の身体も、自分のものじゃない。恥じらいを捨てて、神伽のことだけを考えろ！）
 自分に言い聞かせた退魔少女は、異様な恥じらいをこらえつつ、先汁の雫を盛り上げさせた亀頭の先端をパクリと咥え込み、舌を使う。

「んふ、んっ、くちゅ、くちゅ、ちゅばちゅば……はふう……んむ、くちゅ、くちゅ……ちゅううっ」

「うあ、常磐城さんって、フェラチオすげえ上手いんだね。ああ、そこ、もつと舐めて……くうう、気持ちいいッ！」

スケベつたらしい笑みを浮かべる少年の顔を見ながら、目を閉じた巫女は、顔を紅潮させながらも、フェラチオ奉仕に没頭してゆく。

「はふ……んぶ……もつと、感じさせてやる」

羞恥心を振り払って責めモードに突入した咲妃は、今にも弾けてしまいそうに張り詰めた亀頭を焦らすように舐め回し、敏感な鈴口のワレメに舌先を挿入して、鮮烈な快感を送り込む。

（このまま、限界まで快感を溜め込ませて、一気に射精させれば、大量の精気を吸収できるはず……）
 左右から突きつけられた二本のベニスを同時に舐め上げて、フェラチオ奉仕に没頭していた咲妃の身体がいきなり持ち上げられた。

「オレ、一番オイシイところをいただくよ」

「えっ?！」

驚き見下ろした視線の下には、床に仰向けに寝て、ペニスを垂直にそそり勃たせた少年の姿。

身体がゆっくりと下降し、割り開かれたヴァギナに、亀頭が触れてくる。

「まつ！ 待てッ！ そこは……ッ！ そこだけはダメだッ！ 止めるッ！ 信司ッ?！」

引きつった制止の声を無視して、身体が一気に下ろされた。

ぐちゅ、ジュブウウウッ！

硬く熱い牡槍の穂先が、未開の膣口をこじ開け、禁断の領域を貫いて、膣の奥深くまで抉り込まれてくる衝撃に、全身が硬直する。

「くあ！ あ、ああ……ッ！」

大きく目を見開いて見つめる咲妃のヴァギナに、信司の顔をした少年のペニスが根本まで埋め込まれた。アヌスに挿入されるのはまったく異質の異物感が、少女の引き締まった下腹をギクギクッ！ と緊張させる。

（膣に……挿入、された?！）

いきなりの膣挿入にショックを受けた呪詛喰らい師は、ヴァギナを貫いた肉柱を呆然と見つめている。（落ちて着け！ これは私の身体ではない！ だから……落ちて着けッ！ 取り乱すなッ！）

「咲妃のおマンコの中、すごく温かくて……キユウキユウ締め付けてくるよ」

信司の顔になった少年が、恍惚の表情を浮かべて声を掛けてきた。

「おや？　もしかして、初めてだった？　オレも初めてだから……ウツ、動くよ！」

処女の証を引き裂かれる苦痛もないまま、牡器官の挿入を許してしまい、困惑する咲妃のヴァギナとアヌスで、ペニスの抽挿が始まる。

「ふあ！　うつ、動くなッ！　はああンッ！」

制止しようとした咲妃の声が、甘く裏返る。

（こつ、これが……膣の快感……なのか？）

猛った肉棒で掻き擦られるヴァギナから発した快感、疑似体験だとはとても思えぬ、快美で鮮烈なものだった。張りだした亀頭冠が、膣壁の粘膜をプルプルと掻き擦りながら抜き挿しされるたびに、アナルセックスとはまったく波長の異なる快感電流が、上下に揺れ弾む肉体をビリビリと痺れさせて駆け抜けてゆく。

「ダメだッ！　こんなのは……ふああ！　やめ……ろッ！　……抜いて……ひやはううンッ！」

「嫌だ。こんなに気持ちいいこと、止められないよ！　ああ、チンポが蕩けそうなんだあ！」

童貞少年とは思えぬパワフルで緩急つけた腰使いで攻められたヴァギナの奥から、信じられないほど大量の愛液が分泌され、ピストン運動を繰り返すペニスの胴を伝って滴り落ちた。

「ひあ、あああう、んっ、あつ、アツ、アツ、あひつ、はあん、あ、あああ、きゅふううンッ！」

奥まで突き挿れられたペニスの先端が、膣奥にぶつかり、子宮を突き上げる衝撃が、息を呑むような悦波となつて、呪詛喰らい師に切れ切れの悩ましげな喘ぎを上げさせる。

「お尻とオマンコ、同時に犯されるのって、気持ち

いいだろ？」

アヌスとヴァギナを貫いた少年が、声をハモらせながら問い掛けてくる。

「んあ、はああうッ！　やつ、やめ……ろッ！　抜いて……抜けええッ！　ひあ、やはああん！」

薄い肉壁越しに擦れ合いながら抜き挿しされるペニスがもたらす快感は、ワンストロークごとに少女の理性を削り取り、欲情の炎で焼き尽くしてゆく。（このままでは、快感に吞まれる……ッ！）

「くあ、あんっ！　まつ、待て！　前は……ヴァギナはダメなんだ、抜いてくれ……頼むッ！」

危機感に襲われた神伽の巫女は、震える声で、膣ストロークの中止を申し出る。

「オマンコズコズコされるの、嫌なの？　オレはすごく気持ちいいのに……」

騎乗位でまたがった咲妃の豊乳を下から持ち上げるようにして愛撫しながら、少年は残念そうな声を上げた。

「うつ……く……信司の声と顔で、しゃ、しゃべるなッ！　はあう、くは……ああンッ！」

不満げに唇を尖らせた表情も、少しトーンを落とした声も、鮎子や咲妃に提案を却下された時の信司そのもので、背徳的な快感と強烈な羞恥心を増幅させてしまう。

「ねえ、オマンコに挿れられるの、嫌なの？」

「いっ……嫌……だ……」

データ化した淫神と融合した神伽の巫女は、残る理性を総動員して拒絶の言葉を絞り出した。

「そう？　本当に嫌だったら、抜くけど、ホントにいいんだね？　二度と挿れてあげないよ？」

未練がましい声で念を押しながら、女体の本丸を占拠していた熱く硬くたくましい牡槍が、ゆっくりと抜け出ていく。

ぶりゅっ、コリッ、くぶぶぶぶっ……張り詰めた

亀頭が膣壁を掻きくすぐりながら出ていく感触が、息を呑むような女悦の波紋となつて、制服姿の退魔少女をわななかせた。

「う……あ……ああ……ッ！」

無意識のうちに引き絞られた膣粘膜が、猛った肉茎を締め上げ、それ以上の撤退を封じた。

「んっ！　くうう、締め付けがきつすぎて、痛いよ。どうしたの、抜いて欲しいんだろ？」

亀頭が抜け落ちる寸前で静止を強いられた少年は、顔をしかめながら文句を言う。

（私は……何をやっているんだ？　このまま抜けばいいものを……身体が勝手に……!）

仮想世界とは言え、生まれて初めての膣ストローク快感に陶醉した淫神の肉体が、神伽の使命に燃える意識を裏切ろうとしていることに、咲妃は恐怖にも似た戸惑いをおぼえている。

ドクンッ！　びゅくっ、びゅくんっ！

少女の忍耐をあざ笑うかのように、膣内のペニスが力強く脈動した。牡器官に密着した媚粘膜が、狂おしく切ない疼きに包まれる。

「ひぐうっ！　……いっ、嫌……じゃ、ない」

しばしの葛藤の末、自分でも信じられぬセリフが、羞恥の震えを伴って紡ぎ出された。

呪詛喰らい師の精神が、肉悦に餓えた淫神の肉体に流され、理性を侵食されようとしているのだ。

「じゃあ、もつといいい？　咲妃のおマンコ、オレのチンポで奥まで掻き回していい？」

ヴァギナに挿入した少年が、信司の顔と声で問い掛けてくる。

「も……もつと……して……奥まで……挿れてもいいぞ。いっばい、掻き回して……欲しい」

目を伏せ、声を震わせながら、初めて味わう膣の快感に屈した少女は抽挿の再開をねだってしまう。

「奥まで欲しいんなら、自分でオマンコに吞み込ん

見よ！

今こそあやつら
大罪人共を
滅ぼす好機！！

フィラエルよ
今一度天罰を
あたえるのじゃ！！

で…でも
長老…

天使と魔王 フィラエル

中篇

リアリエルはすでに
穢れつくしておるわ！

選択を迫られる
天使は

この世界より
旅立たせ

お前の望み通り
きやつらの魂を
この苦悶から
救済するのじゃあ！！



漫画
COMIC

おおたたけし



うわー
またあれ
やるつもりだよ

何とか
とめないと
...

とめるったって
アンタさあ.....

ゴト...



う...

おい..
兄者!?
兄者じゃ
ないか!

おお..
お前なんで
こんなトコロに...!?

肉人形作ってたら
天使に殺されたと
思ってたんだが...

おんねい!!

うん...

どこだ
ここ...?

ゴト...

ゴト...

エグザニエルの
ヤツだわ...!

アイツ
天使がまきちらした
魂全部に
受肉してたんだ...!

人間界を創ったって
マジだったの!?

一体何が
おこったんだ...?



ママがいなくなってるの
いっしょにさがしてー

おじちゃん



チャーンス

あいつら
魔界のリストで
見た事あるわ
魔界のリスト

おじちゃん

兄者兄者
今はそれ
どころ
では……

さっきまでいた
メスガキ
どこへ行ったんだ
もうちょっと
だったのに



じつとしてれば
すぐママ見つけて
あげるから
ね

はいはい
おじちゃんたちに
まかせてねー

反応
早っ!

やっぱり
こいつら
外道すぎる





おじさんたち今
ちんが腫れて
困ってたんだよ

おくちでウミを
吸い出してくれたら
ママ探してあげるよー♥



ホ…ホント？
これしたら
ママいっしょに
さがしてくれるの？



おうおう
おじさんたちに
まかせて
おきなさい…

…ふううつ
肉いじりの
途中だったから
たまらんな……

ヤダよ
何か出て
きた…

だ…だめだ
一度出すぞつ

ちゃんと
吸い出すんだぞつ



んお——っ

何だ早いな
弟よ

けほ

ワシは
こっちの方に
出させて
もらうか…

けほ

やつやだっ

何するの
そこキタナイから
ダメ——っ

おうおう
カワイいなあ

何か縛る
ものはないか…

や——んっ
こんなの
やくそくと
ちがうよ——っ

はなしてっ
はずかしー
よ——っ!!

＝／A

＝／A…



ま...
まあいい

しっかり
くわえないと
ママを探しに
行けないぞ
——つと...



い...いつの間に
...?

おう
やるではないか
兄者!



初々しいなあ
はじめてチポ
挿し込まれたんだ
ね♡



ひっ...ひっひっ

はっ
うはあ——
っ!!



おう

あう!

う...う

欲を貪る
桔梗太夫に対して

くくく
流石は上弦の者
まだまだ涌いて来おる

も...ゆる...ひ

いた...い...





野暮な真似を
するな小娘



あの日あなたを
討ちもらったのは
私の一生の不覚

もう

逃がしはしません

はアははははは！

ぬかしおる！

外法印を砕き
ノロイを討った今となつては

妾如きに
負ける道理はないと？

逃がさぬだと？

図に乗るな上弦！

四道封者
ききようだゆう
桔梗太夫

あなたを

ぶっ飛ばします

超異聞
Miss Black
映月「葛藤 式」

MISS BLACK

原作/アリスソフト

©ALICESOFT





ああ！

主どの！
司令を



くそ…医務室までは
とても行けないぞ
折角ハルカさんが
スキを作ってくれたのに

皆消耗しているが
幸い深手は無い
…下手に動かず決着を
見届けるが上策か



大事無い

淫力が尽きて
ごまかしが利かなくなった
だけの事



うっ

スパル！



…ハルカさんは
勝てるだろうか

無論

正義を示す必要も

民心を慮る必要も無い

過程は問わぬから

ただ相手が死ねばいい

となれば

「忍」は手段を選びはせぬ





奴隸王女

エルシリア

～失墜の肛姦調教～

探し求めた弟の手がかりを見つけた時
無垢な王女は肛悦の女奴隷に墜ちる――



小説
NOVEL

あいえだなお
愛枝直

挿絵
ILLUSTRATION

パインパ

跳ぶ。

石畳の上にエルシリアは音もなく降り立った。麻袋を担いで夜の街を駆け抜けた三人の男達の前に立ちはだかる闇になお輝く金糸が、一拍遅れて細腰の上に収まった。

「中身は、人ですね？」

愛らしい音色の、しかし完全な発音の音が凛と響く。サファイアの大きな瞳を、陰しく細めて男達を見据えた。

「……なんてめえは！」

女神の降臨でも見たかのように呆けていた男達の先頭が、粗野な口ぶりで誰何する。少女は一つ溜め息をつくとき、背負った棍を抜き、男達に突きつけた。「私の質問にだけ、答えて下さい」

一方的な物言いに再び男達は激昂しかける。

しかし、素肌を晒す瑞々しい太股や、くびれた腰、すらりと細く伸びやかな手足に月の冴えに浮かび上がるきめ細かな白い美肌――。

美しい全身を目で犯すようにねつとり眺めると、間を置かず揃ってにたにたといやらしい笑みを浮かべだした。

「そうだ。ご明察って奴さ。この街にもう用はねえ。トンズラこく前にいい土産もんを見つけてよ。付けて攫ってこの通り。上玉だ。あんたほどじゃないがな」

先頭の男はひけらかすようにべらべらと喋る。

「……あなた達のような人がいるから……！」

双眸が陰しさを増す。男達に怯んだ様子は無い。ただ小馬鹿にしたように嗤うだけだ。

それもそのはず、エルシリアはなやかな乙女であった。

誰もが見惚れるスタイルとは裏腹に、黒目がちなまろい瞳、薔薇色の頬と、その顔立ちには睨み付ける表情さえ可愛らしく見えるほど幼い。

三人の男を相手に、立ち回りを演じられる豪の者にはとても見えない。それどころか、異性に触れられただけできやつと叫び、顔を赤くさえしそうだ。

しかし、思わぬ幸運に舞い上がっている男達は理解していない。瞳と同じ空色に染められた半甲冑が、静まりかえった夜の中に、僅かな物音すら立てないのは、一体何を意味しているのかを。

「中の方を解放して、おとなしくして下さい」

「そいつあ逆だ。女が棒きれ振り回して暴れるもんじゃねえ。俺がうつばらつて金に換えてやるよ。あんたと一緒に」

男達がにじり寄ってくる。

一つ大きく息を吐いた。愛らしいかんばせから、一切の表情が消える。

「お怖いの怖い」

侮りも露わに、男が間合いに踏み入った。ゆつたりとした動きで袈裟懸けに棍を振る。

人攫いは安易にそれを受け――。
「危ね――え……？ あ……ああああ

ああ！ なんだあああ!? いてえよとおおお！」

グシユと嫌な音を立て、手首が碎けた。軽やかに振られた得物が、必ずしも本当に軽いとは限らない。

「鋼の棍を空手で受ける者がありますか」

抜いて返し今度は足をすくい上げる男は二度宙で回り、軽業に失敗した芸人のように、石畳に叩きつけられた。

残りの二人が絶句する。顔を見合わせ、麻袋を置くと、脱兎のごとく逃げ出した。

「あ……？ おい……！ あいつらあああつ！」

痛みと怒りで喚き散らす男に棍を突きつける。

「安心して下さい。必ず彼らも捕まえて、然るべき報いを与えます」

「……へへつ、ま、まあ待つてくれや。俺あこんな稼業うんざりだったんだ。足を洗う。もうしねえ。だから……な？」

卑屈な半笑いで男は見上げてくる少女も、その内心を隠すように作り笑顔を張りつけた。

「それでは私の質問に答えてくれますか？」

「……ああ！ なんだって答える！」

「男の子を捜しています。私と同じ髪と目の色をした、可愛らしくて、その上優しく賢く、正直な子です。その場のしのぎの喧嘩とは無縁の、あなたとは正反対な」

凶星を当てられて男の顔がぎくりと強張る。にこやかな幼貌の異様な圧力に押し出されるよう、洗いざらい吐き出し始めた。

活気はある。だが、街路にはゴミと汚物が散乱し、行き交う男達の人相はどれも致命的なまでに怪しい。早くも5人ほどならず者を叩き伏せた。聞きしにまさる治安の悪さだ。

隣国のこと――心を静めるため何度唱えたか、数える気にもならない。

人攫いの男を絞り上げ聞き出した、国境都市ヨハネスノバールでは、裸に剥かれ、鎖と枷で縛められた女や男が、競られ落とされ捌かれていた。

(アンリもこんな風に……家畜みたい……！)

つとめて無感情を装いながら取引を眺めるが、その心中では強い怒りと焦燥が逆巻いている。

アンリは山岳国家ヴァルクランドの王子であり、ただ一人の弟だ。一年前、拐かされ離ればなれになった。

重い武器を軽々と振るわせる身体強化の魔術を頼りに、エルシリアはそのゆくえを追って、放浪を続けている。

弟は少女と紛うほど愛らしい。魔術も戦いに向かない。だが、あの子は溢れんばかりの知恵を隠し持っている。

胸甲に彫られた鳳のレリーフに手を当てる。この鎧が証だ。

かつてエルシリアは、国守の聖獣をも打ち落とす「落鳳」とあだ名され忌

み嫌われたことがある。

武威を示すためと、ある諸侯の進言を受けて、父王が下賜した大鎧が原因だった。顔まで隠す不気味な甲冑を纏って戦うには、姫武者はあまりに強すぎた。

脱げば王威に傷が付く。耐えること以外、何の手も思いつかなかった。

袋小路から連れ出してくれたのは、アンリだった。ある年の誕生日、彼がこの空色の鎧を贈ってくれたのだ。

得意満面の弟に請われるまま、優美な具足を身につけ、衆目に顔と肌を晒す気恥ずかしさに頬を染めながらも、国守の務めに向かう。

それだけですべてが反転した。

無骨な大鎧に隠されていた可憐は、不自然なほどの広まりようで周知となる。禍々しい鳳墜としは、その美しさで聖獣を従え胸甲に宿した鳳のエルシリアに二つ名を変えた。

それ以来、確信している。あるものと言えば山ばかりのヴァルクラントの未来を拓くのは、アンリだ。

そしてそれ以上に、リア姉さまと自分を慕い、腰に抱きつき甘えてくる弟は、何よりももの安らぎだった。

腕の中にすっぽりと収まる温もりが、触り心地のよいサラサラの髪が恋しく仕方ない。キラキラと輝く瞳と笑顔が、悲しみに曇っているのかと思うと居ても立ってもいられない。

無事でいて欲しい。早く逢いたい。ただその想いがエルシリアを突き動か

している。

ふと内省から立ち戻り、市に目を戻す。始まったばかりの競りの品は、アンリと同じ年頃の、赤毛の少年だった。気づいたときには手を挙げていた。

「相場の倍だよ」

「お、物陰に向かうぞ。お盛んなこつて」

はやし立てる声を見捨て、濃んだ瞳の少年を路地裏に連れ込む。

「……何でもします……だから……ぶたないで」

「では、笑顔を見せてくれますか？」
肌を傷めぬよう注意を払って手枷と首輪を素手で碎いた。

偽善であることはわかっている。そもそも弟を見つめるまでは余所事に目をやらないと誓ったはず。目立つ行動は慎むべきだった。

それでも、呆然と縛めの残骸を眺めていた少年の表情が爆発的な歓喜に変わるのを見て、弩の弦のように張り詰めていた気持ちがふっと緩むのを感じた。

今にも叫び出しそうな少年に顔を近づけ、唇の間に人差し指を置く。年頃の少女らしい、飾らない笑顔で。

はれて解放奴隷となった少年に服を買い与え、封蝋を施した書簡と路銀を渡して送り出し、エルシリアは闇夜の商館に忍び込んだ。

上玉はロクサーヌ商会が高値で買い上げる。人攫いの言葉に従うなら、ア

ンリの足跡はこの堅牢な石造りの屋敷にある可能性が高い。

鍵をねじ切り、書庫らしき部屋に入る。視力を限界まで強化。虹彩が猫の目のように輝きだす。片端から書類綴じをあさっていった。

「見つけました——！」

心臓がどくんと鳴った。通し番号、性別、髪色、目の色、そして——日付と価格。奴隷の取引台帳だ。興奮に震える手で失踪した日付まで一気に飛ばし、羊皮紙を繰る。

少女、少女、成人男性、少女、少年、黒髪。成人女性、成人女性、少女、少年赤毛。少年金髪灰目。少女、少女——。

無機質に並ぶ奴隷の特徴に眩暈を覚える。十を超える人数がまだ、一日分の取引にもなっていない。

懐から一粒宝石を取り出す。魔力で砕くと、とたんに思考が冴え渡る。封じた力を発動する代償魔術。先観の二つ名を持つアンリから贈られた、明晰化の呪石だ。

手痛し喪失だが、背に腹は代えられない。一葉に一秒ほどの猛烈な勢いで目を通していく。

少年金髪碧眼。中ほどで特徴の合う取引を見つめる。だがその価格はたったのフリオリ銀貨二百枚。私の弟がこんなに安いわけがない。また繰り始める。

見つからないかと不安がよぎったが、教典もかくやという厚さの台帳の最終

数ページ前に、あきらかに異質な取引を見つけた。

少年金髪碧眼。特徴の横に大量の備考。端麗無病。文語筆記に会話、ほか数か国語。算術、会計、弁論修辭器楽兵法——そして八百ドミトリアヌス帝金貨に及ぶ法外な買い取り額。そしてエルシリアにも聞き覚えのある豪商の名前。

「間違いない……」

「あら、見つかったの？ 捜し物」
背に差した鉄棍を抜き打ちざま頭上で旋回させ、振り向き、構える。

——いつの間に近づかれた？ いつから見られていた？ 甘ったるい香が鼻に付く。こんな物にまで気がつかなかったのか。

動揺を隠し睨み付ける。
「貴女ね？ アンリの愛しいリア姉さまは」

過剰な艶を含んだ声が耳に障る。とにかく派手な女だった。踵の高い赤の靴。足首が絞られたゆつたりとした朱子のパンタロンは生地が透けているうえに両の腰にスリットが入り、肉感的な脚線が露わになっている。

上半身は紺のビスチェ。扇情的に開いた胸元は不自然なほど盛り上がりつつある。毛皮のストールから覗く熟れた白い肌に、生理的な嫌悪を催した。

娼婦じみた装いにも負けないほど、顔立ちもけはげしい。燃えるように波打つ豊かな赤髪。黒々とした睫毛に縁取られた妖しい瞳。口元には悪意を

媚で割ったようないやらしい含み笑いが張りついている。

何よりも苛立ちを誘うのは、じゃらじゃらと身につけた大量の装身具だ。腕輪に指輪。ご丁寧に十指すべてにつけ爪が施されている。

中でも揃いの意匠の首飾りとピアスは別格の輝きを放っている。国の宝物庫にも等しい物はなかったであろう。

——どれほどの商いを繰り返せばあれほどの品々を身につけられるのか。問答無用で叩きのめしてやりたいと猛る身体をなだめすかし、酷く冷たい声で告げる。

「目的は達しました。痛い目には遭いたくないでしょう？」

「よく言うわ。痛い目に遭わせてやりたいって顔してるわよ？ 美少女が台無し」

「女などどうに捨てました」

「じゃあ弟がそれを拾ったのね」

「……………どういう意味ですか」

「貴女にそっくりの大きなお目々をうるうるさせて、オンナノコのほうを虐めて下さっておねだりするの。とっても可愛かったわ。手放しちゃうのが惜しくなるほど」

全身が憤怒に総毛立つ。気づいたときには腰の短剣を抜いていた。

木製の柄を握り碎き、なかごを露出させる。棍の先端の溝にはめると、怒りを込めて潰す。穂先近くが握り跡の形にくびれた即席の包丁槍ができあがった。

「……………呆れた。オークだつてもう少し優雅だわ」

「泣いて詫ければオークより醜い肉塊にならず済むかもしれませんよ？」

「悠長なこと。人は殺したことがないのね」

嫣然と微笑む女の右手が、いつの間にかピアスに触れている。

「まだだ！ 何故気づかない！」

普段なら瞬時に詰めて手首ごと切り飛ばしているような、怪しい動きを許したことに愕然とする。

ピアスが鈍い光を放ちながら碎ける。崩壊は首飾り、左のピアスと続いた。残光が複雑な模様を描きながら装身具の跡を超えて伸び、やがて円陣を形作る。

唐突に槍の重さが増した。いや、槍だけではなく。身体の要所を守る鎧もくずおれそうになるほど重い。

「うふ。これだけ贅沢な魔術は初めてさすがの、鳳も動けな——」

言葉を持たずに邪魔になった槍を投げ捨てた。遮るように大きな音が鳴る。石床にひびが走った。

先手を打たれて身体強化を解呪された。あるいはそれ以上、弱体化の魔術かもしれない。今の自分は見目相応少女なみの力しか出せないだろう。

だが、不用意に槍へ視線を向けた女に確信する。闘技は素人だ。ガシャガシャと無様な音を立てながらも間合いを詰める。視線を左手で遮り、へその露出した腹に右拳を繰り出した。

「い…ぎつ…貴女なんでもまだ…！」

だが、盾の重さに阻まれて軌道がぶれ、腰骨に当たり、沈黙させることができない。女の問いを無視して軸足を踏みしめる。細首に右足を叩き込もうとするが腿が上がらなかった。

——魔術が進行している！

焦りを思考の脇に追いやつて、とつさに足払いに切り替える。

「きゃっ！」

甲高い悲鳴を上げて女が尻餅をついた。無駄に大きな乳房の上に馬乗りになると肩口を左手で押さえ込む。

「ひっ…ま、待ちなせ——」

恐怖にひきつった顔を潰そうと、右の盾を振りかぶる。

しかし、エルシリアの細腕は背後から忍び寄っていた何者かに掴まれる。そのまま両脇を羽交い締めになれ引き剥がされた。

むき出しの太い手が視界に入る。腕を伸ばして抜けようにも筋肉の壁に挟まれる。有効な手が打てないまま身体の力は抜けていき、ついに宙にぶら下げられたまま動けなくなった。

「な……にをグズグズしてたのよこのノロマ！」

息を切らせてへたり込んでいた女が腰帯に吊つていた短鞭を抜き放ち、エルシリアの頭越しに男の顔を叩く。耳の後ろから破裂音とくぐもった呻き声が聞こえた。

「それが助けてくれた者への仕打ちで

すか！」

吐き捨てた王女を、女はほんの瞬間激情を込めて睨み付ける。

だが、絶対的優勢に余裕を取り繕うと、まだきこえないながらも表情に笑みを張りつけなおした。

「う…ふふ。勘違いしてるみたいね。これはご褒美。証拠を見せてあげる。押しつけなさい」

女の命令により、太股の裏に何か硬い物が当てられた。スカートの生地ごしに、遅れて熱が伝わる。そして首筋にかかる荒い鼻息——。

「ひっ！」

その正体が、男のアレ。だと察して、思わず短く悲鳴を漏らした。

「あら、可愛い声」

「……狂っていますっ」

「うふふ、そうね。だけど貴女もすぐにわかるわ。その狂った世界の素晴らしさが」

女が鼻先に左手の小指を近づける。つけ爪が輝きと共に自壊し、エルシリアの意識は闇へと落ちた。

隅に置かれた燭台が、タイル貼りの内装を申し訳程度に照らしている。薄暗い部屋の中央で王女は目を覚ました。

身体は左側がひんやりと冷たい。床に直接寝せられている。ボルトで固定された鉄枷が四肢を縫いつけていた。

普段なら難なく引っこ抜けるはずだが、ピクともしない。やはり魔術は封

じられたままだ。

肌寒さに、自分が生まれたままの姿であると知った。

「——っ！」

極限の羞恥と焦燥で、心臓が早鐘を打つ。再び悲鳴を上げそうになり、意地だけでそれを飲み込んだ。

先ほどの女が椅子に腰掛け、愉しげに見下ろしていた。斜め後ろには、奴隷の男が控えている。

異様な風体だった。その顔面は口さえ塞がれたマスクで覆われている。

反して逞しい体躯には、何も身につけていない。股間に垂れ下がったグロテスクな凶器が丸見えになっていた。

男に視線をやらずに済むよう、座る女を強く睨み付ける。

「ご機嫌麗しゅう。エルシリア様」

「……名乗りなさいっ」

動揺を見透かしていると言わんばかりに嗤う女に、刺々しく誰何した。

「私？ 私はロクサーヌ。この商会の主よ。奴隷の調教と、お薬の調剤をしているわ」

「では貴女なのですね？ 私のアンリを金貨に換えたのは……！」

そうだ。見つけたのだ。弟の足跡をこの奴隷商の館で。心の内で激情が燃え上がる。

「そう。今度は貴女の番。それにしても……綺麗な身体ねえ。まるで妖精みたい。とっても可愛いわ」

ロクサーヌと名乗った女は、悪びれもせず頬に手を当てうつとりと王女を

見やる。

女の言葉通り、少女の裸身はこの上なく美しかった。

重い鉄槍を振るう姿からは想像もできないほど、エルシリアはか細い。

形のよい鎖骨の浮き出る、抱き締めただけで折れてしまいそうな儂げな風情は、同性の目さえ釘付けにする。

かといって、少女の身体は子供のようによせつぽちというわけでもない。

甘い丸みを帯びたお尻にきゅつとくびれた腰。横寝でたぶんと左に寄った柔乳も王女が年頃を迎えた乙女であることを強く主張していた。

ロクサーヌの思わぬ賞賛に、二の句が継げなくなる。鳳の二つ名を持つ王女に対して、可愛いなどと口にできたのはアンリだけだったのだ。

「……ば、馬鹿にしないで下さいっ」

「悲しいわ。信じてもらえないなんて……本当、いくらになるか想像もつかないぐらいよ」

「たとえ純潔を奪われたって、貴女の売り物になんてなるのですか！」

安い挑発とはわかっていても、堪えきれず怒鳴りつける。

「お馬鹿さん。花を手折る権利が、一番高く売れるのよ。私のお仕事は貴女の価値を更に出せること。身体の中まで綺麗にしてね」

意味深な言葉に、悪寒が走った。ふと臀部の違和感に気づく。口にすることも躊躇われる所に何かを差し込まれているような——。

勢い込んで振り返る。背後には金属台にかけられた満杯の革の袋。伸びる管が腰の後ろに向かっていく。

「な、なに、何ですかこれは！」

「知りたいの？ 教えてあげなさい」

主人の言葉を受けて、奴隷男が近づいてくる。

何をするつもり？ 袋の中身は何？ 根元の留め具に手がかかる。鉄が擦れるのも構わず手枷を抜こうと暴れる。外れない。外れない！

そうだ。管の先はお尻に。なら息めば——でも、そんなはしたない真似！

思考だけがぐるぐると空回りしているうちに、弁が開放される。生温い液体が腸内に流れ込んだ。

「う……うう……いやあ……っ」

逆流の恐怖に暴れることもやめ、されるがままに薬液を注入される。得体の知れない何かの身を撫でる感触は、ただひたすらに気持ち悪い。せいぜい二分程度の注腸の時間が、数時間に及ぶ責め苦のように感じられた。

「あうんっ」

少女の秘すべき花園を踏み荒らした管が抜かれる。そのまま粗相をしてしまうのではないかと恐ろしくなつて、尻たぶにえくぼができるほど括約筋を締めつけた。

器具一式ごと、男が元の位置に戻る。さまは、まるでこれから起こる悲劇から回避させたようで、王女を絶望的な気分させる。

刺激を嫌い、無言で女を見上げる。

縋るような目になってしまふのが、悔しくて仕方なかった。

「不安げなお顔も、とってもそそのわ。今貴女のお腹に入れたのは特製の流腸液よ。中の汚い物をすばやく溶かしてお肉を柔らかくしてくれるの」

「なんで……こんな……！」

「うふふ。今から貴女のお尻の穴を、殿方にご奉仕するためのエッチなおまんこ穴に改造するの。汚れたままだを好む方もいらつしやるけど、大抵は気持ち悪さで萎えてしまふわ。それに、どんな綺麗な子でも身体の中には毒がいっぱい。ちゃんと処理して挿れないと、一分経たずにおちんちんが腫れて痛くなつちゃうの。毒消しの効果もあるのよ？」

そんなことを訊いているんじゃないと怒鳴りつけた。だが、とうにそんな余裕はなくなっていた。

額に脂汗を浮かべ、色みの変わった唇を震わせながら排泄を堪える。身体末端から血の気が引いては悪寒を走らせ、へその下がきりきりと痛む。

「あら、そんなに我慢しなくていいのよ？ どうせ一回じゃ出し切れないんだから。それとも緊張で出せなくなつちやつたかしら？ そういうときは左の脇腹を下に押し込んでみるといいわ。手伝ってあげなさい」

だが、ロクサーヌは抵抗をあざ笑うように再び男に命じた。

「い……いや……っ！」

近づいてくる。股ぐらの芋虫をむく

わくと膨らませながら。理解できない意味がわからない。ぽっこりと膨れた白い下腹に節くれ立った手が触れる。絶叫がこだました。

尊厳を根こそぎにされた気がする。それも繰り返す。水で流された後も籠もる臭気が、自己嫌悪を掻き立てる。油断すると鳴咽を漏らしそうになるのを必死で堪えた。

「こ……これしきでっ、わ、私が言いなりに、なると思ったらっ、お、大間違いです……っ」

「当たり前じゃない。こんなのはただの下準備よ？」

涙声での強がりさえ軽くなされる。顔が赤くなるのは羞恥のためか怒りのためか、もう自分自身でもわからなかった。

「心配しなくても、これからちゃんと気持ちよくしてあげるわ。待ち遠しくて、自分から進んでお流腸するようにするまでね」

高みの見物を決め込んでいた調教師が初めて近づいてくる。捕らえられたときと同じように、魔術で眠らされた

「もういいわ。起きてちょうだい」

柔らかな手が頬を撫でる。つぶらな瞳をとろんとさせながらも、エルシリアは意識を取り戻す。

頭の上で、じゅらと鎖が鳴る。両手を縛められ、天井に繋がれていた。半身を侵していた不快なぬめりはす

べて清められている。自らが悪臭の発生源になっているという、耐えがたい恥辱からは解放された。

加えて、いつの間にか絹の下着一揃いを身につけている。先ほどの扱いに比べれば幾分かマシなはずだ。

それでも、胸元に施された鎧と同じ鳳の刺繍だけはどうしても許せない。騎士としての誇りを、アンリとの絆を酷く愚弄するものだった。

「ばっ……馬鹿にして……っ！ 私の鎧……返して下さい……っ」

思考がぼやける。ぐずる子供のようにな可愛らしい抗議にロクサーヌは歪んだ慈愛を込めて微笑む。

「フリルとレースが女の鎧。あんな無粋な物、貴女にはもう必要ないの。よく似合ってるわ」

確かに純白の下着は吸いつくように身体に馴染んでいて、それが余計に悔しい。

細い腰を更にコルセットで締め上げるビスチェドレスにはお尻が隠れない短さのフリルスカーツが縫いつけられている。

肘までの手袋や、清楚なガーターストッキングも含め、総レースの見事な代物だった。

だが、最も秘すべき聖域を隠すものがない。髪色と同じ金に輝くしげみと、その下の二つの丘に守られる、狭く細い桃色の陰唇だけが露わになっている。ある意味全裸よりよほど扇情的だ。

童顔の王女が纏う背徳的な露出下着

は、意匠の少女趣味と相まって、倒錯した色気を醸していた。

頼りない感触が、身体を無意識の内にくねらせる。思い知らせるように、また鎖が鳴った。

「なあに？ 誘ってるの？」

見咎めて愉しげに調教師は王女を詰る。

ビスチェに隠された林檍のような初々しい膨らみの上に、メロンを思わせる爆乳がたぶんと乗せられた。

「やつ……んっ……！」

悩ましく反った背中を、無防備な脇を、女主人が撫で回す。

シルクの滑らかな感触が擦れ、留め紐の隙間から直接に触れられる。甘いこそばゆさが背筋を走った。

悪意の柔手は下半身に伸びる。巧みに丸出しの小尻を避け、腰骨を通り、太股へ。

「若い手触り。嫉妬しちゃうわ」

もぎたての葡萄のような張りのある肌を思うさまに堪能し、熟し切った双乳をゆすゆすとすりつける。

硬い蕾を温め開くような優しい愛撫に不自然なほど身体が火照っていく。薄い生地にじんわりと汗が染みる。

ふいにロクサーヌが片手を離し、何かを取った。

その正体を確かめるまもなく、柔桃の奥の、密やかな窄まりに押し当てられる。ぬちゃりと粘つく潤滑液が、肌に障った。

「ひっ！ なあにっ!？」

怯えた声を上げるが、緩みかけた身体は酷く反応が鈍い。

僅かな抵抗さえできず、浄化された内臓器官は、されるがままに未知の道具をぬぶぬぶと受け入れた。

「え……？ う、うそ……！ あ、やあ！ やだあ！」

大きな目を更に見開き、寄る辺をなくした子猫のような、悲痛な鳴き声を上げる。

人の指を過剰に長くしたような何かを、調教師は粘膜を傷つけぬよう、くくにと回した。

「ななななにをいれたんですかやめてくださいぬいてください！」

「スライムを煮詰めて造った張り型よ透き通って綺麗なの。後で見せてあげる。おちんちんそっくりの感触でしょ？」

「し……知りませんっ、そんなのっ！ んんっ！」

「もつたいないわ。今からたっぷり教えてあげる」

女の手指が尻たぶを撫で回す。力みできゅっと締まった、それでもなおふにふにと柔らかい媚肉を更に持ち上げるように揉みこむ。その間も淫具は巧みに体内に固定され、体中に鳥肌を立てせる。

「綺麗にしたからとつても柔らかくないってわ。痛くないでしょう？」

調教師の言う通り、痛みはない。ただ排泄孔を陵辱される異常感覚に翻弄される。

蹴り飛ばして撥ね除けることもできないはず。だが、奇妙なけだるさに、どうしても力が入らない。

呼吸が乱れ、女の纏うムスクの香りが肺に充滿する。余計に身体が火照り、肌が敏感になっていく。

「変です……っ……この匂い……!」

「女を狂わせる媚薬香よ。中毒にはならないから安心してね」

自らもうつすらと頬を紅潮させながら、柔尻から離れた手で真白の肌をロクサーヌは愛でる。

膝頭から内腿を、開いた手のひらがい上がる。背骨に沿って親指の爪が優しく肌を搔く。

その間も、ねち、にちとデイルドが直腸をこねる。下腹がきゅうと疼いて締めまり、掲げられた手を握り締めた。

「やつんっ……こんな気持ち悪いことして……何になるのですかっ!」

「気持ち悪い? それにしては甘いお声ね? それに、お尻は欲しがって放してないじゃない」

「……………んんうっ!」

女の言葉を否定したいという一心で、恥じらいを捨て、排泄時のように息むだが、ぬるりと腸壁をなぞり抜けかけた責め具を再びねじ込まれた。

「ひうっ!」

「だめよ。はしたない」

毒婦はくすくす和噛いながら、菊花をこね回す。からかわれたのだと気づいて、かっ顔が熱くなった。

「もう、なんて可愛い……!」

調教師が興奮の面持ちで艶めかしく吐息を漏らす。蠱惑的に唇を歪ませながら、豊満な肢体を密着させてくる。

たぶたと揺れる熟女の胸肉が、サラサラの生地を通して王女の果実を颯る。その先端が、若芽が萌えるように膨らみしこり始めた。

「いやっ……あんっ……違います……こんな……!」

極度の羞恥に瞳が潤む。はしたなく漏れる声が悔しくて、泣き出す前の幼子のように唇を囁んだ。

「何も違わないの。か弱く身体を震わせて、可愛いお顔を真っ赤に染めて、殿方にお情けをねだるのが女の子の本当の姿。間違っていたのは長物を振り回してお転婆をした今までの貴女だから、ここで気持ちよくなるのも自然なことなのよ」

尖る胸先の痺れを、火照る肌の疼きを、巧みに尻穴を颯られる違和感に混ぜられ、すり替えられていく。思考が千々に乱れ、言い返すこともできない。妖しい感覚が腰骨の奥を走る。

怖い。敵意も吹き飛ぶほど、未知の淫らな刺激がただ怖い。

王女の昂りを調教師は目敏く察し、淫具の動きを大きく速くする。入口の窄まりがぐちり、ぐちりと回し広げられる。

「やつ……あんっ! やつ……んんっ……お、おかしいですっこんなの……!」

背筋を強い震えが駆け上がっていく。涙が滲んで視界がぼやける。いやいやするよう

に身体を左右にひねると、小尻が可愛らしく揺れた。

知らずに力がこもり、腕を締めようとして鎖に阻まれる。背中

は反って、内股になりはしたなく内腿をもじもじとすり合わせる。

「気持ちいいのね? いいのよ? ほら! お尻の穴こねこねされておかしくなっちゃうなさい!」

狭まる後ろの肉洞を、ロクサーヌは更に速度を上げてこじ

る。くちやくちやと卑猥な音が耳を颯り、双臀がぶるぶると震え出した。

「やめて下さい……! あっ……なかに!? ふうっ! んんんんうっ!」

瞬間、腰がビクンと跳ねた。括約筋をきゅつと締めつけ、思い切り食いしばった口から嬌声を漏らし、絶頂という言葉も知らないまま絶頂した。

何が起ったのかも理解できない。ひくん、ひくんと細い身体を愛らしく痙攣させながら、混乱の極みの中、ただ荒い息をつく。

「初日にイッた子はさすがに初めてよ。さすがに王女様、ケツマンコ奴隷の才能もお持ちでいらっしやるのね」

屈辱のないやらしい言葉に、耳まで顔を染め、ただ恥じらうことしかできなかった。

「あうんっ!」

狭い肛道をこね回していた調教師が引き抜かれる。淫薬を刻み込まれた菊門が名残惜しげにヒクついた。

「とっても可愛かったわ。ご褒美をあ

げる」

くterりと身体を弛緩させた王女目の前で、何を思ったか調教師は、潤滑液と王女の腸液でぬらぬらと光る疑似肉棒を、ぷつぷつと肉厚の唇に含む口をすぼめ、表面をうごいてちゅぽんと抜いた。

あつけにとられ固まっていると、女主人はぶにぶにと柔らかい頬を両手で挟み、桜の花びらのような唇を奪う。

「んう……!? や、やめて下さいっ!」

強烈な忌避感が湧き上がり、一気に陶酔から醒めた。しやにむに暴れ、ロクサーヌを肩で突き飛ばす。

「……おかげで目が覚めましたっ!」

正直喋ることさえ気持ち悪い。燃える瞳で睨み付ける。

「平気よ。あんなに綺麗にしたらんだから……ふふ。でも、調教しがいがあるわ。毎日太くしていつてあげる。おチンポはめられるまで広がったら、たくさんずぼずぼしてあげるから、楽しみにしてね」

恐ろしい台詞に、ぞわりと鳥肌が立つ。引き抜かれた後も残る官能の残り火を、必死で意識の隅に追いやった。

長い長い透明の蛇の頭が二度三度と腸奥をこねると、ずるりと一気に引き抜かれる。

「きああああああつ!」

大きく張ったかえしに臓腑を掻きむしられ、エルシリアは甲高く絶叫した。身体中から風邪をひいたように汗が



イセリア 英雄戦記

the legend of the Iserpa war



帝国末姫による爆乳調教を受けたフィオナは
ついに非情なる皇帝ギユスターヴに献上される。
国の威信と誇りのために気丈な態度を取るも、
露出過多な恥辱の姿をキャンパスに描かれ、
屈辱の処女喪失を味わう!

第14話 被虐姫破瓜画

せんやよみ
小説 千夜詠 挿絵 ぼたん 牡丹
NOVEL ILLUSTRATION

時代の行く末を暗示するような鉛色の厚い雲に覆われた空。北方の大地に肌突き刺すような凍つく風が吹き抜ける。煉瓦造りの灰色の街並みに戦時の重苦しさを示すような住人の表情がいくつも過ぎていく。そんな帝国城下の片隅に別世界のような賑わいを見せる一軒の酒場があった。

昼間から荒くれどもが酒を呷って大声で騒ぎ立てる。落人から傭兵に身をやつし、故郷を思い出してやたら泣く者。その隣のテーブルでは正規兵の一団が制服の襟を崩して、派手な女を脇に寄せては猥談で盛り上がっていた。カウンターの流れる。召し抱えられたの出世を夢見て、現実の厳しさに愚痴を零す。真つ黒なローブに身を包んだ怪しげな男もいれば、盗賊が堂々と賭け事を楽しんでいた。ここは客を選ばず、誰も拒まない場所。自分の身を守る術さえ持つていれば、この国で一番過ごしやすく、もつとも怠惰な空間だった。

軋むような扉の音を立てて、またひとりがここに足を踏み入れる。ここ数日も通い詰めた常連ならば知っているその姿であるが、そうでない者は興味と驚きを込めた視線で彼女を追った。あまりにも場違いであつたからだ。「にやんにやんにやア、ふにやにやにや、にやア……」

能天気すぎる鼻歌を口ずさみながら、吹き溜まりを絵に描いたようなこの場所を臆することなく進みゆく。屈強そ

うな男たちの胸元にも届かないちびっ子だった。目を引くのは頭部に近い場所。にふたつ突き出た猫のような耳。愛らしく振られる臀部からも猫の尻尾が伸びていて、歩みの度に左右に揺れた。高貴さを感じさせる赤いドレスに首に鈴を着け、ただ胸元と肩にだけ強固なプレートが張りついている。そして細い二の腕にコックの帽子を被つたぬいぐるみが抱きついていて、濃紺の髪をふたつに結わえた美少女。チラリと視線を送った途端に、その男の目尻は下がっていく。人殺しに心を痛めぬ輩が、まるで溺愛する孫を見るような眼差しになるのだ。そのくせこげ茶色の気の強そうな瞳にドキッと女を感じさせる。一度カウンターのを見上げるようにして、よいしょ、と高い椅子の上に座り込んだ。

「親父、ミルクにや」
あらかじめわかつていたようにオーダーの直後には彼女の前にジョッキに注がれた牛乳が置かれる。
ぐいっとそれを飲み干すと、
「ぶはっ、この一杯のために生きてるにや……」

黙ってお代わりを注ぎ込むマスター。そんな彼にくだを巻くように大きな猫目を細めて少女は言う。

「この間の情報……、まったくのガセだったにや。町一番の情報通じやにやかったのか、まったく……」
「勘弁してくださいよ、ミーニャンさん。淫祇邪教なんて、噂話程度しか聞

こえてこないですぜ。本当にそんなのあるんですかい？」
苦笑いを浮かべる初老の男に、うにゆにゆ、つと唸ってさらに瞳を据える。だがまた一口ミルクで咽を鳴らすと、濃厚な味わいに口角を上げて機嫌の回復を示す気分屋ぶり。そんな表情をコロコロと変えるミーニャンのカウンターに、帝国兵らの噂話が届いた。

「おい、見たか、イセリアの皇女があるのあばずれ姫に連れられて王宮に入ったのを」
背中越しに聞こえたそれにピクッと大きな猫耳が動く。

「おいおい、滅多なこと言うなよ。あれでも一応、姫様なんだからよ」
「それよりイセリアの皇女さ。ちらつと見ただけだが、これまで陛下のもとに連れてこられた女の中でも、ありや、最高じゃねえか。乳も、へへ、でかかつたしよ」

「ああ、清楚で可憐といった顔立ちなのに、すっげえエロい身体つきしてたぜ。ちくしょう！ あれも、陛下にヒイヒイ泣かされるのか」
ほろ酔いかげんの兵士たちは、敵国の姫君が陵辱に喘ぐ淫らな姿の妄想を肴にジョッキを空けていく。愛国と忠誠を誓った公国の騎士がここにいたならば、闘気を剥き出しにすぐに剣を抜いてその口を塞いでいたことだろう。

カウンターの向こうではマスターが小さな溜め息をついた。
「やれやれ、最近じゃ、城付の兵まで

昼間つからやつてくる。前線には魔物までいるっていうし、どうなっちゃうって……つて、ミーニャンさん？」

いつの間にか小柄な猫耳少女はカウンターから消えていた。乱雑に酒瓶の転がったテーブルとテーブルの隙間を縫って、彼女は帝国兵らの前に立つ。

「んあ？ 何だお嬢ちゃん」

星の煌めきを全身に纏つたような愛らしい容姿を一度舐め回すように見詰める帝国兵ら。目尻がぐつと下がっては、むさくるしい場所に現れた華の存在にやけるのだ。

「お兄さんたちと一緒に話したいにや。そつち座つてもいい？」

モジモジと愛くるしく大きな瞳で見詰めてくる姿に、父性と男をくすぐられる兵士。猫招きの手の形で頬を撫でる仕草を見せながら、眼差しはドキリとするほど妖艶に流れた。

「ちっちゃいのも、これはこれでアリだな。へへ、いいぜ、こつちに来な」
刹那の間、少女は微かに口角を上げる。ニコニコとあどけない笑顔のその裏には、まだ爪は隠されたままだった。

靴底が沈み込みそうな赤い分厚い絨毯。頭上には寶石がちりばめられたシヤンデリアがあつて、壁際の家具やテーブルの上には数多の芸術品が置かれてある。どれも大陸に名を馳せた逸品や亡国王家の宝であつて、どれほどの搾取のもとに成り立っているかを考えるだけでその横暴なる本質が窺えた。

今、フィオナは蛞蝓のように全身に這い回る情欲の滾った視線に怖気ながらも、気丈に目の前の男に抵抗の意思を示した瞳を向けている。彼の名はベリアルド・オーギュスタン。ギユスターヴという名でも知られた、悪意の君主、バードベルグ帝国の皇帝である。「……久方であるな、イセリア英雄公国第一皇女フィオナ・ブリティッシュよ。いつぞやの、会談以来か」

帝国の城の一室に彼が現れてから数分が過ぎてからの、ようやくの言葉だった。向かいあわせた椅子に座ったギユスターヴは、メイベルローゼに退室を命じた後のこれまで、豊満にして若く瑞々しい皇女の肉体をただ舐め回すように見詰めていた。黄金よりも輝かしい髪の毛ひとつとつ。清純な淑女に無垢さをまだ保ち続けた顔立ち。大人しそうでありながら芯の強そうな瞳。潤いを継続させて、ぶつくりと色香の滲み出る唇。肉体のラインをまざまざと見せつけてくれるレオタードの肢体には、その何倍も視線で握ね回した。「オーギュスタン皇帝、不躰ですが、まずお聞かせ願えますか。貴方はなぜ故に、戦火を大陸中に広げようとなされるのです。魔物まで使い、村を、国を蹂躪し、他国を虐げる。そのようなこと……」

高揚し頬を赤らめた皇女の言葉を遮るように、その欲望の大きき通りに腹を膨らませた男は言った。「覇道の欲に忠実である。それだけの

こと……。のう、フィオナよ、たかだか人の短い人生にどれだけのことが成し遂げられる。ワシは、望みますべてを手に入れた。たとえそれが強引な手法であつても、成す力があれば行おうぞ」

「他者を蔑ろにしても、ですか？」
「無論……」

不遜な笑みを浮かべるギユスターヴ。傲慢などす黒い瞳が、お前も欲望の生け贄であるのだと語りかけてくるようだった。美姫の腋の下に嫌な汗が流れ、唇を噛み締めるようにして身体地震えを何とか抑えている。

「さて、ここからは、ワシから質問、いや、命令させてもらおう。我が軍門に下り、絶対なる忠誠を誓え。従属するのならば、お前の国への侵攻を考え直してやらんこともないが」

予測はしていたが、単刀直入であつた。対して、逃げず、媚売らず、反抗の意思で睨みつける。

「お断りします」

額から汗がひとつ流れていく。鼓動は、予期する陵辱に高鳴り、肘掛けの上で拳をぎゅつと握り締めた。

「ほう、数倍の戦力をもつて、貴国に押し寄せようぞ」

「我が敬愛するイセリアの騎士たちは、挫けず、恐れず、何者にも屈することはないでしょう。わたくしは、彼女らを信じています」

言ってしまった、という後悔がまったくないわけではない。だが発した言

葉に本心からの偽りはなく、そんな騎士らに報いるためにも、自らが先じて膝を折ることなどできない。

決意の姫君に、皇帝は満足げな笑みを浮かべた。

「くく、やはりお前は見込んだ通りの、いやそれ以上の女になった。楽しませてもらうぞ、フィオナ」

獲物をいたぶる前の悪魔のような顔つきで、ニタリと口角を上げるギユスターヴ。吐き気を催しそうな脂ぎつた男の体臭は、ひどく猥褻なものに思えて仕方がなかった。

あと十年若かったなら、下着のないそのアリーナレオタードの姿を見ただけで、己の男性を滾らせ、すぐにでも押し倒して強引にでも肉槍を突き立てていたことだろう。

気高く美しく成長を遂げた姫君は、聖人の理性をも乱すほどに官能的な肢体を持っていた。瑞々しい果実のような豊乳は美しい釣鐘状であり、その部分はすでに男を憶え込まれて、どこか淫靡なおいを発するようになっていた。自ら先頭に立つて国を動かしてきたせいか、その腰には飽食の陰りもなく、よく引き締まった括れを見せていた。逆にそこから流れるような曲線太腿は戦士にはない柔らかなほどよい脂肪の付き方をして、この上なく扇情的なのだ。

「うっ、はあ、あ……乳房、だめ……」

椅子に座り、グラスを片手にギユスターヴは愛撫され続けるフィオナを見詰めていた。

もはやいつでもその純潔を奪うことはできる。念願の成就を直前にして、彼はその高揚していく気分を楽しんだ。

犯す前に服従させてやる。アリーナレオタード姿のフィオナをベッドに仰向けに寝かせ、その両手と両足を鎖で繋いでやつた。屈辱に顔を顰めた皇女がむしる可愛く見えて仕方がない。全身をねっとり見てやると、何とそれだけで乳首を勃たせるではないか。その時思った、自分から「イかせて」と叫ばせてやると。

「も、もうやめ……て……。んっ、はあ、お股っ、触らないで……」

ベッドの周りを五人のうら若き乙女が取り囲んでいる。皇女に羨望と嫉妬に満ちた瞳を向ける彼女らは、すでにギユスターヴの性奴隷へと堕ちた亡国の姫君や高位の女官である。皆、裸同然の下着姿であつた。

「ほうら、フィオナ姫、太腿の内側が、ぬるぬるになってましてよ」

「ぬぶ、ちゅ、ちゅばっ……、はあ、さすが名高いイセリアの皇女、乳首もこんなにエッチに発情させて……」

「あらあら、また身体をピクピクさせて……でも、まだイかせてあげませんわよ。ふふ……」

彼女らに命じて、自由を奪ったフィオナの肉体を延々と弄はせている。だが決して一定以上には気を高めさせな

い。絶頂に導かれようとする直前でやめ、呼吸が整い出すとまた繰り返される。無理矢理性悦を染み込ませられるのに、一思いに楽にさせてもらえない皇女は眉をひそめる泣きそうな顔をしながら時折恨めしそうにこちらに視線を向けてきた。

（すでに、五時間……、イクことを憶えさせたと聞いたが、その割によくここまで我慢している。大した精神力と言わべきか）

豊満な肢体を汗ばませ、広げられた股間では、切れ込んだレオタードの脇から、ぬちゃぬちゃと淫蜜が漏れて一帯を光沢させている。全身が朱色に染まり始め、くねくねと腰をくねらせては、時折背を仰け反らせた。それなのに、皇女の口から屈辱の宣言は未だ発せられないのだ。

（強引に誘うだけでは駄目、ということか？ 何とかして暴いてみたいものだな、あやつのを……）

ドンドン、と激しく扉を叩く音が聞こえた。無粋な奴もいたものだ、顔を顰めるが、「入れ」と一言低く発する。「し、失礼します。早急のご報告があったものですから……」

開かれていく扉にフィオナの視線が向かっていた。「ヒ」と小さく唸って、瞳に潤いが生じていく。美麗な顔がさらに真っ赤に染まって、強い興奮を示すように呼吸が深く、球状を保って急速に隆起した豊乳が上下する。それを見逃すギユスターヴではなかった。

濃厚な若々しい牝の香が充満しているこの広い部屋に入ってきたのは、若い男性の親衛騎士である。彼は恥ずかしそうにベッドで絡みついた女たちの痴態から目を背けるようにした。

「用件は何だ？」

「はっ、陛下。実は城下にて、我が軍の兵士数名が何者かに惨殺され……」

「そんなことか……。軍のことは息子どもに任せておる」

「しかし、ウォルガード將軍も未だお戻りにならず……」

「小事のことはよい。それよりも、お前も見ていかぬか。なかなかの光景であろう」

非道な蹂躪も話に聞く帝国軍であったが、ウォルガードの影響の濃い部隊にはこういった生真面目な兵も少なくはない。

「わ、私は、そんな……」

だが股間の膨らみは隠しきれない。そんな風に欲望を偽って何が楽しいのかと、皇帝は鼻で笑う。

「命令である。目を背けず、見ていくがよい。そうだな、あの大陸」と謳われた美姫、フィオナのオマンコでも見せてやろう。今宵のおかずにもですればよからう。くく……」

皇女の顔がそれを聞いて引き攣った。楽しげな含み笑いを浮かべる女たちのひとりが、レオタードの下腹部の脇に手をかける。

「や、やめて……、わたくしの不浄なところ……み、見ないでえっ！」

若い男の唾を飲み込む音が聞こえた直後、ぐいっとレオタードの股間部が脇に寄せられる。

「いやああああ——っ」

きつく瞳を閉じて顔を背けるフィオナ。さらに濃厚な、汗と粘膜と淫蜜の混じった、甘い乳製品のような女陰の香が放たれる。

皇帝も初めて拝むそこは、髪よりも少し濃い色をした恥毛が、ぐっしりりと牝汁に塗れ微肉に張りつき、熱い泥濁と化した肉ピラの粘膜が猥褻な形状に歪んで肌色からサーモンピンクを露出させていた。

「う、うう……見ては……見ては、ありません……。こんな……、ふあ、はああ、ハア、ハア……」

今すぐむしゃぶりつきたい衝動に駆られながら、ギユスターヴはほくそ笑む。（そういえば、何度か不特定多数に裸を晒す憂き目に遭ったのだった。なるほど、そういうことか）

視線に煽られ、どくどくと音を立てるほどに淫蜜が肉裂から吐き出されていく。今は誰も肌に触れぬ状態でありながら、それ以上に身体を弓なりにする敵国の皇女の姿に、おぞましい計画を思いつく皇帝であった。

らと言って気分が暗れるということはない。当たり前の下着に、当たり前前のドレスを与えられたことは、むしろ拍子抜けするほどだ。ただ、ギユスターヴは夜な夜なやってきては、フィオナと同じベッドで別の女を抱いた。決して手を出してはこない皇帝。横たわりながら顔を背け、背中から女の卑猥な嬌声と肉棒を求める哀願を聞かされる。あの日、絶頂を迎えることのできなかった身体は火照り、強烈に刺激を求め、何度もこつそりと指先が下腹部へと伸びていきそうになった。女があまりにも男の逸物を欲するので、そんなにいいものなのかとつい考えてしまう。すでに乳房と菊門はその味を知ってしまった。穢れた行為に及ぶのは踏み止まっても、次の日には替えの下着を差し出す侍女に、真っ赤になりながら染み汚した使用済み着を渡している。

「はア、フィオナ、元氣してた」

下着同然のボンデージ服を着たメイベルローゼが顔を現した。このパールドベルグ城内にあってもそのスタイルを通す彼女に、そんな破廉恥な姿をしていて恥ずかしくないのかと微かな蔑みを瞳に宿してしまふ。

「メイベルローゼ……、ルシィフは無事なのですか？ イセリアは、情勢はどうなってますか？」

「はいはい、お喋りの時間はなしよ。……ついてきなさい」

もうどんな質問も受けつけないという雰囲気醸し出すメイベルローゼに



対して、フィオナは大人しくついていくしかない。奴隷扱いされていた旅路と違って、ここ数日の間、比較的まともな扱いを受けていて警戒心が薄らいでいたせいもあった。

灰色の壁をした本丸から一度外に出される。冷たい外気を感じると、オリオで一件を思い出して、この感覚こそが本来のものなのだと思い知ると同時に、自分が今正常であるのだと安心できた。

ほどなくして、囚われの皇女はバインドベルグ城の敷地内にあった迎賓館に入る。通された控え室は質素で薄暗く、そこには数人の、ひどく冷たく、感情を持ちあわせていないような瞳をした、侍女が待っていた。

「ここで、お着替えしてちょうだい。それを素肌身に着けてちょうだい」
皇帝の末姫の視線の先、壁にかけられたそれを確認した途端、フィオナは顔を蒼白にさせる。

「こ、これは……」
動揺を隠しきれない皇女の様子にメイベルローゼは楽しそうに笑みを浮かべ、侍女らに非情の命を下した。
「あはは、さあ、とつととひん剥いて、そいつを着せなさいな」
数本の手にドレスを引き裂かれながら、さらなる辱めの予感に肉の疼きを憶えてしまう英雄国の姫君であった。

第一級の勅命がバインドベルグ及び同盟国に到達されたのは三日間。伝書

鳩と早駆けの馬を使つての迅速なものであり、それから僅か一日半で彼らが集められたのは、強引な手法と褒美の大きさからであつただろう。

ほとんど休みなく移動させられた彼らの多くは、それでもきらびやかな迎賓館と設けられた壇上を囲むように並べられた無数のイーゼルに設置されたキャンバスを見て、一種の感動を憶えたという。

総勢で百名を超える絵師が国の内外からここにやつてきた。教えられたのは、莫大な褒賞と創作意欲を存分に湧き立たせるモデルが与えられるということだけだった。

「バインドベルグ皇帝、ベリアルド・オーギュスタン陛下のご登場である」
恰幅がよく畏怖を憶える威厳を備えた男の登場に、それぞれのキャンバスに位置した絵師らは深々と頭を下げる。
「よい。頭を上げよ。ぬしらには真つ直ぐとこちらを見てもらわねばならぬのだから」

集まつた面々にギュスターヴは満足げだ。特に有名な芸術家はもつとも近い場所に陣取らせている。
「では、早速ではあるが、モデルを紹介しよう。さあ、来るがいい」

ギイと重い扉が開かれる。一斉に百名を越えた人間の視線がそちらに集中し、期待を込めて注ぎ込まれた。

逆光の中現れたのは、皇帝の末の娘メイベルローゼである。確かに美しい顔立ちの少女であり、ふむ、と納得の

いったような領き声ももれた。だが、その直後、陛下の御前という状況も忘れて、大きなどよめきが起つた。

ボンデージ服を着た姫君の持つたロープに繋がれ、後ろからもうひとり少女が現れた。

おお、と歓喜に似た声をあげ、芸術家らは瞳を輝かせる。

艶やかに煌めく黄金の髪。無垢な清純さを醸し出す美麗な顔立ちと生まれもつての気品に溢れていた。それなのに何という背徳的な色香のあることか。而腕は頭の後ろで縛り組まれ、濃厚な牝をにおわせる汗ばんだ腋の下が丸見えになっている。首輪を施され、無理矢理引つ張り出されていく彼女の顔は、今にも泣き出しそう、頬を桜色に染め上げ、強烈な嗜虐を煽ってくるのだ。

「み、見たことあるぞ。まさか、イセリアの……フィオナ皇女……」
「あのティアラ……間違いない。それに、あの鎖は……」

緑色の女性用の簡易アーマーは、まさしくイセリアの王族にのみ、装着の許されたものである。だが今のフィオナには、本来中に着込むレオタードがなかった。無論下着もない。

（誇り高い英雄公国の皇女の証……。たとえ偽物でも、こんないやらしいものに貶められてしまうなんて……）

皇帝の末姫が用意したのは、形だけを似せた本物ではない精霊装甲であつた。それだけを素肌に身に付けさせら

れると、もつとも恥ずかしい鼠蹊部の一帯は丸見えの状態なのだ。しかも、「おお、何と大きく美しい乳房……。自然にこのような芸術が生まれるとは、まさしく神のみのなせる業」

「乳房と乳輪の大きさもバランスよく、何とエロティシズムに溢れる形。まさしく、最高の素材」

顔の熱がまったく引いていかない。末姫の用意したこの偽の精霊装甲には、胸当ての部分だけがなかった。

キャンパスの隙間を通して、歩かさかさと重量感を視覚に伝えてしまう。熱すぎる大量の視線に、すぐに身体中が汗ばんでくる。頼りなく無防備な股間も直接外気を感じ、外よりも少しばかり温かい程度なのに、露玉ができそうに蒸れてきてしまう。

（こ、こんなに大勢の人たちに、恥ずかしい姿を見られ……。はあ、身体が震えるのに、何……？ あ、あそこが疼いて……。掻きたい……）

衆人環視で女陰を弄くり回す自分の姿を刹那想像してしまう。カーとさらに顔を真っ赤にして頭を振った。それでもどんな風に見られているのかが気になって、瞳を細めて周りを見た。爛々と血走った目が渦巻いている。

ブルツと身を震わせ、身体中に電流が走っていくように思えた。いつの間にか呼吸が乱れ、汗に光沢出した釣鐘状の肉果実が深い膨張・収縮を見せる。「グズグズしてるんじゃないわよ、牝

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>